SAObr — System Artificial Operation by reincarnation —

<<

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

鳴り響いた鐘の音。語られる無情な宣告。溢れ出す恐怖。

そして、その終わり。

俺は思い出した。知っていたのだ、全てを。

これは、デスゲームの始まりを合図に、自分が転生者でこの世界が前世では愛読していた小説の世界だと思い出してしまった少年のお話。

主人公にも大分秘密がある（予定）

気紛れに更新していければなと思います。タグは随時追加変更あり。

シリアス多め？　作者がキリアス大好きなのでキリアス要素は今後増えていく予定。

※やたらと長い題名なのでＳＡＯｂｒで覚えてくださると嬉しいです。

目次

人物詳細 ―― 1
番外編ＩＦ　０１．なんてことない閑話 ―― 4
番外編ＩＦ　０２．ある転生者の戯言 ―― 8
ＳＡＯ編
００．プロローグ ―― 11
０１．はじまりの街 ―― 14
０２．教会 ―― 19
０３．腕の中 ―― 24
０４．原始の森 ―― 30
０５．第十一層　タフト ―― 36
０６．黒の隣 ― １ ―― 43
０７．黒の隣 ― ２ ―― 50
０８．黒の隣 ― ３ ―― 58
０９．第二十七層　迷宮区 ―― 63
１０．第三十五層　迷いの森 ―― 71
１１．第四十九層　ミュージエン＊ ―― 78
１２．第五十層　アルゲード ― １ ―― 86
１３．第五十層　アルゲード ― ２ ―― 94
１４．第五十層　アルゲード ― ３ ―― 103
１５．第五十層　迷宮区 ― １ ―― 110
１６．第五十層　迷宮区 ― ２ ―― 118
１７．俺（今世）と俺（前世） ―― 126
１８．第五十層　迷宮区 ― ３ ―― 134

人物詳細

【ＳＡＯｂｒ主人公】

名前：アルス（プレイヤー表記：＊＊＊＊）

本名：＊＊　＊＊

性別：男

年齢：１４歳（ＳＡＯ開始時）

誕生日：２００８年＊月＊日

髪色：＊＊

瞳の色：＊＊

二つ名：特になし

ギルド：無所属

ＳＡＯの元βテスターだったが、正式サービスの日にＧＭである茅場　晶彦により告げられたデスゲームの言葉をきっかけに、自分が転生者だと自覚してしまう程の記憶を思い出してしまう。

約一ヶ月ほど思い出した記憶のせいで塞ぎ込んでしまっていたが、第一層はじまりの街東七区にある教会にて、サーシャ率いる子供たちを触れ合うことで前を向き進むことを決意する。

最前線が二十五層を超えた時点でもずっとソロプレイでひたすらレベリングを行っていた。

月夜の黒猫団と接触することで、物語への関与を決意するも、自分の立場を驕り月夜の黒猫団を壊滅させてしまう。

自責からキリトと共に自暴自棄なレベリングなどを行っていたが、クリスマスに届いたサチからのメッセージを聞き、改めてこの現実と向き合うことを決意する。

＊使用武器

・細剣（盾無し）

第００話～第０３話

↓≪アニール・レイピア≫

第０４話

↓≪ウインド・フルーレ＋４≫

第０５話～第０９話
↓≪ガーベラ・フルーレ＋１４≫
第１０話～
↓≪ウンディーネ＋１２≫
＊スキル
第００話～第０３話　（Ｌｖ．６）（スロ：３）
↓≪片手用細剣≫≪索敵≫≪未習得≫
第０４話　（Ｌｖ．１０）（スロ：３）
↓≪片手用細剣≫≪索敵≫≪＊＊≫
第０５話～　（Ｌｖ．４６～）（スロ：７）
↓≪片手用細剣≫≪＊＊＊＊≫≪索敵≫≪体術≫≪隠蔽≫≪看破≫≪＊＊＊＊＊≫
第１０話～　（Ｌｖ．７０～）（スロ：１０）
↓≪片手用細剣≫≪＊＊＊＊≫≪索敵≫≪体術≫≪隠蔽≫≪＊＊≫≪＊＊＊＊＊≫≪＊＊＊＊＊≫≪＊＊＊＊＊≫≪＊＊＊＊＊≫

※物語進行上、公開されてない情報は伏せられています。

＊前世

人付き合いが苦手で、勉強と仮想を描いた世界（二次元）を愛していた。

どうやら学力が高く、その知識はこのＳＡＯの世界でも通用し期待されるほどだった。

【文字数不足のため主人公に質疑応答　―　文字数が稼げ次第削除します　―】

Ｑ．手は何の為についている？→「えぇ……何の為って……掴むため？」

Ｑ．貴方の歩みを止めてしまうものは？→「目の前に広がる現実かな。今でも、ちゃんと歩けているかわらかない」

Ｑ．昨晩はどんな寝言を言っていた？→「え!?知らないよ！」

Ｑ．出来ない事を一つ、教えてください。→「〝人〟を生き返らせること、かな。逆を言うなら、それ以外は大抵出来ると思っているよ」

Q．願い事が一つだけ叶うとしたらなにを願う？→「転生者だってことを忘れたいかな」

Q．好きな異性のタイプは？→「えっと……芯が強い子、とか」

Q．朝焼けと夕焼け、好きなのは何方？→「夕焼け。ああ、あの時二人が見た世界の終わりの光景とか凄い好きなんだよね」

Q．決め台詞を言ってください。→「やっぱこれでしょう。『俺が二本目の剣を抜けば、立っていられる奴は――いない』……あ、ごめんごめん冗談だってそんな怖い顔するなって」

番外編ＩＦ　０１．なんてことない閑話

髪質はさらりと言うよりもは、ふわりと言ったような表現が似合う柔らかさがある。黒髪というには少しだけ色素が薄く、ダークグレーに近い髪色は光に当たれば少しだけ眩さを感じさせる。

遠くを見つめている彼のやや横を向いた顔をじっと見つめていれば、やっとその視線に気付いたのか、視線をこちらに傾ける。

そして、白藤色の瞳が俺のそれとやっと交わった。

「感謝こそされても、恨み言言われる筋合いは無いと思うんだけど」

「……だって」

「はいはい。子供だねぇ和人くんは」

「……うるせぇなぁ」

気恥ずかしさからか、それともただの意地っ張りからか目元を微かに赤くさせて視線を逸らす友人の姿に俺はふは、と息を吐くように笑いを漏らした。

片手でキーボードを難なく操作し、微かに横目で画面を確認しながらも、手の届く距離に座っている彼の頭を数度ぽんぽんと叩いてやる。

まあ、拗ねもするだろう。頭で理解していても、懐の広い男の器というものを見せようとしても、結局はこいつはただの男子高校生なのだから。

「でも、どうなるかはわからないな。難しいラインだ」

カタリ、と最後のキーを叩き終えては、表示される文字の羅列を一気に目を通してそこから導き出される結論を告げる。

――時間が足りないな。逆算して取り掛かってたとは言え、やっぱ思い通りにはいかないものか。

「そう……か」
「まぁ、倉橋先生にももうちょっと相談してみるよ。……んで？どこぞの黒の剣士様はわざわざ俺に『明日奈との時間が足りない』っていうぼやきをするためだけにここに来たのかな？」
「ぐ……いや、そんなわけないだろ」
「ふーん？いや、別にいいんだよ？そんな愚痴他には言えないもんなぁ。俺的全然大歓迎ですよ？」
「……楽しんでるだろ」
「いえ？全く？これっぽっちも？盛大に楽しんでる」
「言葉が矛盾して可笑しくなってる！」
「はいはい、こちら病院の一室ですお静かにー」
「んぐっ……」
　素直に黙り込んでしまう彼の純粋さは健在だ。キィ、と椅子の背もたれに軽く身体を預けたことで鳴る音を耳にしながら右脚を左脚の上に乗せるように組み、渾身の笑みを口元に湛える。言わばニヤニヤ顔である。
「そんな心配しなくても明日奈はお前にぞっこんだろ」
「ぞっこんて……別にそれを疑ってるわけじゃないんだよ」
「あーあ、もうちょっと隙があればなぁ。俺が立候補したのに」
「……おい？」
「冗談だって。まぁ、こっちでもあっちでも、今はお前は二の次みたいなもんだもんなぁ」
　それも仕方ないことではある。
　俺としては、この物語は完全に彼女が主人公のパートに入っているのだ。本来の主人公の彼の影が薄くなるのは知っていたし、この先の展開も大体は見当がついている。
　しかし、まさか彼がここまで彼女――明日奈との時間が取れなくなってしまったことを寂しくさせているとは思っていなかった。完全の予想外の出来事である。
　かの空の城の終わりは、少し違った終わりを迎えはした。確かに彼と彼女の繋がりは、原作より根強くなった気はしていた。でも、ぶっ

ちゃけて言おう、ここまでか?ここまで彼は彼女に執着してたのか?いやはや、青春だねぇ、ほんと。おじさんついていけないよ。同い年だけど。

結局どうにかしたいとか、そういう話ではなく、心の中のもやを誰かに吐き出したいだけだろう彼の気持ちを汲んでやり、気まずそうな表情を浮かべてしまう彼にただ同調してやる。

いつか、俺もこんな風に人を愛する時が来るのかねぇ……。

彼ら、彼女らの想いの矛先と、その想いの深さを目の当たりする度に、何だか俺には無縁だなぁという気持ちと、ちょっとした憧れが湧く。誰にも言わないけれど、俺だって人並みに恋とかしてみたいとは思っているのだ。

そう、彼のように一人の女性を深く愛し、そしてそれを返してもらう。ただ一度も経験したことも無い、そんな夢のような奇跡を体感してみたいと、思えるようになった。

何色にもならなかった前世と、今の生。でも、彼らと共に過ごしていくうちに微かに色づいてきているものがあるのを俺は自覚している。それはきっと、悪いことではないのだ。

この何色にも染まらない筈の黒の彼は、唯一瞬くような星の白き輝きに染められた。そして変わって行った。黒と白が交わるように、そして一つになったのだ。

沢山の葛藤と苦悩をしながらもここまで歩き切った俺は、それを見届けたことを間違っていないと思えた。それだけでも十分意味があるのだろう。

――仕方ない、一肌脱いでやるか。

昔は度々、しかし最近はよくやり取りしたログの残るトーク画面を開いて、用件を打ち込んでいく。

人が来ているのに、と少しだけ不満げな雰囲気を見せていく目の前の彼の存在は、この際まるっと無視して送信。直ぐに既読が付くのを確認して緩く口元に笑みを浮かべた。

「お礼なら、二時間並ぶらしい銀座にある店のチーズケーキでいいよ」

「は？何言って」

途端、ブブッと彼の携帯に通知が届く。

そして、その内容を見て、俺の言わんとすることを理解するまで、一分もかからなかった。

番外編ＩＦ　０２．ある転生者の戯言

――さて、皆様は”神様転生”ってもんをご存じだろうか。

因みに俺はよーくご存じである。なんたってこの俺こそが、転生者であり、前世ではそれはもうその類の物語は多く存在し愛され、そして当の俺も愛していた。

だからこそ、俺は思うのだ。そんな俺は転生者なのだから、神様転生というジャンルのポジションなのではないか？と。

実は転生する前に神様と呼ばれる存在に出会い、「ごめん間違えて君を死なせてしまったんだてへぺろ（ほしまぁく）」とか言われて、「お詫びに好きな世界に転生してあげるよ（ばちこーんういんく）」とかなって、最終的には「君に特別な力を授けよう！（ぱんぱかぱーん）」みたいなそういう出来事があったのではないか、とそう考えるのは無理が無いと思う。

確かに俺はつい最近……最近？もう大分経ったような……ごほん、……つい最近まで自分が転生者だったという記憶が無かった。しかし、思い出した今、そのような希望を持ったって悪くない、寧ろ正しいと思うのだ。

正直に話そう、俺だって主人公願望があるのだ。

ハーレムは無くてもいい。でもこう、強いチートは欲しい。誰も持ってないような力を持っていて「ふーん、この程度か」とか言って敵をやっつけたい。「それは伝説の……！」とか言われちゃうような技を使ってみたい。

だって俺、十四歳ですよ。あ、大分前に誕生日を迎えたので十五歳でした。とにかくまだまだ若いぴちぴち（死語）の厨二患ったって許されるお年頃ですよ。俺だってキリトがこの先手に入れる、聖剣エクスキャリバーとか振り回してみたい。システム外スキルとか平然と編み出してやってみたいわけですよ。

だからこそ、俺がすべきことはまず自分の記憶の回顧だった。ひたすらに自分の前世を遡ってみる。勿論全てを鮮明に覚えているわけもなく、それどころか今の自分よりも倍以上年を重ねた男の人生を遡るというのは、なんというか、虚しさを感じ直視するのがきついと感じることも多々あった。

それでも俺は頑張った。そりゃあもう、コミュ障拗らせると本当ロクなことにならねぇなと頭を抱えながらも、俺は頑張った。

そして遡った記憶を総じてまとめた結果、わかったことは、俺は神様転生ではないということだ。

そりゃなくない？

俺ってただ死んで、生まれ変わってたまたまこんな前世で作られた世界に飛び込んだってこと？

でも何度思い返しても答えは同じ。俺はそれはもう人には言いたくないような、羞恥を刺激されるような死に方をした。そして次に目覚めた時はもうこの世界だった。

確かに家柄は悪くないし、無意識だったが知識も前世の知識が引き出せて学力もそこそこ上だった。幼馴染もいたし、尊敬できる先輩もいた。思い返せばそれなりに恵まれていたとは思う。でも、でもだ。

俺だって……ユニークスキルとか欲しいですよ……。

現在二〇二四年三月現在。キリトには≪二刀流≫というユニークスキルが手に入ったにも関わらず、俺には何も無い。

いや原作を知っているならわかってる。ユニークスキルって神聖剣と二刀流の他は全然後に出るんでしょ？でもさぁ……俺この三ヶ月結構、いやかなりこう、物語に貢献してきたと思うんですよ。

何が楽しくて「義理だから！」って三回も念を押されたチョコを、しかも俺宛てじゃないそれを違う野郎に橋渡ししたり、すれ違って衝突して普通に相当落ち込んでる友人を励ましたりしたと思ってんだ。報われるためだよ。

後一ヶ月も経たないうちにサクラの月と呼ばれる春の季節が訪れますけど、俺にはちっとも春の予感はありません。なんだよこれ。

この世界は全くもって俺に優しくない気がする。
もし神様が実在するなら、典型的な神様からの恩恵を賜る転生では無く、神を信仰しなかったことによる優しさゼロパーセントの冥途土産のスターバーストストリームって感じだろう。寧ろ転生出来て良かったね、みたいな感じ。お前の転生とかここらへんでいいだろほら行ってらっしゃーいみたいな。
目の前で繰り広げられる黒髪の少年と、栗色の長髪の少女のよくわからない攻防を見ながら、俺は死んだような瞳で空を仰ぐ。

――さて、皆様は、こんなただの不幸な転生者のこれからがどうなるか、ご覧いただけるだろうか。

「今日もめっちゃいい天気だなぁ……」

それでも偶然の重なりで、彼は本当に恵まれた立場にいることを知ることが出来るのは、まだまだ先の話である――。

ＳＡＯ編
００．プロローグ

目の前に広がる光景は、恐怖や絶望で埋め尽くされていた。
「出せ」「この後約束があるんだ」「ふざけんな」「殺す気かよ」……沢山の言葉が重なり、騒音となって広場に響き渡る。
そんな中、俺は逆流するような記憶に飲まれ、ひたすらにあのフードを被った存在がいた空を凝視していた。

二〇二二年、十一月六日。十三時より正式サービスが始まったフルダイブ型ＶＲＭＭＯＲＰＧ――『ソードアート・オンライン』
βテスト版も体験し、今日という日を待ちわびていた俺はこのゲームの真の姿を知っていた。
このゲームが、あの茅場　晶彦の求めていた世界であり、たった今から本当のデスゲームとなったことを、
俺は、知っていた。

いや、知っていたではない。思い出したのだ。
鳴り響いた鐘の音。語られる無情な宣告。溢れ出す恐怖……そして、それらの終わりも。
俺は、思い出した。

この世界が、ソードアート・オンラインという、小説が元になった世界だということを。
そして自分が、その作品を愛読していた前世の過去を持つ、所謂転生者だと言うことを。
生まれて十四年。たった十四年だ。その中で何度か違和感を持ったことはあった。やけに知識がある自覚があった。どこで学んだの

かわからない知識、技術を備えていた自分は、周りに酷く期待されていた。
でもそれが何でなのかはわからなかった。自分には前世があって、その記憶が断片的に引き出せていたなんて、今の今まで気付くことなどなかった。
どこかで、なるほどなと冷めた気持ちで納得している自分がいる。堰き止められていた記憶が一気に流れ込んできて混乱していた思考が段々クリアになっていく。
響く騒音は中々落ち着かないが、それも少しずつ怒号より嘆きが増えてきていた。

ぼんやりと、その光景をやっと視界に入れる。
――ああ、彼は確か、アニメでモブのような描写で画面に映っていたな。
――ああ、あの子は確か。
――ああ、前線にいた彼も、最初は嘆いていたのか。

どこかで一枚フィルターのようなものがかかっているような、そんな感覚がする。
さっきまでは無かった感覚。知りたくも無かった事実が自分を大きく切り裂いて、自分という存在がこの世界には求められていない単なるモブだということを突き付けてくる。
でも、どうにかしようとは思わなかった。
数時間後、このゲームの初めての死者が出来る。
死因は――自殺。知っている。茅場の言葉が信じられず、賭けるように、そして諦めるように人が死ぬ。痛みなどないこの世界で、呆気なく死んでいく。

一か月後には死者が二千を超える。知っている。
でも、二年後にはこのゲームはクリアされる。知っている。

知っているからこそ、俺はその場から動くことが出来なかった。

０１．はじまりの街

例えば。
フィールドにいるＭｏｂを倒したとして。
そこからコルや経験値を手に入れられたとして。
「なんの意味がある……っつーんだよ」
決して柔らかくもない、寧ろ固く、最低限の眠りの保証しかしてくれなさそうなベッドの上で、呟いた言葉はあまりに小さな声だったというのに、やけに響いた気がした。

ゲーム開始時からもう一ヶ月が経過しようとしている。
それはそれはあっという間の毎日だった。激昂し、絶望に嘆いていたプレイヤー達は時間が経つにつれその怒りが沈み、ひたすらに悲観するようになった。
街を歩けばどこかしらから聞こえるすすり泣くような声。道に蹲るように座り現実を未だに見られない人だってたくさんいた。
それでも多くの人間が前に踏み出したとも聞く。そして……死者もまた、原作通り二千を超えた。
俺はというと、この一ヶ月何もしなかった。
誰かと必要以上話すことも無く、この持てる知識で誰かを救おうとも思わなかった。
薄情だなと思うことはある。一人こうやって格安の宿屋に泊まりベッドの上でぼんやりとしていると、自分を責めるような感情がふつふつと湧いてくるのは否定できない事実だった。
しかし、だからと言ってどうにかしようとは、どうしても思えなかった。
現在の俺のレベルは四レベル。
なんとびっくり、スキルスロットは未だに二つのみ。因みに取ってあるのは片手用細剣と索敵だ。一応宿屋で泊まるにもコルが必要な

ために、足りなくなったらはじまりの街付近のフィールドで狩りを行っている。
逆に言うなら、それしかしていない。食事だって必要最低限だ。まさかこんな自分が元βテスターだなんて、誰も思わないだろう。……そう自分でも思ってしまうぐらい、堕落した生活を行い、一日一日を無駄にしていた。
時季外れの五月病かな、なんてふざけたことを言う気にもなれなかった。結局、俺は自分という存在の現実に絶望し、それから立ち直れていないんだと思う。
「……聞いて呆れるぜ」

今日外に出た時に、近々第一層のボス攻略のための会議が行われるという噂を聞いた。
きっとそこで、リーダーを務める”彼”は死に、その遺志を継いだはずの俺と同い年の少年は、一人汚名を被り第二層へと足を踏み出すのだろう。……知っている。そう、知っているのだ。吐き気がしそうになるぐらい、この世界は決められたストーリーをなぞるように進んでいく、作り上げられたものだということを。視界が少しぼやけそうになるのを瞬きで振り払って、緩めたままの掌を強く握る。
声を出せば、響くことを知っている。
剣を振れば、倒せることを知っている。
手を伸ばせば、届くことを知っている。
――それでも。

がばりと、ベッドで横になっていた身体を起こす。そろそろ一ヶ月経つために覚悟はしていたが、実際に原作で行われていたストーリーを耳にしてしまってから、心のどこかが疼くように痛み、落ち着いてられなかった。
俺の出る幕はない。出なくたって、時間はかかるがこのゲームはクリアされる。わかっている、知っている。
何かしたいとは思わない。関わっていきたいと思ってもいない。

矛盾ばかりが胸を締め付けていく。
息苦しいと、作り物のアバターなのに感じることがとても馬鹿らしいと笑いが零れた。

「――ハァッ！」
少し力を溜めるように肘を引く。細剣にライトエフェクトが乗り、そのまま滑るように動きに合わせて腕に力を入れ、その矛先を狙い通りの場所へ突き刺す。
レベル差が少し出来たおかげか、その一撃で容易くポリゴン片となり朽ちるのを見届けて、払うように手にある細剣を右下に向かって振り、鞘へと納めた。
結局、じっと眠りにつくことも出来なかったために意味も無く圏外へと赴き、こうしてＭｏｂ狩りを始めてしまった。時間帯的にはそろそろ日が暮れる頃、他にもいたはずのプレイヤー達は数体倒してそそくさに街へと戻っていた。……きっと、俺と同じように最低限のコル稼ぎでしかないのだろう。
レベル差のおかげで囲まれない限りは大丈夫だろうことから、何も考えず無心で狩っていたために、気付けばレベルは二つほど上がっていた。スキルスロットが一つ増えていたので、あとで適当に入れないとなあ、なんてことをぼんやりと考える。
何もする気にもなれないのに、そう思わず考えてしまうことがゲーマー故の悲しいところだな、と苦笑してしまうぐらいには、無心で狩っていたおかげか少し落ち着けたのだろう。これなら宿屋に戻っても眠れそうだ。安堵からかため息に近い息が口から洩れる。
「うわぁあああああっ!!!!」
のと、同時に切羽詰ったような、恐れが溢れ出したような叫び声が響き渡った。
「っ!?」
反射的に声のした方向に振り向く。
そこにいたのは、自分よりも遥かに幼いだろう少年が尻もちをつい

て、何度も地面の上で手を滑らせながらアクティブ化されたＭｏｂから逃げようとしている姿だった。

――何故!?

頭の中に一番最初に浮かんだのはその単語だった。

このゲームは推奨年齢が十三歳からだ。しかしそこにいる少年はどう見たって十三歳より幼く見える。確かにネットやゲームが普及され幼い子供にも触れやすい文化にはなった。だからきっと推奨年齢以下の子供がこのゲームに参加していてもおかしくはない。おかしくはないのだ。それこそ、俺はその事実を知っているはずだ。

しかし、焦りは理性を潰す。冷静に考えればわかることがわからなくなっていく。攻撃を仕掛けない限りアクティブ化しないＭｏｂであるはずのフレンジー・ボアが少年を狙っている。つまり少年が攻撃を仕掛けたということになる。何故。どうしてそんなことを。

たくさん浮かぶ疑問が正常な判断を壊していく。肩が震え今にも泣きだしそうになりながら必死に逃げようとする少年がいる。イノシシに近いそのＭｏｂから、直線的に逃げようとしている。意味がない、それじゃあ逃げられない。助から、ない。

それでいいのか？

俺は、俺が前世という記憶を持っていたということ、この世界が前世の世界では小説として作られた世界だということを知ってしまったあの時から、一つだけ決めていたことがある。

それは、何もしないということだ。

先のストーリーを知っている。

どうしてそうなるか、どうなっていくのかを知っている。

殺さないと、殺していく殺人プレイヤーがいるのを知っている。

でも、そいつらがこの先の未来のストーリーに関わっていくことを知っている。

だから何もしないことを選んだ。何もしないことこそが正しいと判断した。

でも、それでいいのか？
――いいに決まっている。
でも、でもだ。
近日には第一層ボスの攻略会議が行われる。それに参加するプレイヤー達なんて、もうこのはじまりの街にいるわけがない。なら、だったら。
「ハァアアッ!!」
たった一レベルのＭｏｂだ。少年だって、きっと一発では死ぬことはない。もしかすると少年の携えている剣で、このＭｏｂを倒すストーリーが誰にも知られずにあったのかもしれない。
沢山の可能性が次々に浮かんでは、でも、それでもという自分の傲慢的な考えに潰されていく。
気付けば、身体は一直線にそちらに赴き、構えた細剣はライトエフェクトを乗せて、真っ直ぐにＭｏｂへと突き立つ。――片手用細剣突進技『シューティング・スター』
ぽかんと、何が起きたかわからないと言わんばかりの少年の視線が、ポリゴン片となったフレンジー・ボアがいた場所に立つ自分へと向けられる。
必然的に見下ろす形となってしまう身体は優しさを持つことはできず、屈んで手を差し伸べることも出来ない。
少年を見つめる俺の瞳には最早、〝光〟は存在しないのだろう。

０２．教会

『生命の碑』

アインクラッド第一層のはじまりの街にある黒鉄宮に設置されているそれに、俺の名前は存在する。

全プレイヤーの名前がＡからアルファベット順に並んでいる碑は、所々二重線が引かれ、その名前たちを打ち消している。

そう、これは全プレイヤーの生死を表している。

俺の名前の上にある名前には、二重線が引かれ死亡日時と死因が記載されていた。

そして、その名前の数個下に、よく見知った名前があることを俺は知っていた。

Ａから始まる五文字のアルファベット。

俺はこの名前をよく知っている。

「本当に、ありがとうございました」

深々と頭を下げられてしまえば、居た堪れない思いから喉奥から唸るような音しか漏れない。「いや、本当お気になさらず」なんて、決まった返答をしながらどうにかその頭を上げさせる。

彼女の後ろには彼女の服の裾を軽く握り、少し身体を彼女の背で隠しながら片目で窺うように見上げてくる、先ほど圏外で思わず助けてしまった少年がいた。

遡ること数十分前。

何もしない、などと大層な決意を胸に抱いていたはずの俺は目の前で泣き叫ぶ少年を見捨てることは出来ず、助けてしまった。

しかもそれに飽き足らず、少年を保護している筈の教会までこうして送り届けてしまい……今、そこを管理しているプレイヤーに頭を下げられている状態というわけだ。

「本当、偶然そこで狩りをしていただけなので……」

「しかし、貴方がいなければギンは今頃どうなっていたことか……あ、紹介が遅れました。私の名前はサーシャ、この子はギンといいます」
あ、はい。知ってます。
なんて言えるわけもなく、一か月近く動かしていなかった表情筋――この世界にそんなものがあるかはわからないが――を動かして笑みを浮かべた。
「あー……俺の名前は、アルス、です」

「大したお礼は出来ませんが、良かったら中へどうぞ」という言葉をどうにか拒否しようと問答を数分。しかし最終的には少年――ギンが半ば強引に俺の服を掴み、中へと入れようと引っ張って来るのに観念してお言葉に甘えお邪魔してしまっている。
ここまで自分という人間が押しに弱かっただろうか、と促された椅子に腰を掛けて眉間を揉むように微かに唸る。思えば、前世の記憶とやらが蘇ってからこうやって人とまともに話したのは初めてに近い。人格に影響はなさそうだと思っていたが、自分が思っているよりも影響を受けているのかもしれない。まあ、そこらへんに興味はあまりないが。

決して綺麗とは言えない教会。そこにはギンの他に数人の子供がいた。俺が知っている人数よりもは全然少ない。片手で足りる人数しかいないそこは、まだ宿としてこの教会を借りてから日が経っていないということを感じさせる。
晩御飯の用意をしてきますとその場を一度離れたサーシャのことを、ぼんやりと考える。暗青色の短い髪の毛、黒縁の眼鏡に深緑の瞳……全て記憶にある描写通りだ。
どうして、こんなことになってしまったかなぁ。

何回目になるかわからないため息を必死に飲み込んでは、用意してくれた紅茶の入ったカップに手を伸ばす。
「……どうした？」

そして、そこでやっとギンがかなり近い距離で俺のことをじっと見つめてきていることに気付いた。
「兄ちゃんはさ、皆が言ってる”だいいっそうボスこうりゃくかいぎ”ってやつに参加するの？」
うずうず、と言った言葉がぴったりと当てはまるだろう様子を隠せていない少年は、期待を混ぜたような視線をこちらに向けながらその言葉の意味をきちんと理解していないだろう、たどたどし気に言葉を紡ぐ。気付けば、教会にいるだろう子供みんながこちらに視線を寄せて、少しだけギンに隠れるように、しかし興味があると言わんばかりにこちらに距離を詰めていた。
きっと、彼を助けた時に一発でＭｏｂを倒したために、強いと勘違いしてしまったのだろう。期待を裏切ってしまうことは非情に申し訳ないという感情が湧くが、ここで嘘を重ねても仕方はあるまい。軽く目を伏せながら首を左右に振り、その問いかけに否定を返す。
「いや、俺は参加しないよ」
「えーっ！どうして？兄ちゃん強いのに！」
「んー……強くは、無いよ。この街の近くの圏外にしか出たこともないし、あれぐらいだったら、君たちもすぐに倒せるようになる」
「ほんと!?」
どうやら、攻略会議に参加するしないよりも、強くなれる、という内容の話題に食いついだようだ。期待が膨らんだ瞳はいっそう輝き、肯定の言葉を待っている。純真無垢な子供の心というのは、本当に穢れを知らないようだ。何だか自然と口端が上がってしまう。片眉を下げて、仕方ないなと言わんばかりの表情が自然と繕われるのを感じながら、そっと頷き返してやる。
わあ、と部屋に嬉しそうな声が上がる。意欲旺盛な子供たちはお互いの顔を見合わせたあと、すぐさま俺の方に顔を向き直した。
――今思えば、そこで、嫌な予感が一瞬過ったんだ。その何とも言えない予感に直ぐに気が付いていれば、言葉を間違うはずもなかった。
そう言ってしまうのは、それがもう過去形の話だからだ。

「おれたちも、あのモンスター倒せるようになれる？」
「ああ、最初は一人じゃなくて、みんなでモンスター一体ずつを慎重に狙えば、すぐに倒せるようになるよ」
「みんな？」
「そう。一人だとまた今日みたいになったら怖いだろ？だから、みんなで。そうだな……サーシャさんと一緒に行けばさらに安全に強くなれるんじゃないか？」
「じゃあ兄ちゃんがおれを鍛えてくれよ！」
「まあ俺でも確かに安全マージンは確保できるとは思うが……うん？」
　きらきらと輝いた瞳が、真っ直ぐに俺の視線と交わる。
「おれ、強くなりたいんだ！」
　おれも！わたしも！と言葉が続いていく。
　俺は、口を何度か開いては閉じてを繰り返すも、上手く言葉が出てこなかった。段々と、視界が暗くなっていくのを感じる。
「なあ、良いだろ？……兄ちゃん？」
　ギンの俺を呼ぶ声がどこか遠くに感じた。交わっている筈の視線がどうしてか焦点が合わない。落ち着け、子供の前でみっともない姿を見せるな。自分を叱咤する言葉は、頭に浮かぶだけで実行には中々移せなかった。
　しん、と一瞬沈黙が空間を支配した。きっと子供たちは俺の様子が可笑しいことに気付いたのだろう。
　ああ、みじめだ。本当に。
　何のために、どうして。

「みんな、お待たせご飯が出来たわよ。……アルスさん？どうかしましたか？」
　沈黙を破るように響いた、優し気な声に、俺は酷く安堵を覚えてしまった。

03．腕の中

泣き叫んでいる青年を見た。
それはゲームが始まって半月ほど経った日の黒鉄宮にある『生命の碑』の目の前での出来事だ。
きっと彼の知っている誰かが、死んでしまったのだろう。
崩れるように床に手をつけて蹲り、何度も何度もその名前を呼んでは「何で」「どうして」を繰り返している。
居た堪れない気持ちになった他のプレイヤーは、声をかけることもなく、そそくさに立ち去って行く。一人彼は残される。それでも彼は嘆くことを止めなかった。止められるわけが無かったのだろう。
彼にとってどれぐらい大事な人だったのか、それは俺にはわからない。
わからないから、俺はどんな感情を抱くべきなのかがわからなかった。
俺はただそれを見ていた。青年が最後、その名前を呼びながら飛び降りるまでずっと、ただ黙って、見ていた。

「借りた部屋に余裕がありますので、良かったら泊まって行ってください」
なんて、言葉に最終的に頷いてしまった俺は、いつもより少しだけ柔らかいベッドの上で仰向けに寝転がり、天井を見つめ続けた。
ある意味、怒涛の一日だったと、思う。
たった一つの噂に乱され、予定にもなかった狩りをして、そこで少年を助けたばかりに、予想もしていなかった一日の終わりを迎える。
どこから間違えたのか、いったい何が間違いだったのか。
さっぱりわからないけれど、今この状況をラッキーだとも、正解だとも思えない俺は相当捻くれてしまっているのだろう。

結局、ギンのお願いについては、返事が出来なかった。
理由としては、俺が言葉を詰まらせた他に、どうやらギン……ギン達は、強くなりたいという願いを、サーシャには知られたくないようだったのだ。
ご飯の支度を終えて呼びに来たサーシャは、俺たちの様子を見て何を話していたのかという質問をするも、答えようとした俺の口を強引に塞ぎながら（ギリギリ、ハラスメント警告は出なかった）、何でもないと言い張る彼らを見ているうちに平常を取り戻した俺は、その言葉に便乗した。そうして、そのままその話は続かなかったのだ。
なあなあとなってしまったが、このまま明日になってお暇すれば無かったことになるだろう。
それでいい。俺は何もしないって決めたんだから。安堵から来るだろう深いため息を吐いては目を閉じる。
しかし、脳裏にちらつくのは、きらきらと期待と決意を秘めた瞳で、何分待っても眠気がやってこない。
少しだけイラついた感情を抱き、乱暴に寝返りを打ってみるも、その瞳が消えることない。
『強くなりたいんだ』
――死ぬかもしれないのに？
――お前は子供なんだから、良いんだよ。
――それに、お前が何もしなくたって、いつかはちゃんとゲームはクリアされる。
――だから、良いんだよ。
そんな言葉が正しいなんて、馬鹿げてる。

「……アルスさん？」
「……ああ、すみません。起こしてしまいましたか」
「いえ、いつもこの時間は一度子供たちの様子を見て回ってるんです。……日中は大分明るくなりましたが、やっぱり、夜になると泣いてしまう子もいますので……」
与えられた客室から出て、教会の広間に一人佇んでいれば、背後か

らサーシャの声が聞こえた。
夜のせいで、窓から差し込むのは作られた月明かりのような光。仄暗く、お互いの表情を詳細に感じ取ることは難しいような、そんな明るさ。
でも今はそれが有り難いなと思ってしまった。
「……アルスさん、今日は本当にありがとうございました」
「いや、本当にお礼を言われるようなことじゃないんですよ。偶然だったし、何より……俺がやらなくたって、彼は死ぬことはなかっただろうから」
「？……でも、助けて下さったのはアルスさんです」
「……それが、誰かの手柄を横取りする形になっても？」
何を言っているのかわからない。そんな表情を浮かべているのが、見えなくても感じられる。

――ああ、今の自分は最高に嫌な奴だ。僻んで、いじけて、ひねくれて。ガキみたいだ。
どうせ俺なんて。俺がやらなくたって。言い訳みたいな言葉が次々と浮かぶ。
そんな自分が嫌いだ。大嫌いだ。
今日食べた彼女の作った料理が温かかった。
今日話した、少年たちとの会話が暖かかった。
胸が苦しい。痛まないはずのアバターなのに、痛いと感じる。

実際問題、自分が死んでもいいのだ。なんの問題にもならないのだ。
だって俺の愛した物語に、俺は存在しないのだから。
でも、周りには死んで欲しくないのだ。
死んでもいい命なんてないんだ。
最初の死者が自殺するって知っていた。
知っていたからといって、死んで良いわけがないんだ。
本当は、嫌だった。そんなエゴばかりだった。

だから、何もしないことにした。全部どうでもいいって繕って、好きの反対を作ろうとして、でも無関心になれないから、まるで他人なんて嫌いだなんて虚勢を張って。そうして自分を守って、静かに終わっていくことを待ってることが、正解だなんて言い聞かせて。
それでも人は死んでいく。俺はそれをただ見ている。嘆くことも出来ず、ただ甘受する。
何も知らなければ、終わらせようと剣を握って走り出せたと言うのに！

俺は、一人を助けたことで変わる未来が怖かった。
愛していた、この世界を。
確かに変えたいと、救いたいと読みながら思ったことだってあった。でも、そうしたことで未来が変わって、終わりが変わってしまったら、それは俺の愛した世界と違う気がした。だから、そんなことは望まなかった。
なのに、なのに！
「……アルスさん。……泣いているのですか？」
ぱたぱた、と目から頬、顎へと伝っていくものが涙だと気付いたのは、穏やかで、優しく、それでいて強かなたった一人の女性の言葉だった。
目を微かに見開いて、彼女を見やる。気付いたら、手を少し伸ばせば触れてしまえる距離にいた彼女は、そっと俺の目元に手を伸ばし、零れた涙をそっと拭う。
涙が、さらに溢れた。
まるで子供をあやすように、伸ばされた腕は俺の後頭部まで伸びてゆっくりと引き寄せられる。ぱたぱたと勝手に零れる涙は彼女の肩口に落ちて、光の粒となって消えていく。
「……サーシャさん、俺は、無力です」
「……はい」
「俺がいなくたって、きっとこのゲームは進んでいきます。……寧ろ、俺が何かしたことで、何かが壊れてしまうかもしれません」

「……はい」
「……頭ではわかってます。わかってる、わかってるんです」
「……」
「でも、でも……ッ、胸が痛い。苦しい。ありえないのに、作り物なのに……貴方が、ギン達が、暖かい。それを失いたくないと、そのために、俺は……」
「……アルスさん」
「っ……」
「私には、貴方がどうしてそこまで、自分を抑え込んでしまっているのか……わかりません。でも、私も最初はゲームクリアのためにフィールドに出ました。ある日、一人の子供を見かけて、私……私は、ゲームクリアへの道を諦めたんです」
俺の後頭部を優しく撫でる手が、微かに震えていることに気付く。肩口に埋めていた顔をゆっくりと離し、顔を見合わせる。彼女の瞳にも、微かに涙の膜が張っていた。
「攻略のために踏み出した人に、申し訳ないと思っています。でも……私は、後悔はしていないんです。……アルスさんは、今の自分に、後悔はありませんか？」

それが、答えだと思った。
つぅ、と滑るように頬を伝った涙が床に落ちる前に光の粒子となって綻んだ。
「……この一ヶ月、後悔ばかりでした」
絶叫しそうな思いを必死に堪えて、嗚咽する。再び彼女の肩口に顔を埋めてしまえば、背中に回された手がぽんぽんと、一定のリズムで俺の背中を叩く。
――怖い。それがずっと俺が抱いてきた感情の答えだ。今も抱いているし、きっとこれから先ずっと抱えていくだろう。
でも、その恐怖に潰されて、自分を殺して生きていかなくたっていいんだろう。

もしかすると俺がしてきたことが全て無駄になるかもしれない。
もしかすると未来が変わってしまうかもしれない。
でも、俺が生きてるのは”今”だから。

遠い記憶。前世と呼ばれる古い古い記憶。
今の俺よりも、ずっとずっと人付き合いが苦手で、勉強と仮想を描いた世界を愛していた彼(じぶん)に、小さく「ごめん」と呟いた。

０４．原始の森

「所詮クエストと言ったらそれまでさ」
「でも、俺は彼らに賭けたい」
「……愚かだって、笑うかい？」
思わずと言ったように笑えば、口元を微かに緩めた彼は「いいや？」と笑い返してくれた。

ここ最近の俺の朝は随分と早い。
微睡むようなまだ寝たい気持ちをそのままに、ベッドの上で寝返りを打とうかと身体を捩ったその瞬間、痛みは無いものの、腹部に衝撃が走る。
「ぐぅ……っ!?」
「アルス兄ちゃん！おはよ！朝だよ！」
人の腹の上に勢いよくダイブし、満開の笑みを浮かべているのは、つい先日Ｍｏｂから助けた少年のギンだ。寝返りを打つ途中での襲撃に、身体は仰向けで止まっている。その腹の上に跨ぐように乗りかかったまま大きな声が響く。
正直に言う。うるさい。自分の視界にのみ表示される時刻を視線だけで見ればそこにはデジタルの表記で五時五十七分と表示されている。昨日はそれよりも約十分ほど遅かった。その前はそれよりも七分。言わずもがな、どんどん早くなっている。
「……おはよう、ギン。一言だけ言わせてほしい。早過ぎだ。流石にもう少し……寝たい……」
「ええー!!何言ってんだよ！ほら、先生が朝ごはん準備してるから早く！」

だーめだ。全然言うこと聞いてくれそうにない。
諦めたように大きなため息を吐いては、自分の上に乗っている少年の頭に向かって手を伸ばす。ぽんぽん、と撫でるように叩いてやれば慣れたように腹部から身体をどかしベッドの横に降り立つ。それを合図に少しだけ腹筋に力を入れるように息をつめては一気に身体を起こした。
――初めてこの教会に訪れてから、もう一週間という期間が経過した。
先に行ってるからなー！と朝早くから元気さいっぱいの言葉に手を振るだけで返事をしつつ、自分のウィンドウを操作して装備を外を出歩くものに取り換える。やる気のなかった当時とは違い、レベルに合わせて新調した防具に、少しだけ強化を施した細剣≪ウインド・フルーレ≫を腰に吊っては自分の姿を軽く見下ろし、息を吐いた。
なんやかんや、一週間ずっとここでお世話になってしまっている。さしずめ俺は大きな子供みたいなポジションだろうなと苦笑を漏らせるようになったのは、ここで過ごし始めて三日経ったぐらいだった。それまでは、まだ少し自分の進みたい道が定まらず、手元でできることから始めようとレベリングなんかをやってみたりしていた。
その間に、このデスゲームの状況は大分変っていた。
まず、この一週間の間に第一層のボスが攻略された。現在は第二層の攻略のために前線のプレイヤー達が奮闘しているという話だ。少々気になる噂も耳に入るが、まあ現時点でそれを確認しに行くのは不可能に近いので、頑張ってるなあ、と他人事のように思うぐらいしか出来ないのが現状である。
そして――
「おはようございます」
アインクラッド第一層東七区にあるこの教会は、まだゲーム開始一ヶ月と少しでありながら、原作初登場並みの賑やかさを誇っていた。
先に食べ始めていた子供たちの喧騒で、挨拶が掻き消されたんじゃないかと思うほど、その空間は賑やかで笑みを繕ったはずの表情も

段々眉が下がる。しかし、そんな自分の声がきちんと届いたのか、先にいる彼女は振り向き笑顔を浮かべながら自分の名前を呼び、そして挨拶を返してくれた。
「アルスさん、おはようございます」

「……しかし、元気ですね」
「そうですね。……確かに全員が助かったわけじゃないですし、実際虚脱状態になって回線切断してしまった子も……いましたが、それでも大分回復したと思います」
　朝ご飯を食べ終え、一人一人の子供がそれぞれ遊ぶように広間に出て行ったりするのをサーシャと二人で見届けては、やっと訪れた静けさに息をついた。食後にと出してくれた紅茶を飲みながら、思ったことを呟く。すると頷きながらサーシャは返事をしてくれた。
　虚脱状態、回線切断。そのワードを聞く度に少しだけ遣る瀬無さが胸をざわつかせる。何もしないと、するべきではないと思っていた自分が、今更何を嘆いているのだと自分自身が一番思っているが、だからと言ってやはり仕方ないの一言で済ませられるものでもないのだろうと思う。
　だから、せめて恩返しが出来ればと俺はこの一週間、彼女の手伝いをやらせてもらっていた。
　その片手間にレベリングを行っていたが、一エリアずつ、困っている子供がいないかと捜したり、教会で過ごす子供の相手をしたりなど。些細ではあったし、役に立てるほどの対人スキルがあったわけではないが、それでも保護した子供の数は間違いなく原作を超えるだろうし、今子供たちが笑い、過ごせている理由の一つに俺という存在は少なからず関わっていると思う。
　そうやって、自分の出来ることをやって、救えるものを救う。ある意味綺麗事だとは思うが、そんな行為を行っていくうちに、俺の中にまだ残っていた躊躇いも消化されて行った。

簡単なことだ。やりたいことをやっていいのだ、と思えるようになった。
俺が何かすることで未来が変わるかもしれない。助かるはずの命が助からなくなるかもしれない。そんな不安と恐怖ばかりだったが、そこに希望が咲いたのだ。
未来が変わるかもしれない。でも、助からない命が助かるかもしれない。助かるはずだった命も、救えるかもしれない。
全部をなんて贅沢は難しいが、でもそう願って歩き出してもいいんだという自信が湧くのに、ここでの生活のおかげか、時間はかからなかった。
彼女、彼らには感謝している。手に持った紅茶のカップをソーサーに置いては、少しだけ真剣な瞳を隣の椅子に座るサーシャに向ける。視線に気づいた彼女は、そっとこちらを見やり、その俺の瞳の意味を理解したように少しだけ眉を下げた。
「それじゃあ、行ってきますね」
「……アルスさん」
「後は……よろしくお願いしますね、先生」
緩く笑みを浮かべて見せれば、同じように笑みを返してくれた。その笑みの中に隠された寂寥には見ないフリをして、そっと手を伸ばしその頬に手の甲を滑らせては微かに感じる温もりを忘れないようにと目を微かに伏せる。
そしてすぐにまた目を開いては、そのままもう振り返ることなく教会の出入り口へと向かった。

わっ、とうっ、やぁ！と軽快な掛け声と共に段々とＨＰのゲージは減っていき、最後にはポリゴン片となって散っていく。対して掛け声を発していた少年のＨＰは一ドットも減っておらず、それが彼が大分成長したことを感じさせてくれた。
「おー……フレンジー・ボアぐらいだったらもう余裕だな、ギン」
「へへっ、まぁね！兄ちゃんに特訓してもらったおかげだよ！」

『おれ、先生を支えたいんだ。このゲームが始まった時、すっごく怖かった。……でも、先生がいてくれて、慰めてくれておれ、また前向けるようになったんだ。だから、今度はおれが先生を支えたい』

教会に初めて泊めてもらった次の日の朝のことだ。俺は結局、返事をあやふやにしたまま去ることなく、少年に問いかけた。

『何故、強くなりたいのか』と。

少年は最初少しだけ気恥ずかしそうにしていたが、意を決したように答えてくれた。その答えは、あまりに真っ直ぐで、そしてどうしようもなく、俺を惨めにさせてくれた。だから、その思いに応えてやろうと俺は少年――ギンを鍛えてやる約束をした。

扱えるソードスキルを慣れたように発動させては、Ｍｏｂを難なく倒していく姿は大分様になっており、これならはじまりの街外周にある草原フィールドにいるＭｏｂぐらいなら一人でも対処できるだろうというぐらいには成長した少年を見ながら、緩く笑みを浮かべる。

「じゃああそこにいるダイアー・ウルフ、行って来い」

「おう！」

ギンを見ていると、よく思うことがある。これがデスゲームじゃなかったら、もっと気楽に楽しめただろうな、なんてことを。

彼には何度も言い聞かせた。いくら余裕でも油断だけはするなと、死ぬことだけはしないようにと。

あまりに真剣な物言いにたじろいでいた様子だったが頷いたのを見届けたのは、それこそ一週間前の出来事だ。彼は素直にその教えを忠実に守っている。今だってこのフィールドのＭｏｂ相手になら大分余裕であるレベルでありながらも、真剣に慎重に、そして的確に狙いを定めて攻撃を仕掛けている。

何撃かの攻撃の後、弾けるようなポリゴン片の音と共にギンが攻撃していたＭｏｂが消滅する。どうやら、そのタイミングでレベルが上がったようで、嬉しそうに声を上げるのが耳に届いた。

そして、直後に大きな鐘の音が鳴り響いた。

「あ……」

「……時間だな」
日暮れを合図するような鐘の音は何回か鳴り響き、そして再び静寂が訪れる。空は段々橙色に染まって来ていた。
手に持っていた細剣を腰に納め直せば、俯いてしまったギンに歩み寄り、目線を合わせるように片膝をつく。
「……教会まで、送ろうか？」
「……ううん。約束、したから」
『一週間。一週間だけ、教えれる範囲でだが、お前を鍛えてやる。そして、それが終わったら俺は、この街から出ていくよ』
寂しそうに、必死に涙を堪えながら笑みを浮かべて顔を上げるギンを見つめる。サーシャもそうだったが、どこかでお互いに、もう会えないだろうという覚悟を持っているのは、口にはしなかったが明白だった。
それも、そうなのだろう。明日には死んでしまうかもしれないのだ。確かに街にいれば安全ではある。でも、俺は出ていくという選択をしたのだから。
少年は、目尻に溜まった涙をぐしぐしと片手で擦っては「大丈夫」と笑う。
――察しが良く、おまけに覚悟も俺以上に据わっている。何から何まで、正直お前に負けているよ、本当。
引き寄せるように頭に手を伸ばしては、肩口に顔が当たるように抱き寄せた。一週間前、彼女が俺にしてくれたように。
突然のことでびっくりしたように小さく声を上げる少年の頭をがしがしと掻くように撫でてやりながら、俺は精一杯笑って見せる。
「ちゃんと、また帰ってくるから。頼んだぞ」
一週間だけの小さな約束の後に生まれたのは、大きな信頼。
少年はこれから成長して、先生を支えてくれるだろう。
結局、耐え切れなかった少年の泣き声が止むまで、俺は、腕を解かなかった。きっと、俺の方が、離れがたいと思っていたんだろう。

０５．第十一層　タフト

虚ろな瞳でひたすらに、真っ直ぐを見つめている。
だらりと下ろした手には力が入っておらず、そこに立っているということさえも、まるで不思議だと言わんばかりだ。
「遅くなっちゃったな」
ごめんな、と言葉を掛けてはその頭に手を乗せてするりと髪に指を絡める。
それでも、反応は無い。
音は一時的に切断してあるために、そこはとても静かでそして酷く暗い。
「少し休もうか」
頭部に置いた手をそのまま後頭部に滑らせて、引き寄せるように抱き締める。ぴくり、と腕の中の身体がやっと震える。おそるおそると言ったようにこちらを見上げたその存在は、お互いの視線が混じり合うのと同時に少しだけ目を細めた。
口が緩くあけられて、自分を呼ぶ音が乗る。
ああ、そうだよと、答えながら抱き締める腕に力を込めた。腕の中に閉じ込めたまま、腰を下ろし膝の上に乗せてしまえば近付いた顔を至近距離で見つめながらそっと額同士を重ねる。
「俺が、守ってやるから」
その時が、来るまで。
力の入っていなかった腕が、背中に回り服をきゅっと握る感触を感じながら、俺は彼女の名前を呼んだ。

「我ら、月夜の黒猫団に……乾杯！」

「「「乾杯！」」」

二〇二三年四月八日　第十一層タフトにて、俺はきっとリアルだとんでもない量の冷や汗を掻き、その焦燥感を顔に出していただろう。アバターというのは表情を偽るように隠せないとも言うが、作り出した表情で上書きすることは出来る。それはもう平然とした笑みを浮かべている俺は一見見れば「みんな元気で微笑ましいなぁ」とか考えてそうな人畜無害なプレイヤーだろう。寧ろそう映っていて欲しい。

「そして、命の恩人のキリトさんとアルスさんに……乾杯！」

「「「乾杯！」」」

「か……乾杯」

「……乾杯」

手にあるグラスを軽く持ち上げるようにして、一番最後に言葉を吐き出す。隣には、少しだけ狼狽えた様子を見せた黒髪に黒の瞳、顔立ちは男らしさよりも女らしさを匂わせるような中性的なもので、身体つきも大人しさから醸し出される年上感とはちぐはぐで小柄な少年が座っている。

そう、俺はこの少年をこの世界の誰よりも知っている。名を『キリト』――このゲームをクリアさせ、プレイヤーを解放する、この世界の主人公だ。

少しだけグラスを隣にいるキリトに傾ける。突然のことで狼狽えたままの彼は意図を掴み切れずワンテンポ遅れるが、手にあるグラスを持ちあげることで俺のそれとカチンッと音を響かせた。

遡ること数時間前のことだ。

俺はあれからひたすらにレベリングをしていた。第二層で体術獲得のクエストも終わらせ、一人でコツコツと、それはもうひっそりと、攻略組に見つからないように前線の狩場は避けて少し効率が悪いだろうところに籠りちまちまと、ひたすらにＭｏｂを狩りまくっていた。

最前線が二十五層を辛くも突破した、というのとあまり差は無く、

ギルド『血盟騎士団』が設立された知らせが出回った時、俺のレベルは優に四十を超えていた。
勿論、何度か攻略組に合流して、参戦することも考えた。しかし、決意は固まらなかった。そのため、その知らせを受けた時は人知れずがっかりしたことは……まあ、今語るほどのことではないだろう。

そんな理由から、こんな最前線から十以上も下の層の迷宮区に入る必要は無かったのだが、たまたま、そこで受けていたクエストの素材収集が済んでおらず、未完了のタブの中に残っていたことに気付いてしまった俺は、その素材を集めるためにそこに訪れていた。
難も無く素材を集め終えた俺は、さっさとずらかろうと迷宮区の出口に向かっていたのだが、そこで何回か連続して聞こえる弾けるポリゴン片の音が耳に入った。誰かが、ここでレベリングでもしてるのだろう。邪魔はしないように……と、言っても道的にそこを通らないと抜けられないので≪隠蔽≫も使って、壁に沿ってお邪魔していきましょうと考え道の片側に寄って歩いていた。
が、丁度横を通り過ぎようとした時、この迷宮区に巣食うＭｏｂの一体である武装ゴブリンがそのパーティーの内の一人の女の子に襲い掛かろうとしていた。「きゃっ」という小さな悲鳴が聞こえ咄嗟に抜刀し、片手用細剣　基本技≪リニアー≫を放てば、びっくりして座り込んでしまっていた彼女に振り返る。リニアーの一発で敵のＨＰを削りきれるとは思っていなかったが、どうやら他のメンバーがとどめを刺してくれたようなので、そのまま手を差し出せば「大丈夫か？」と声を掛けた。
「えっと……うん」
恐る恐る頷きながら差し出した手に手を重ねた彼女を立たせながら、俺は返事をする際に顔を上げたその顔を凝視し、そして思考が硬直した。
あ、やばい。やっちまった。そんな言葉が頭を過る。立ち上がった相手は突然反応を返さなくなった俺の様子を疑問符を頭に浮かべながら怪訝そうに見つめている。

「あ、いや、大丈夫ならよかったです。俺はこれで」
数秒で我に返った俺は、咄嗟に笑みを繕い、反射に近いような言葉を並べてそそくさにその場を退場しようとした。その判断は数時間経った今でも間違っていなかったと思う。ただ、タイミングが悪かった。唯一あの時の過ちを言うなら、それだろう。
踵を返そうとした瞬間、ゴブリンの群れを全て倒したのだろう一行が盛大な歓声を上げたのだ。びくんっと思わず肩を揺らせば彼らを見てしまった。そして、とうとう視界に入れてしまった。

「あのー、キリトさん、アルスさん。大変失礼なんですけどレベルっていくつぐらいなんですか？」
祝杯を上げ、自己紹介も終わって場が落ち着くと同じぐらいに、このギルド『月夜の黒猫団』のリーダーであるケイタが問いかけてくる。
ちらり、と隣にいるキリトを横目で見る。そして視線だけ左上に滑らせては自分のＨＰバー、そしてその下に小さく記載されているレベルを見た。俺のレベルは現時点で四十六。改めて随分上げたなあと思う。
「……二十、ぐらい」
自分のレベルにある意味感心していれば、先に隣にいる少年が答えた。原作通り、彼らとあまり変わらないレベルを答えているのを聞いて、心のどこかで良く分からない既視感と違和感が混じって言葉にならない不快感を感じる。多分、数か月ここで過ごしていくうちに抱くようになったこの世界をリアルと感じるようになった気持ちと、どこかで理解している作り物の世界という諦観が上手く折り合いを付けられないことによる衝突のようなものだろう。
こうやって、物語に触れていく度にこんな思いをしなきゃならないのか。この数か月避けてきた問題にとうとう直面し、自分のメンタルよ鋼であれ、と他人事のように思う。そんなことを考えていたために、ケイタからの質問に返答するタイミングを逃したと気付いたのは、再び問いかけてきたケイタの声だった。

「えっと、アルスさんは……あ、答えたくないとかだったら良いんですけど」
「え？あ、ごめんちょっとぼうっとしていて。レベルだっけ？俺は……」
よ、と口を開き音を乗せようとした瞬間考える。
これ、正直に答えていいのか？と。
例えばここで正直にレベルを答えたとする。高レベルのプレイヤーが下層で無双プレイをするのはマナー的にはNGだが、別に無双プレイをしたわけでもないし、寧ろ俺は一応助けた側に分類されるので感謝されど責められはしないだろう。
問題は、隣にいるこの黒い少年だ。
俺は正直に四十六、なんて答えれば絶対びっくりするし、同時に最前線に俺という存在がいたかを真剣に考えるだろう。そして何より焦るだろう。この黒猫団のメンバーは彼がビーターと言われる最前線にいるプレイヤーだと知らない。しかし、俺は知っている可能性がある。どこでバレるか、寧ろ偽っていることを責められるのではないかと不安を煽ってしまうだろう。
そして、そこまで考えて手遅れな事実に気付く。俺が先に本当のレベルを言えば、彼もきっと真実のレベルを告げただろう。そして、黒猫団に属することもなければ、あんな悲劇だって――
そこまで考えて、いや、と自分の思考に停止をかける。
何もしないと言っていた自分が、何を言っているんだ。そりゃあ確かに前向きにはなったと思うが、いきなり原作に関与したと思ったら未来を変えようとするなんて流石に烏滸がましすぎる。
冷静になれ。正直にレベルを答えて関わらないようにしていくべきなのだ。確かに少年は焦るかもしれないが、それは仕方ないことなんだ。ちゃんと、しっかりと嘘偽りなく。
「……二十……五にそろそろ、なりそうかなー……」
嘘、偽り、なく。
「へえ、俺達とあまり変わらないのに、ソロなんて凄いですね！」

後悔と自己嫌悪が一気に押し寄せる。
隣にいる少年と同じように苦笑を浮かべる。俺が答えるよりも先に少年が口を開く。
「ケイタ、敬語はやめにしよう。……ソロって言っても、基本的には隠れ回って、一匹だけの敵を狙ってばかりさ、効率はあんまり良くない」
「そうだな。俺はソロでも安全だろう層でこつこつレベリングしてるだけだし。今日は、クエストに必要な素材を集めるためにソロで狩るには少し上層なところに来ただけなんだ」
「そう……そうか。じゃあさ、キリト、アルス、急にこんなこと言ってなんだけど……良かったらうちのギルドに入ってくれないか？」
「え……？」
知っている流れが目の前を過ぎていく。まさか自分もその対象に入るとは思っていなかった……いや、わかっていて敢えて嘘のレベルを告げたのだから、予想していたその提案にわざとらしく少しびっくりしたような表情を作った。
「前衛出来るのはテツオだけでさ。どうしても回復が追い付かなくて……こいつ、サチって言うんだけど、前衛ができる盾持ち片手剣士に転向させようと思ってるんだ。でも、勝手がよくわからないみたいでさ。良かったらコーチしてやってくれないかな？」
「何よ、人をみそっかすみたいに」
ケイタが隣にいるサチの頭を数度軽く叩きながら事情を説明すれば、そのサチが頬を膨らませて見せた。文章も映像も見ていた時からこのメンバーの仲の良さはわかっていたが、実際に目の当たりにすれば本当に心地の良い空間がそこにはあることがわかる。
俺にとってのあの教会のような――なんとなく、彼がここにいたいと思ってしまった理由もわかる気がした。
「だってさ、急に前に出て接近戦やれって言われてもおっかないよ」
「盾の影に隠れてりゃいいんだって」
「まったくお前は昔っから怖がり過ぎるんだよ」
ちょっとした話題で談笑が続く。隙を見てちらりと横に視線を向ければ、その空間をまるで眩しい物を見るかのようにぼんやりと、し

かしどこか寂し気に見ている少年の姿が映る。
……ん？
その顔に少しだけ違和感を感じた。既視感の中にある、可笑しな点のような。
しかし、それの答えが出る前に再びこちらに掛けられたケイタの言葉に意識はそちらに戻る。
「うちのギルド、リアルではみんな同じ高校のパソコン研究会のメンバーなんだよね。あ、でも心配しなくていいよ。キリトもアルスもすく仲良くなれるよ、絶対」
な？という声かけに他のメンバーが頷く。
「……じゃあ……仲間に入れてもらおうかな。……よろしく」
少しだけ間を置いてから、キリトがこのギルドに入ると言う返事をするのが耳に入った。
メンバー全員が嬉しそうに顔を輝かせる。
「アルスはどうする？」
嬉しそうな表情のまま、問いかけるケイタに少しだけ眉を下げた表情を作り、俺はこの問いが来るまでの間に考えた答えを述べる。
「んっと……俺、実はパーティーでプレイしたことがないんだ。だから、最初はパーティーとして組ませてもらって、ギルドは保留ってことにさせてもらってもいいかな？あ、サチのコーチとかは全然、俺で役に立てるなら協力させてほしいと思ってるんだけど……だめかな？」
「いやいや！そんなことはないさ！いつでも入りたくなったら声かけてくれていいから、じゃあ最初はパーティーとして、よろしくな！」
差し出された手をそっと握った。
心の中でごめん、と付け加えながら。

06．黒の隣　―　1

「今日はどんな話をしようか」
膝の上にいる彼女の腰を軽く引き寄せる。もたれるように胸元に身体を預けている彼女は、そっと目を伏せたまま首を左右に振る。これは、聞きたくないと言う意味ではなく、何でもいいよとこちらに委ねる時の彼女の癖だ。
仕方ない子だと思う。しかし、嫌な気はしなかった。自分で決めることが出来なくなってしまったという現実からは少し目を逸らして、決定権を委ねると言う選択をしたという解釈をして緩く微笑んで見せた。
「なら、この話をしよう。あまりにも酷く、優しい話を」

穏やかな気候である。
空は―アインクラッドの空を空と言っていいかはわからないが―綺麗だし、風も爽やか。聞こえる声はとても楽し気で、ただいるだけで思わず笑みがこぼれてしまいそうだ。
だからこそ、俺はうずうずした気持ちを止められそうになかった。
「きーりーと！」
「わっ!?」
ここは圏外の草原フィールドの中の安全地帯。月夜の黒猫団のメンバーはお互い楽し気に話をしながら用意していた食料にありついていた。約二週間経った今、俺は未だにギルドに加入はせず、みんなが歓迎してくれる言葉に甘えてパーティーに混ぜてもらっている。
そんな中、みんなと話している時は笑みを浮かべることもあるが、一人になるとどこか思いつめたような表情を浮かべてしまう少年―

―キリトに俺はひたすらにちょっかいを掛けていた。
ぼうっとしていたためか、後ろから歩み寄って来ていた俺の存在に一切気付かず、声と同時に背中を叩けばびっくりしたように前のめりになる。思わず吹き出しそうになるのを堪えて、そのまま隣に座り込んだ。
「何湿気た面してるんだよ。寝不足か？」
「アルスか……違うよ、ちょっと考え事してただけだ」
「ふぅん？」
窺うように横目でじーっと見つめてやれば、どこか居心地悪そうに狼狽えた後小さくため息を吐く姿が目に入る。
なんか、違うんだよなぁ。
俺は今のキリトの状態に凄く違和感を感じていた。
確かに黒猫団のメンバーに後ろめたい気持ちから消極的なのだと言ったらそれまでなのだが、どうにも、それだけじゃないんじゃないかと踏んでいる。
しかし、自分と彼はまだ知り合って二週間。しかも最初はお互いパーティーは同じだったというのに話さえもしなかった。気を遣って、というわけではないだろうが仲介に黒猫団のメンバーが入ってくれなかったら、会話一つ盛り上がらなかっただろうことが何度もあった。
正直原作ファンの俺としては、キリトと仲良くなりたい気持ちがめちゃくちゃあったが、逆にあり過ぎたせいで気持ち的には彼はアイドル状態だった。もう気軽に触れられない、俺ごときが話しかけるなんて烏滸がましい。そんなよくわからない感情からどぎまぎして中々打ち解けられなかった。
まぁ、そんな俺も今ではこうやって背中を叩き、揶揄を飛ばしながら隣に座るような行為が出来るようになった。そこで気付いたのが俺という人間は思った以上に慣れやすい生き物らしい。
俺が手に入れたゲテモノレベルのＭｏｂの肉を焼いて食べようかとふざけて言った時、みんなが顔を引きつらせている中、一人だけ目を輝かせていたあの姿を見た瞬間、俺の中の彼への躊躇いが全て吹き

飛んだ。
一言で言うなら「あっめっちゃ好きだわこいつ」ってなった。単純？言うな、俺もそう思った。
まあ、そんなこんなで大分仲良くなった。キリトもよく俺に話しかけてくれるようになった。因みにＭｏｂの肉は二人で焼いた。料理スキル持ってなかったから焦げた。味は微妙だった。

「……なぁ、キリト知ってるか」
「ん？」
「何もないのにぼうっと考え事して、何か手につかないとかそういうのってよ。大体が恋の悩みって言うんだぜ」
「へー……へ、はっ!?」
「ってことで恋するキリトくんのお悩み聞いてあげましょか？」
「何言ってるんだよアルス！」
露骨に顔を真っ赤にさせて声を上げるキリトを見ながら、今度こそ耐え切れず笑いを吹き出した。身を乗り出すようにこちらに身体を寄せてきた彼は、何度も否定の言葉を訴えてくる。その声に気付いた他のメンバーがなんだなんだと寄ってきているが、それにも全然気付いてない。
俺の中の一番の生暖かい微笑みを浮かべながら身を乗り出してきている彼の肩をぽんぽんと叩き、引き離す。キリトはまだ興奮状態が落ち着いていない様子だが否定の言葉の羅列は止めて何度か口をはくはくさせていた。こうやって見ると、年相応の子供っぽさがあるんだよなぁ、と思う。
「どうしたんだ？」
「ん？キリトが恋煩いでぼーっとしてたからからかってたんだ」
「だからしてないって！」
「へ～？」
「ほ～？」
興味深そうににやにやと笑って月夜の黒猫団のメンバーであるササマルとダッカーはキリトを見やる。その視線に居心地の悪さを抱

いたのか再び必死に否定をしているキリトはまるでこの中では弟のようなポジションで、見ているこっちまで楽しくなってきた。
ひとしきりキリトをからかい、楽しく休憩を終えては、彼らのレベリング作業に付き合い、日が暮れる前に拠点である第十一層に戻る。そして、彼らが利用している宿屋の前までくれば、俺は慣れたように踵を返した。
「じゃあ、また明日。時間はいつも通りでいいかな？」
「ああ。いつも悪いな、アルス」
「いやいや、こちらこそだよ。じゃあ、おやすみ」
ギルドに加入していない俺は、ここで皆と別れる。これが俺なりの境界線だ。

俺がギルドに加入しなかったのには、二つ理由があった。
その理由は、正直どちらも正論とは言えないものだ。一つ目は、『いつでもこの物語から離脱できるように』。酷い話だが、結局自分は部外者だ。不都合が生じ、自分に危険性を感じたらすぐさま逃げてしまおうという決して褒められたものではない理由が第一。そして次が、『自分が加入することで大幅にストーリーに影響する可能性』だ。
俺の考察としては、サチが盾持ち片手剣士に移行する、というのはストーリー上結構大事なポイントだと思っている。しかし、キリトどころか、俺さえも加入してしまえば、寧ろ前衛に余裕が出来てしまいサチの移行は即座に無くなってしまっただろう。正直それでストーリーに影響が起きる、とは思いにくいが、俺はまだ、自分が介入することで定められた筈の物語が変わっていくという覚悟を持ち切れてはいなかった。
せめてその覚悟が決まるまで、それまでは彼らの言葉に甘えてこの曖昧なままで――。
きっと、それが全ての間違いだったのだろうと、今だから言えるのかもしれないが。

静かな街に響く足音のＳＥ。

深夜帯。第十一層の転移門に俺はいた。
この二週間、どうしようか随分悩んだが、やっと接触する覚悟が出来た。
「……アルス、なんでお前がここに」
「……や、キリト。お前を待ってたんだよ」
立ち尽くす黒に覆われた少年は、背後から差しているいる仄かな明かりで困惑している表情を浮かべているのが良く見えた。逆にこちらの表情は逆光で見づらいだろう。
「行き先は最前線の二十七層で合ってるか？そっちで話そうか」
「は？お前何言って」
「転移――」
半ば強引に転移してしまえば、後から続いて背後から転移独特の音が聞こえ、足音が数歩こちらに近づいてきたのがわかる。
ひたすらに困惑、なんと声を掛ければいいのかわからないというような雰囲気を出している彼の方へ振り返る。
「歩きながら話そうか」

「俺さ、キリトがレベル嘘吐いてるの知ってたよ」

この二週間。どうにかしてキリトと仲良くなって、真実を共有し合える仲になれないか、そればかりを考えていた。
ぎくりと身体を強張らせるのが見える。別に責めようってわけじゃないけど、そう見えてしまっても仕方ないし、まだ言い出すには早かったかなあとも思う。
しかし時間が無いのも事実だった。先がわかるって言うのがプラスなのかマイナスなのかと言えば、現時点で俺はずっとマイナスばかりだと思っているし、これもまた、プラスのことだとは思えない。それでも、俺はあの時、ギルドに入る覚悟も出来ないのに、嘘を吐いてまでこの関わりを切らずに繋げていた最大の理由のためにも、もうこのタイミングしかないと思ったのだ。

ちっぽけな俺が出来ること、それはキリトの味方になることだ。
「……俺を責めに来たってことか？」
「まさか。責めたいんだったら初めから言ってたよ。キリトだって、その方が妥当だと思うだろ？」
「……まあな」
「それに、責められるなら俺もそうだし」
「え？」
大分歩けば、そこは圏外のフィールドだった。
近くにも、遠くにもＭｏｂが数体いることが目からでも、スキルである≪索敵≫からでもわかる。
足元にあった石を手に取り、軽く近くにいたＭｏｂ一体に向かって投げ付ける。途端、非アクティブだったＭｏｂはアクティブ化し一気にこちらに敵意を向けた。流石にキリトも、突然の行動に焦ったように俺の名前を呼ぶ。それもそうだろう、ここは今攻略中である第二十八層のすぐ下の層。あの時告げた俺のレベルから考えれば、どう考えても危険な行為でしかない。
しかし、これが一番伝えやすく、理解してもらえそうな方法であることだと思っていた俺は、そっと腰にある細剣に手を掛け抜刀し、向かってくる敵に向かってその武器を垂直に構え、使い慣れたソードスキルで一撃で屠ってみせた。
「……は……？」
「……キリト、お前本当のレベルは？」
何が起きたかわからないと言わんばかりの目の見開き様に、思ったよりこいつは予想外の出来事への順応が下手だなと思った。多分人生の経験値が足りないのだろう。それに比べて俺は実年齢は彼と同い年ではあるが、精神的な年齢は前世の記憶を込みでいくと今の三倍にはなるのだ。それはもう涼しい顔を浮かべながら納刀しながら問いかける。
「え、えっと……四十……五」
「俺はね、四十八」
「……は？」

いよいよ思考がショートしそうなのか、段々返って来る言葉が途切れ途切れになってきている。ふは、と吐くように笑いを零してはキリトの前まで歩み寄り、このままだと真っ直ぐ歩くのも難しいだろう彼の手を引いて、先ほど来た道を辿るように圏内エリアへ歩き出す。

普段ならもっと言葉数多く、問いかけてくるだろうに、為されるがまま俺に手を引かれ後に続いてしまっている彼の手をぎゅ、ぎゅっと何度か確かめるように握りながら、この状況には似合わない笑みを浮かべてみせた。

俺は、なんだかこの状況が凄く楽しく思えた。

「なあキリト、情報共有しよう。何でお前が嘘吐いてまであのギルドに入ったのか。俺が、どうして知っていたのにその嘘に付き合ってまで、お前とこうして接触したのか」

07. 黒の隣 ― 2

物語というのは、視点がある。
その一つが抜き取られ、形となる。
客観的に見ていたつもりだった。わかっていたつもりだった。
でも、俺はどこかで、彼を物語の主人公として、自分とは違う生き物だと、そう思っていたんだろう。
そう、願っていたのかもしれない。

「攻略組、第二十八層突破かぁ」
二〇二三年五月九日　第二十層　ひだまりの森。
そのダンジョンの中に存在する安全地帯。そこで俺とキリト、ケイタは並んで座り――ケイタは寝そべってたが――、束の間の休息を取っていた。
この世界にも、新聞と呼ばれる物が存在する。存在する、というよりもは情報を扱うプレイヤーがこうして紙媒体に情報を記し、プレイヤーに配布しているチラシのようなものではあるが。
それを眺めながら、ギルド月夜の黒猫団のリーダーであるケイタはそう呟いた。
そう、先日最前線は第二十八層を突破した。
第二十五層を終え、一度停滞しかけた攻略もこうして勢いはまだ全盛期に比べれば緩やかではあるが確実に取り戻しつつある。ターニングポイントであった第二十五層によって、攻略に参加していたプレイヤーの多くが犠牲なり戦線を離脱したということは、俺は情報として知っていた。しかし、改めて、それを体感した、この二週間でさらに親交を深めた相手であるキリトからその内情を聞かされ、その事実への印象は今までのただ知っていた情報とは違い、あまり他人事のよ

うに思えなかった。
　ぴくり、と思わず反応を示してしまったキリトに気付かずに、ケイタはその新聞に視線を向けながら言葉を重ねる。その内容は、彼の夢から始まり、自分たちと攻略組との違いについての問いかけだった。
「ううん……情報力かな。あいつらは、効率よく経験値を稼げる場所とか、どうやれば強い武器が手に入るなんて情報を独占してるからさ」
　きっと、それはキリトなりの攻略組の一端に籍を置いているからこそ答えられた一つの真理であった。しかし、それこそ内情を知らぬケイタは、その答えが不満そうであった。
　手にある新聞を傍らに放っては、腕を組む。
「うーん……そりゃあ、そういうのもあるだろうけどさ。僕は意志力だと思うんだよ」
「意志力？」
「仲間を……全プレイヤーを守ろうっていう意思の強さって言うかなぁ。僕らはまだ守ってもらう側だけど、でも、気持ちじゃ負けてないつもりだ。……だから、いつかは彼らに追いつける、ってそう思うんだよ」
「そうか……そうだな」
「アルスはどう思う？」
「うぇー……突然俺に振るなぁ……因みにどうとは、どこの部分を聞いてるんだ？追い付けるかどうかって話か？」
「違うよ！俺達と攻略組の違い！」
「ならケイタが結論を言う前に話題を振ってくれよな。いくら頭捻ってもそれ以上にかっこいい答えなんて思いつかない」
「べ、別にかっこいいことを言ったつもりじゃ……」
「よっ！リーダー！かっこいい～！」
　いつの間にか会話を横から聞いていたのか。ダッカーがケイタの首に絡むように腕を回す。軽く締め上げるような動作をしながらもじゃれあう姿は、ここがダンジョン内だと言うことを思わず忘れてしまいそうになるほど穏やかで、思わず口元を綻ばせてしまう。

しかし、そんな視界の端で少しだけ、穏やかそうながらも、その瞳の中に物寂しさを含ませた黒の彼が目に入った。彼が今、どんなことを思っているのか。わかるようで、わからない。俺の知っている原作通り進んでいる筈なのに、俺は、彼がよくわからなかった。

その理由は、彼と打ち解けたあの二週間以上前の事が大きく関係する。

「……へぇ、つまり、お前寂しかったってこと？」

「寂しっ……!?なんでそうなるんだよ」

夜も更け、辺りはあまりにも静かだった。流石にこんな状態で外で会話していても筒抜けでしかないと判断した俺たちは、二人で宿屋へ休憩モードの選択をして入室した。

簡易的なベッドが二つ並んでいる必要最低限しか存在していない部屋の内装を楽しむこともなく、お互いに別々のベッドに腰を掛ければ、まず俺は自分のことを彼に伝えた。

内容としては、大したことは話していない。勿論、自分が転生者で、前世の記憶があることなど一切口にしなかった。自ら情報の公開共有を求めたくせに、そんな自分が秘め事をしているという状態は些か罪悪が募ったが、こんなことを彼に伝えたところで、困惑させるだけで、特にプラスにならないだろうと考えてのことだ。

自分のレベルと、ここに至るまでの行動……具体的に言えば、ゲーム開始一ヶ月経ってからはじまりの街を出たことや、それからひたすら誰ともパーティーも組むことなくソロプレイでレベリングをしていたことを彼に話した。彼以上にソロプレイヤーとして行動していたことが伝わった後の彼の何とも言えないような顔は少しだけ面白かった。俺としては、別にずっとソロプレイヤーでいたかったわけではないんだが。まぁ、組みたい相手がいたわけでもなかったために、少しだけ同情的な視線を向けられてもわざわざ訂正することは無かった。

そして、次はお前の番だと彼に話題を振ったところ、いくつか気に

なる点はあるものの、大体自分が知っていた通りの展開でこのソードアート・オンラインというゲームは攻略されていってたことがわかった。
犠牲となったプレイヤーも変わっておらず、少しだけ胸がちくりと痛んだが、どうにか顔には出さないように努め、話の先を促す。
ぽつり、ぽつりと言葉を紡いでいく彼の言葉は決して楽しいだけの冒険では無かったが、それでもかけがえのない、大切な時間の一つであったことが容易に想像できるような、そんな物語だった。
でも、そんな日々も終わりを告げた。
――それが、第二十五層攻略。
『俺の隣が相応しいとは、思ってなかった』
そう言い募る彼の言葉は、どこか自分に言い聞かせているようにも聞こえた。
視線は少しだけ遠くを見つめているような様子で、何度も言葉を濁しながら、それでも結局はただ一人のことを語る彼の姿は、正直、予想外……と、いうよりひたすらに衝撃的だった。
そして、それを聞いた上で出た言葉が、回想冒頭の台詞に繋がる。
「いや、誰かは知らないけど、要はその彼女と道を違えたのが寂しくて、月夜の黒猫団に入ったってことだろ？」
「は……!?ちが、違う！俺は月夜の黒猫団のあのアットホームな雰囲気が眩しいものに見えて、それで……それに、アスナはそんなんじゃ……」
「へえ、アスナって言うんだ？」
知ってるけど。
「!!や、それはその」
「まぁ、取り敢えず落ち着けって。別に責めるつもりじゃないよ」
顔が赤らんだり青褪めたり、ころころと変わる目の前の少年を見ながら、少しだけ面白げに笑う。
「――ス、おい、アルス！」
「……！っと……何だ？」

「何だ、じゃないぞ。ほら、休憩終わりだってさ。行こうぜ？」
「ああ、もうそんな時間か」
思っていたよりも、深く記憶を遡っていたらしく、気付けば目の前にいるキリト以外のメンバーは先に歩き出していた。慌てるように立ち上がり、少し前にいる彼の隣に並べば二人して同じぐらいのペースで歩き出す。
無理に会話をすることはないが、だからと言って居心地が悪いわけではない。そんな空間が俺とキリトの間には生まれている。それを利用するように俺はひっそりと再度回想に思考を彷徨わせた。
横目に、前方にいる月夜の黒猫団のメンバーを見つめる彼を見やる。それは本当に、眩しいものを見るかのようで……そして、少しだけ、その光景に何かを重ねて眉を顰めるのだ。それをきっかけに思考が彷徨っていた回想の一つの言葉を引き出す。
『――それでも俺は、彼女の一番近くにいたかったんだと思う』
その言葉は、俺にとってかなり衝撃的だった。

「悪い、待たせたか？」
「いや、そんなに待ってない」
二〇二三年五月十六日　第二十八層　狼ヶ原。
この短期間で最前線はまた一層突破して二十九層となっていた。
勿論、参加はしていない。キリトに声はかけられたが、丁重にお断りした。まだ、そこまでの覚悟は無いのだ。ボスへの恐怖がある、という作り話の言葉を素直に受け止めた彼は、少しだけ残念そうにしながらも納得してくれた。
「しかし、珍しいな。一緒に最前列のレベリングに付き合って欲しいだなんて」
「いや、あそこは経験値は結構稼げるんだけど、ソロだと若干狩りにくくてさ……」

「なるほどね」
　その日、いつものように昼間は月夜の黒猫団の狩りに混ぜてもらい、夜は適当にレベリングにでも出ようとしていた予定を、キリトの誘いにより彼と共にレベリングをするという約束に変更し、二人で最前線一つ下の層へと訪れていた。
　話に聞く狩場へと向かうように並んで歩きながら、先日あったギルド内での話をキリトから聞く。どうやら、目標のコルがそろそろ溜まりそうだという話だ。プレイヤーホームを買うのを彼らは夢見ていたのを知っていたために、やったじゃないか、と純粋に笑みを浮かべる。同時に沸き上がるその日が訪れなければいいのに、という考えを表に出すことなく、心の中でぐ、と抑え込んだ。
　夜の暗さを利用して一瞬潜めてしまっただろう眉間をそっと指先で揉むように誤魔化しながら、彼の案内の元目的の場所へと近づいていく。しかし、その歩行は先にその狩場で狩っているメンバーが目に入ったところで止まった。
　少しだけ、息を飲むような、そして気まずそうな雰囲気を隠しきれない彼の姿に反射的に首を傾げる。
「キリト？どうかし……」
「キリトじゃねーか！」
　俺が声をかけるよりも先に彼の名前を呼ぶ声が前方から聞こえる。そして、その声はどこかで聞いたことがある懐かしさを含んでいて俺は思わずそちらへと視線を移してしまった。赤いバンダナを額につけ、顎に髭を携えたかつて黒の少年に野武士面と言われた――クラインが、そこにはいて、キリトの存在にやや嬉しそうにこちらに歩み寄ってくる。
　わ、わぁ、ほんものだ。
　顔には出さないで内心の動揺と感激を一生懸命消化する。よくよく思い出してみれば、ここで彼らのエンカウントの描写があった気がするが、大きくストーリーに関係していないと判断した俺の記憶が、この瞬間まですっかりと忘れていた。気まずそうな雰囲気を持ったまま、返事をするキリトのフォローも自分の自己紹介も全て吹っ飛ん

だ俺は、ただ前方に来た彼を眺めてしまう。そして、その視線にやっとバンダナの彼が気付き、首を傾げた。
「おう、見ねえ顔だけどキリトの知り合いか？」
「あ、ああ。キリトの友達の、アルスです」
「ほう、ほう……！ダチか！かーっ！やったじゃねえか！キリの字よォ！」
「やったって何だよ、やったって……」
「何言ってんだ！同世代のダチだぞ！っと、俺はクライン、よろしくな！」
自分のことのように嬉しそうな表情を浮かべて見せたクラインは、そのまま歩み寄りキリトの背中をバンバン、と強く二回叩いた。ちょっとよろつきながら「ＨＰが減るだろ！」と文句を吐き出すキリトの姿がまるで弟のようにも見えて、正直何回目かわからない年下に見える感情を必死にこらえる――言ったかもしれないが、彼とは同い年である――。
クラインは、そんなキリトを早々にスルーすれば、こちらに屈託ない笑みを向け手を差し出してくる。俺も、つられるように笑みを返せば差し出された手を握り返した。

一人除け者にされたような状態に、不満げなキリトに仕方ないなあと笑みを吹き出しそうになる。が、そんな穏やかな雰囲気も、クラインが視界に入れたたった一つのマークで終わりを告げた。
「んぁ？おめぇそのマーク……ひょっとしてギルドの……」
「！　あ、あぁ……ちょっとな……アルス、行こう」
「え、あ、うん」
指摘された瞬間、何とも言えないような表情を作りキリトはクラインの横を通り過ぎるように歩き出す。追いかけるように俺も歩き出しつつ、クラインの横を通り過ぎる瞬間、軽く会釈だけはした。「お、おお……」と突然逃げるように歩き出してしまったキリトの姿に少しだけ驚きの表情を隠せないクラインが視界に入る。
なんと声を掛けたらいいのか。まさにそんな言葉がぴたりと当て

はまりそうな空気を醸し出すクラインはぽつりと一言を吐いた。それは独り言を呟くように、それこそキリトには届かないぐらいの声量で。

「まだ気にしてんのか……」

――ああ、このゲームが終わるまで、ずっと。

答えを知っている俺は、心の中で答えた。

08・黒の隣　―　3

『……なぁ、逃げ出さないか』
『……どこから』
『周囲から、親から……この世界から』
『……死にたいの？』
『……どうなんだろう。……そもそも俺って』
”生きて、いるのかな”
ぼんやりと、重い瞼を上げる。どうやらたった数分だけだけど、寝てしまっていたらしい。
懐かしい、夢を見た気がする。
「こんなことになるなら、それも素敵だったかもしれないわね」
誰もいない部屋に零した独り言は、どこにも届かなかった。
”うそつき”
目の笑わぬ彼が、眉を下げて笑う。
ええ、そうね。
肯定の言葉を胸の中で告げて、深い記憶の奥底にまた沈めるように瞼を閉じた。

――サチが、姿を消した、らしい。
らしい、というのは、実際それを俺は黒猫団の人から聞いたわけではないからだ。
そうなることを知っていた俺は、そろそろだろうと夜になると自分の借りている宿屋で、フレンドリストに登録された彼女を毎日のようにマッピングしていた。別にストーカーのつもりはない。黒猫団に加入していない故に、自分の方まで連絡は来ないだろうことからの行

動だった。
迷宮区へと向かう数個の点を横目で追いながら、一つだけ違う方向へと向かう点に意識を向ける。きっと、これがキリトだろう。
少しだけ、心配していたので、彼がちゃんとサチを捜し出してくれそうな展開に思わず安堵の息が漏れる。
この世界は俺の知っている物語でありながら、そうではないのではないかと疑問を抱いたのは、キリトと情報を共有した時だ。
確かに大まかな流れや、犠牲となったプレイヤーは間違いなく自分の知っている物語通りだ。しかし、やはり詳細が違うものが何個かあった。
特に、それが顕著に感じられたのは人の”感情”で、キリトがあの時語った、アスナへの感情は俺の全く知らない物だった。
嬉しさ、楽しさ、苦しさ、そして、孤独に、嫉妬。そんなのが一気に混ざったような瞳と、微かに感情が抜け落ちたような声色。あまりに印象が強過ぎて、今も鮮明に思い出せる。
まるで、大切にしていた宝物を誰かに取られてしまったような。
まるで、そこに自分の存在価値を見出していたような。
それは、酷く不安定だと感じさせられた。
――彼は元々このような人間だっただろうか。
始まりも終わりも、わからない。ただそんな事実があったとだけ彼に聞かされた時のもどかしさ。
それと同時にふつふつと湧いてきた、一つの可能性。
それは、自分が何かしたわけでなくても未来が変わっているのではないかという可能性。
知りたいと言う気持ちが湧いて出てくる。
今まではそれを抑えていたが、そうならば、触れてもいいのではないかという期待が日々募っていく。どこかで、大筋の未来を知っているのだから、対応も出来るし何より、自分が何もしなくても未来が変わってきているなら、俺が関与して変えるのと変わらないだろうという思いが大きく育っていた。
だからこそ、もしキリトがサチの元へ駆けつけないと言う展開があ

れば、そこに自分がすり替わってやろうと考えたのだ。まあ、そんなことは無かったのだが。
目の前にあるホロ・ウインドウの画面を操作して自分の装備を変えていく。
最後にマップを見れば、黒猫団のメンバーも、サチも、キリトももう追跡不能な状態だった。それを気にすることなく宿屋を後にして、転移門へと向かう。
サチのことはキリトに任せられるだろう。
確かに、彼は少しだけ俺の知っている彼と違って人との関係の距離感に偏りがあるように見えるが、根が良い奴なのは変わらない。
ならば、自分がすることはただ一つだけだ。

「最近付き合い悪いよな、アルス」
「ん？そうか？」
二〇二三年六月十五日。
俺は、数日振りに月夜の黒猫団と一緒にダンジョンに訪れていた。
隣を歩くケイタが若干不満げにそう声をかけてくるのに対して、俺は多分きょとんとしたような顔を向けているだろう。
正直言えば、自覚はあった。
別に避けていたわけではない。ただ自分がやるべきだと思っていたことをひたすらに行っていた。でもそれは、彼らには言えない内容でもある。故にすっ呆けたような様子を装いながら言及された時用に考えてた答えを口にする。
「ちょっと受けてたクエストが溜まっちゃってさ。消化にあちこちの層に行ってたんだよ」
「えっ……一人で？」
「ん？ああ、一人でだけど……」
ケイタに答えたはずの言葉を近くにいたサチが拾い、何故か酷く驚いた表情を浮かべながらこちらを見ていた。なんでそんな顔をされているのかわからず、少し狼狽える。

サチは、あの失踪以前に比べたら少しだけ雰囲気が和らいだ。きっと、キリトのおかげだろうことは容易に想像できる。どうやら、盾剣士への転向もキリトの言葉もあって一度見送りになったらしい。両手に抱える長槍が、なんだかんだ、彼女に一番合っているような気がした。

「おー……みっけ。はい、≪看破≫っと」

第二十七層　迷宮区。あれから毎晩、日中も時間が許す限り、俺は第二十七層の迷宮区に籠っていた。

もう攻略されている層故に、特に新しい宝箱などもなく、ひたすらにまだ起動していないトラップを看破し、対処していくだけの作業を始めてそろそろ一ヶ月が経とうとしている。

何故こんなことをしているかと言うと、ここが彼らの壊滅した原因となる場所だから、の一言に尽きるだろう。一体どこのトラップに掛かってしまったかはわからないが、ならば先にそのトラップを看破してしまえばそのトラップは再度発動しなくなるのではないかという考えの元の行動だった。実際、一度看破したトラップが復活するのは早くても一週間ほどかかることがわかった。俺はそれを元に頻繁にここに訪れてはトラップを解除し、その時に備えている、というわけだ。

明日、どうやら彼らは目標の金額を突破したことから、プレイヤーホームを買うらしい。というのは、昨日キリトからメッセージがあった。是非とも買った際には立ち寄って欲しいと黒猫団のみんなが言っているという言葉も付け加えてあり、明日、彼らの元へ赴くと返事をしたのは今日の朝方だった。

迷宮区内であり、そもそも滞在している層が違うために新しいメッセージは飛んでは来ないが、昨日来たメールを確認するようにウインドウを開く。指を滑らせていけば、メールは遡り、それこそ一ヶ月前ぐらいから来ていた彼のメールにたどり着いた。

”サチが夜眠れないみたいなんだ”

”それで、夜は俺のところに来てるから暫く一緒のレベリングは出来そうにない”
”君は死なないって言ってやるとやっと眠れるらしいんだよ”
”なぁ、アルス”
”このゲームは、なんて残酷なんだろうな”
「……そうだな」
ウインドウを消して、時間を確認する。
もう少し、回ることは出来そうだ。迷宮区の奥へ、奥へと目指すように歩き出す。
――俺が守ってみせる。だから、だからその時は。
初めて物語へ関与することを決めたその一歩は、酷く重かったことを、今でもよく覚えている。

０９．第二十七層　迷宮区

厳密に言えば、俺はとっくの間に物語に関与していた。
でもそれは、記憶を思い出す前のことだ。
思い出して、こうして関わっていくのは初めてだから、初めてで良いだろう。
人を救おうと決意した、第一歩だ。
俺はひっそりと目標があった。
彼らとちゃんと第二十七層でのコル稼ぎから帰還出来たその時、その時こそ俺は。

「じゃあ、行ってくる。転移！はじまりの街」
目標額の達したギルドの資金を手に、リーダーであるケイタはホームを買うために仲介プレイヤーの元へ向かうために一人はじまりの街へと向かうのを、俺たちは見送った。うずうずとした気持ちを堪えきれないと言わんばかりにササマル、ダッカーが声を上げる。メンバー皆の表情は明るく、この先の未来に希望を持っていると言わんばかりのものだった。
二〇二三年六月二十二日。今日は、原作上では月夜の黒猫団の壊滅した日となる。
しかし、そうはさせない。そんな確固たる思いが俺の中にはあった。
「なぁ、ケイタが家を買ってる間にさ、少し稼ごうよ」
「あっ、家具を買うの？」
テツオの提案に笑みを浮かべながらサチが賛同する。
続いて他のメンバーも賛同し、一人がいつもより上の層に行こうと提案した。
「いつもの狩場でいいんじゃないか？」

ぽつりと、そう提案するキリトの言葉は彼らには届かない。そして、ギルドに所属しているわけじゃない俺の声も届かないだろう。だから、提案も虚しく却下されるキリトの背中をそっと叩いてやる。
大丈夫、そう告げるように。

「言ったろ～！俺達なら余裕だって！」
「もう少しで最前線にも行けるかもな！」
「あったぼ～よ！」
第二十七層迷宮区での狩りは、それはスムーズに進んだ。そもそも大分皆のレベルも上がり、レベル自体ではほぼ安全地帯であるのだ。彼らの言う通り、最前線に加わるのもきっと時間の問題であろう。
俺は彼らにバレない様に何度か≪看破≫を発動させる。先日自分が看破し、解除したはずのトラップが復活してないかの確認だ。ほぼ全てが復活していないのを確認して、少し安心する。
キリトは、ここがトラップ多発地帯である迷宮区だと知っているからこそ、あまりに穏やかな狩りとなったことに少し驚いているようだった。そのネタ明かしは今はしていない。言ってしまえば、ここに狩りに来ることを事前に知っていたとバレてしまうから。
でも、この狩りから無事に帰れたら、俺はキリトにこのことを告げようと思っていた。
未来は変わるのだから、言えると思ったのだ。
流石にラスボスの正体は言えないかなあ、と考える。この段階で言うのはリスクが高い。言える内容も選択しないといけない。でも、それを考えるのは、楽しいと思えた。
そして、彼らにも言おうと思ったのだ。この狩りが終わって、ケイタのところに、皆で買ったホームのところに戻れたら。
「お！こんなところに隠し扉じゃね!?」
俺を、月夜の黒猫団に入れて欲しい、って。
入るのは止めようと、俺とキリトとサチは言った。
俺達なら大丈夫だから行ってみようと、ササマルとダッカーとテツ

オは言った。
多数決なら同数。でも、ならばと彼らは三人だけで行くと言ってしまった。
嫌な予感がした。
だって、可笑しいのだ。
昨日までは、こんな扉、存在しなかった。
言えばよかった。俺は昨日までここに籠って片っ端からトラップを看破していたのだと。
その時に、こんな扉は無かった。だから、何があるかわからないから危険だと、言えばよかった。
でも言えなかった。
あの夜、キリトに俺は忠告した。
共にいたいと思うならレベルは明かすべきだ、と。
そう言った俺が、彼らに言えなかった。

何もかも、間違えてたのは、俺だった。

――ビーッ！ビーッ！ビーッ！
けたたましいアラームが鳴り響く。俺達が入った扉と、突然現れた二つの扉から怒涛のようにモンスターが押し寄せてくる。
溢れんばかりの量。今までのトラップで出てきた数の数倍はいるんじゃないかと思ってしまう数だ。
なんで、どうして。
そんな感情が真っ先に思い浮かぶ。ここは第二十七層。最前線より三つ下ではあるが、みんなで力を合わせれば突破できないものではなかったはずだ。でも、これは、無理だ。
数が、多すぎる。
咄嗟に左手を伸ばす。その先にいたダッカーがキリトの声に反応して転移結晶を手に叫ぶ。俺は目を見開いた。駄目だ、と口だけが動く。やめろ、やめてくれと希う。
左手を振り切るようにしてその勢いを狩りて彼の元へと飛び出す、

間に合え、合ってくれ――！
悲痛な叫びと共に、目の前で砕ける音が聞こえた。
あ、あぁ、と声にならない音が口から洩れる。
咄嗟に、放ったソードスキルは彼を囲んでいたモンスターを倒すことは出来た、なのに、彼は。
「アルスッッ!!」
ダッカーがいない。目の前で砕けた。
見たことがある光景。最悪で、望んでいなかった結末。
立ち尽くす自分を呼ぶ声が聞こえた気がするが、反応は出来なかった。背中をドンッと突くような痺れが来て、前のめりに膝をつく。Ｍｏｂが、俺を攻撃する。
攻撃は、ちっとも俺のＨＰを削らなかった。重ねられれば話は変わるが、これが俺の罪の正体だと言われているような気がして。
「うわぁあっっ!!」
許せなかった。

がむしゃらに叫ぶ。持っている細剣を突く、振る、払う。感情のままに動かし、Ｍｏｂを屠っていく。それでもまだ減らない。終わらない。
視界の端で、テツオが攻撃を受けそうになるのが見えた。ソードスキルの硬直時間のせいで動きが鈍るも、叫びそこへ食い込むように走り出す。左下から右上にかけて払うように細剣を振る。突進に合わせたその剣撃はＭｏｂに当たり、間一髪で仕留めることが出来た。
目元が熱い。視界が赤いエフェクトが弾けている。何なのかはわからない。いや、わかろうとしない。
若干のラグが自分に訪れたのは、その時だった。身体が思うように動かず、反応が一拍遅れる。攻撃がこちらに向かっているのがわかったが、この程度の攻撃なら俺は死なない、一度食らってから体制を整えて、また攻撃を。そう、思っていた視界にその攻撃を阻止しようとメイスを振りかぶるテツオの姿が目に入った。
「やめろ、テツオ、だめだ、やめ――ッ!!」

Ｍｏｂの攻撃が、自分からテツオへとシフトチェンジし、ゴーレム型のそいつの腕はそのまま払うようにしてテツオの腹部へと当たった。ＨＰゲージが消える。

四散する。伸ばした左手が宙を掻く。

その背後で、ソードスキルを発動させて突進するササマルの声が聞こえた。

こんなところで、ソードスキルを使ってしまったら、硬直時間の間に袋叩きに遭ってしまう。そう、冷静な自分が叫ぶ。勢いよく身体を反転させ、それを阻止させようと動くより先に、ササマルの身体もまた、ポリゴン片となって砕け散るのが視界に入った。

「あ、あ、あ……」

もう、一歩も動けなかった。

だから、視界の横でサチ、と叫ぶキリトとＭｏｂに切り裂かれ、口を僅かに動かし、最期にこちらを見て少しだけ眉を下げて笑い砕け散るサチの姿を、ただ、見ているだけだった。

心が、壊れていくのを感じた。

何が前世だ、何が知識があるだ。

全て意味なんてなかった。全て役に立たない驕りでしかなかった。

助けられると思っていた。レベルだって、対策だって申し分なかったはずだった。俺の力で、俺の力だけで、助けられると思っていたんだ。

必死に武器の持たぬ左手を彷徨わせるように宙で動かす。目の前で四散していった彼らのことを思い浮かべる。間に合わなかった、助けられなかった。その思いばかりが募って、募って、それでも涙は出ない。どこかで心が空っぽになってしまったようで、そこにあるのは、どうしようもない空虚。どこかで、原作通りなのだから仕方ない

と自分を正当化しようとする甘えた心があることに気付いて、驚愕と、絶望が俺を彩っていく。
そこに膝をついてしまってどれぐらいの時間が経っただろう。同じように膝をつき、絶望していたキリトがよろよろと起き上がるのが視界の端に写る。
「キリ……ト……？」
「……ケイタに、報告しないとな」
見上げて見た彼の表情は、全てが抜け落ちたような表情をしていて、それがさらに俺の心を抉った。
『ビーターのお前に、嘘つきのお前らに、僕たちに関わる資格なんて無かったんだ！』
落下していくかつての友へ必死に手を伸ばす彼と、落ちて四散していったポリゴン片を視界に入れながらも、俺は一歩も動くことは出来なかった。
――俺のせいだ。
それだけが、胸を支配する。キリトのせいじゃない。俺だ。全て知っておきながら、それに驕って現実をきちんと見ていなかった俺が、全て悪かったのだ。
左手を上げる。何度かその手を行き先が見つからないというように彷徨わせた後、塀に掴まり下を見つめ歯を食いしばる彼へと伸ばそうとする。声が、上手く出なかった。掠れた声で、たった三文字の言葉を絞り出せば、よろりと彼が振り返る。
「……アルスだけのせいじゃないさ。俺が……レベルを隠してさえいなければ」
「……」
「それに、アルスは言ってくれてただろ」
「それは……」
「本当に、共にいたいと思うならレベルは明かすべきだ、って……ごめん、言ってくれてたのに」
「違う。俺だって、言えなかったから」

堂々巡りな応酬だ。お互いに、自分自身が許せない。だからと言って、お前のせいだと責任を押し付けることも出来ない。彼はそういう奴だ。そして、俺も。

じっと底の無い下に視線を戻して見つめている彼の、服を摘むようにして掴む。わかっているはずなのに、このまま彼が追うようにしていなくなったらという不安が、止まらなかった。徐々に靄が掛かったままなのに思考が鮮明になっていくような、そんな矛盾が俺を支配する。

「……悪い。暫く、一人にさせてくれないか」

「……キリト……」

「落ち着いたら、連絡する。……だから」

伏し目がちだった視線が、俺の方と向き合い視線が絡む。暗い澱みを携えた瞳が写る。何故か、それは反射している筈の俺にもあるように見えた。

「アルスは、死なないでくれ」

どくん、と。心臓が鳴るような感覚がした。

ナーヴギアから同期されるのは呼吸と心音だという。別にこの音が止まったところで実際のリアルの心音が止まらない限りは死なないのだが、その架空であるはずの心臓が大きく音を鳴り立てたような感覚。

思わず、頷けず俯いてしまう。死ぬつもりはなかったけれど、そう、感じさせてしまうほど、彼だって辛いはずなのに、そんな彼に心配されてしまうほど、俺が追い詰められているような表情をしていたことがただ、今は辛かった。

「……キリトも、死なないでくれ」

やっと、返せた言葉はそれだけで。ああ、と力のない返事と共に彼が踵を返していなくなるのが音だけでわかる。

今、自ら命を断ったところで、何の贖罪にもならないことが、お互いにわかっている。だから、今は死なないのだ、死ねないのだ。

”このゲームは、なんて残酷なんだろうな”

「……く、ぅ……っ……ぁ、ああ……」

流れない涙が悲しい。嗚咽だけが漏れて、その場に崩れ落ちる。
心の中で、頭の中で、ひたすらに謝る。ごめん、ごめんと。三文字の言葉しか知らないと言わんばかりに何度も、何度も。
ごめん、みんな。
ごめん、キリト。
ごめん、ごめん。
――俺で、ごめん。

１０．第三十五層　迷いの森

心が砕ける音がする。
ずっと寄り添ってきたそれが、脆い何かのように壊れてしまうのがわかる。
私には、どうしようも出来なかった。
手を伸ばす。届かないのに、手を伸ばす。
あれから、一度も来てくれない。
待ってるのに、待っているのに。
待つことしかできない自分が、酷く嫌だった。
――。ねえ、――。
どうして、私を。こんなことなら、私は。

現在の最前線は、第四十九層　ミュージエン。
雪が降る。あれから半年ほど経ったこの世界は、無情にも何の奇跡だって起こりはしなかった。
あれから、俺はキリトと行動することが増えた。
別にお互いにそうし合おうと約束したわけではない。お互いの関係を、なんと言っていいのかさえもわからなくなっていた。
まるで、同じ罪を抱えた共犯者のような、それが、今の俺達には一番ぴったりくる間柄となっていた。
キリトは、それでもずっと攻略への戦いに参加していた。暗い澱みを瞳に携えたまま、話を聞けば、それこそ死ぬことを恐れぬような無茶な戦いをして、彼は最前線で戦い続けた。
反面、俺はまたレベリングに籠るようになってしまった。いくらレベルを上げたところで何かなるわけでもないのに、危険と言われる狩場を許される限り占拠して、ひたすらに剣をふるった。攻略戦には、参加しなかった。出来なかった。

俺は、人と共に戦うことが出来なくなっていた。
お互いに違うタイムスケジュールで動いているにも関わらず、それでも俺たちは共にいた。ねぐらを共にし、野郎二人で何だそれと思われそうだが、ベッドを共にすることもあった。お互いに背を向けて、言葉も交わさない。それでも、お互いにお互いがまだ生きている、それだけがどこか心の支えとなっていた。
昼間や、外では軽口を言い合える仲にまで戻るには、酷い時間がかかった。どこか、触れてはいけない一線を残したまま、俺たちは表面上だけは友達に戻ったのは、それこそ、あれから三か月以上時間が経った頃だったと思う。
歪な関係のまま、さらに時間は経過した。
そして、今日十二月二十四日。
約二週間前に得た情報から、俺たちはこの日まで、ただ一つの目的を持ってひたすらにレベリングを重ねていた。
それは、十二月二十四日夜二十四時ちょうどに現れるイベントボスよりドロップするという。
――≪蘇生アイテム≫
俺は、それに意味が無いことを知っている。
なのに、キリトを止めることも、ましてはその行為に便乗する自分のことも止めることが出来なかった。
倒せたって、手に入れたって絶望しかない。でも、それをキリトに言う資格は俺にはなく、そして、その絶望をキリト一人に背負わせることも、俺には出来なかった。
数日前からお互いベッドに入っていながら、眠れない夜を共にしてきた。流石にこめかみ辺りに刺すような痛みを感じるが、それさえも今の自分には丁度いいと感じた。
ずきり、ずきりと痛む中で思い出す声がある。
でも、それを無理矢理胸の奥にしまい込んだ。都合が良い話でしかない。
イルミネーションが煌々と輝くのをベンチのような椅子に腰かけ

ているキリトの横で、立ちながらぼんやりと眺める。そんな中、背後に人が立つ気配を感じた。
「随分と無茶なレベル上げをしているそうじゃないカ」
「……新しい情報が入ったのか？」
「金を取れるようなもんはないナ」
「……情報屋の名が泣くぜ」
情報屋である鼠のアルゴ。キリトと関わるうちに何度かその姿を目にした。以前までの俺だったら、原作のキャラクターだと思わず心を躍らせていたのかもしれなかったが、今は何も胸に湧くものは無かった。それどころか、関わりを持ちたいとさえも、思わなくなってしまった。
俺の存在をよそに二人は会話を進める。それはキリトなりの優しさであることを俺は知っている。アルゴは俺が何者か、酷く興味があるそうだが、俺が頑なに彼女と会話をしようとしないのだ。それどころか、探るような彼女に何度か顔を顰めてしまったことさえもあり、それに気付いたキリトが、いつからか、俺がその場にいてもアルゴが俺に触れないように会話を遮るようになった。
彼女のことが嫌いなわけではない。ただ、今の自分のことを、誰かに知られたくは無かった。それだけだった。
「……お前ら、目星ついてんダロ？」
「……さぁな」
キリトが立ち上がる。時間は二十四時まであと三時間と迫っていた。そろそろか、と思い俺も組んでいた腕を解いてその背を追うように歩き出す。最後、アルゴがなにかをこちらに言葉を投げかけていたような気がしたが、俺の耳には届かなかった。

第三十五層　迷いの森

時間としては一度も迷う時間は許されないだろう、そこへ踏み入れればキリトは事前にマッピングしていた地図を広げて迷いなく歩んでいく。
それは、数日前から彼が情報屋から得た情報を元に付けた目星を全

て潰し、最終的に彼自身で見つけたモミの木へと導くものだ。特に声をかけるわけでもなく、その背を追うように歩く。
逃れられない戦闘を二度ほどした時に、昼間、彼がレベル七十のファンファーレを鳴らしたのに続くように俺のレベルが七十に乗った音がする。しかし、どうでもいいことだとその音と画面を無視するように先を急いだ。
二十四時まで残り三十分を切った時、場所的にも次のエリア移動で目的のモミの木へとたどり着けそうな位置に俺たちはいた。
俺は、この後の乱入者の存在を覚えていた。しかし、それについて何も言わなかった。追跡されていることは気付いていたが、敢えて言わずここまで一緒に連れてきた。向こうマップからエフェクトと伴って誰かが訪れるのが確認できる。キリトが思わず何歩か下がり、そちらに対峙するのを横目に右手を剣の柄に触れさせ俺も対峙する。
現れたのは数人の集団。それは、よく見知った顔でもある、赤いバンダナの男が率いるギルド風林火山のメンバーたちだった。
「……尾けてたのか」
「まあな。追跡スキルの達人がいるんでな」
「……そうか」
「お前たち二人で攻略なんて無茶なことはやめろ！俺たちと組むんだ。蘇生アイテムはドロップさせた奴の物で恨みっこ無し、それでいいだろ！」
きっと彼は、心底から彼、キリトのことを案じているんだと、そう他人事のように思った。
でも、それは今のキリトには届くことはないことも、俺はわかっていた。死なせたくないと考えるクラインと、サチの最期の言葉を聞くために果ててしまうならば一番相応しい死に場所であるとさえも考えているキリトの気持ちが、交わらないところにあることを。
キリトが、背中にかけた剣の柄を軽く握り込むのがわかる。少しだけ狼狽えたように風林火山のメンバーがこちらに構える。クラインは、咄嗟に片手を上げてそれを阻止する。
「……それじゃあ、意味ないんだよ……俺が……俺達がやらなきゃ」

俺は、キリトの目的を聞いていた。このイベントボス――≪背教者ニコラス≫でドロップされると言われている蘇生アイテムを使って、サチを蘇らせ、約束を守れなかった彼への、たとえどんな言葉であろうと、悪罵であろうと最期に零したその言葉を聞かなければならないということを。

俺は、それに協力することを告げた。意味がないことを知っていたが、もし、俺が前世の記憶などなかったら、俺は迷いなくそう答えただろうから。

俺は、もう前世の記憶のことを考えたくなかった。未来なんて変わらないし、犠牲となる人も変わらないのだ。ならば、何をしたって無意味なら、いっそこの記憶なんて奥底に押し込めてしまった方がいい。本当は、出来もしないのに、俺は逃げるように考えることを放棄した。

「お前ェをよォ、こんなとこで死なすわけにはいかねえんだよ！キリト!!」

その言葉に反射的にキリトが剣を抜こうと力を込める。しかし、それより先か、同じぐらいに大量のワープエフェクトの音が鳴り、その場にさらなる乱入者が訪れる。対峙するように今度はキリトに背を向けるように風林火山のメンバーが身体の向きを変えた。

そこにいたのは、ボスドロップのレアアイテムの為なら一時的にオレンジプレイヤーになることも厭わない、と噂があるギルド≪聖竜連合≫のメンバーだった。

「お前らも尾けられたな、クライン」

「ああ……そうみてェだな……」

残り時間はもうほとんどない。彼らと対峙したとして、そうしてしまえば間に合わないだろう。迷うようにキリトは視線を鋭くさせる。

その迷いは、同じプレイヤーを傷つけることへの躊躇いではなかった。ここで果てるか、この先のボスで果てるか。どちらにしても変わりはない。ならばその剣を取り、機械のように目の前の敵をただ斬ることこそが、終わりに相応しいのではないか――そんな、思いが容易く読めてしまう。胸の奥底でギリ、と音がするような痛みが感じた気

がした。右手で剣の柄を握る。
俺がクラインを、ギルド風林火山の追跡を許したのはこの聖竜連合への足止めとさせるためだ。彼らはいつの間にか、クラインではなくこちらをターゲットに追跡していたのに俺が気付いたからだ。
でも、俺はここで彼らの足止めになろうと思った。もう考えることが億劫だった。誰を犠牲にして、誰を助けて、何が正しいのかなんてわからなかった。ただ、邪魔してほしくなかった。
キリトと、俺の邪魔をしてほしくなかった。
「ああ、くそッ！くそったれがッ！」
そんな俺の思考を遮るように、近くにいた刀使いが声を放つ。誰よりも先に腰にある武器を抜き放つと、俺達に背を向けたまま、叫ぶ。
「二人共行けッ！ここは俺達が食い止めるッ!!でもなァ、死ぬんじゃねえぞ手前ェら！」
ツキン、と胸が罪悪で痛んだ。
足止めにしようと考えたのは俺だった。でも、そんな俺さえも彼は生きろと、言うのか。
「……すまない」
自然と、言葉を返した。
キリトは何も言わず、走り出す。それを追うように俺も走り出し、後に続くような形で、俺たちはそのマップから次へと移動した。

開けた空間に、一本大きな木が聳え立つ。
それがモミの木であることは、なんとなくわかった。どこかの記憶で、図鑑として見た気がする。それと、よく似ていた。
時間が、二十四時――零時となる。
途端に、鈴のような音がシャンシャン、と鳴り響く。その音につられるように、俺とキリトはモミの木の梢を見上げる。
雪が、降る。止むことなくしんしんと降って来る漆黒の夜空に、二筋の光が伸びてきた。それはモミの木を通り過ぎるように伸び、その半ば丁度モミの木手前のところから大きな影が降って来るのが見えた。

数歩下がるようにして距離を取る。
そこに、落ちてきたのは赤と白の服を来た奇形と表現するのがぴたりと当てはまりそうな、大きなＭｏｂ。ギギ、と少し軋むような音を立ててはこちらを判別し、クエストに沿った台詞を口にしようと、その縺れた髭を微かに震わせる。
「うるせぇよ」
が、その台詞は一言たりとて、発されることはなかった。

11．第四十九層　ミュージエン＊

この半年間、ずっと心の中で思ってきたことがある。
サチに問いかけられた、このゲームの意味。意味なんてないと答えたあの言葉は、真実であったと。
茅場　晶彦という狂った天才が作り出したこのデスゲームの中で、サチは意味も無く死んだ。
きっと、俺もいつか意味も無く死ぬ。成し遂げようと大きな目的さえももう持てない俺は、滑稽だと嗤われ、この命を散らすのだ。
それでいいと思った。
ただ、一つだけ……いや、二つだけ、心残りはあった。
一つ目が、アルスだった。俺と同じ目に遭った彼を、俺は死なせるわけにはいかなかった。何の意味も無い俺でも、もう誰かを犠牲にすることは嫌だと思ったのだ。でも、それはアルスとて一緒だった。
攻略組に戻り、前線で戦い続けることを選んだ時、彼は酷く置いて行かれたような表情を浮かべた。言葉にしなかったが、きっと、俺に死なれることが、嫌だったのだろう。
俺は、その気持ちに応えられないと思いながらも、彼を振り払うことは出来なかった。時間が合う限りは共に過ごし、お互いの生を感じ合う。まるで傷の舐め合いのような関係だった。それでも、彼が安心できるならそれでいいのだと、まるで、サチの代わりのようにアルスを見ていた。
二つ目は、……ずっと心のどこかに引っかかっていること。
なんて声をかけたらいいのかわからない。でも、彼女のことを忘れたことは一度も無く、鮮明に記憶に刻み付けられたたった一人の女の子。
俺が死んでしまった時、彼女はどう思うのか……何の意味もない、俺の命も、俺のしてきたことも。でも、彼女がその時泣いてくれるなら、意味があったのではないか、そんな不相応な欲があることを、俺

は心の奥にしまいこんだ。
でも、その心残りも何もかも、全てはここで終わる。
二〇二三年十二月二十四日、夜二十四時に現れるイベントボス≪背教者ニコラス≫。
そいつがドロップすると噂される蘇生アイテム。俺は、それを求めるために、止まることを止めた。
自分の持てるアイテムをすべて使う。もう必要ないだろうから。
ここで、俺は果ててしまって構わないと思っていた。もし、仮に生き延びてしまっても、その時は手に入った蘇生アイテムで、サチを蘇らせ、彼女の言わんとしていた言葉を受け止めることが出来る。
ただ、アルス。彼だけは死なせるわけにはいかなかった。止めたところで、共にすると聞かないだろう彼は、ここまで一緒に来てしまった。だからこそ、俺の問題に彼を巻き込み、死なせることだけはしたくなかった。
そして、ここで彼を生かせることが出来れば、サチの代わりとして見てしまっていた彼への、ほんの僅かな贖罪になるだろうとも、思っていた。

約一年、このソードアート・オンラインの中で過ごして来て、ここまで危機に瀕し、辛くも勝利したことは初めてだっただろう。
ボスが倒れ、最後に残った頭陀袋も四散した時、俺のアイテム欄には回復アイテムは一つも残っていなかった。
――生き延びて、しまった。
どこかで、ここで死ぬだろうと思っていた俺は、ここ数日の過酷なレベリングや可能な限り貯めた回復アイテムの存在を責めたくなった。そんなことをしなければ、俺はきっと死ねたのだろう。
死にたかったわけではない。でも、死んでもよかった。矛盾にも近い気持ちがぐるぐると回りながらも、本来の目的の物を探すべく、右手を動かしてウインドウを表示させる。
震えそうになる指を抑えて慎重にアイテム欄をスクロールさせた。そして、数秒後、俺はそのアイテム見つけ、何度もミスタップしなが

ら、何とかそのアイテム――≪還魂の聖晶石≫を実体化させる。

本当に、彼女を生き返らせることが出来るのか？

俺は、サチにもう一度会えるかもしれないと考え、胸の奥底が震え、何かを渇望したような感覚を覚えた。生き返ったサチが、俺のことをいくら罵ろうともそれでも構わないと思った。あの細い身体を抱き締め、今度こそは、死なないと、絶対に守ると誓えるなら俺は――。

森の中に戻った時、そこにはクラインと風林火山のメンバーしかいなかった。聖竜連合の姿は無く、俺は、そこに座り込んでいるリーダーであるクラインの元へと歩み寄る。

近付く俺に気付き、見上げた彼の顔は一瞬安堵に緩んだが、俺の表情を見た瞬間、その顔を直ぐに強張らせた。

「……キリト……」

「それが蘇生アイテムだ」

手にあった聖晶石を、クラインに投げ渡す。

受け取ったクラインは、それを手慣れた手つきでタップし、ヘルプ画面を開く。

「なになに、対象のプレイヤーが……ッ、十秒以内……!?」

【このアイテムのポップアップメニューから使用を選ぶか、あるいは手に保持して≪蘇生：プレイヤー名≫と発生することで、対象プレイヤーが死亡してからその効果光が完全に消滅するまでの間（十秒以内）ならば、対象プレイヤーを蘇生させることができます】

「次にお前の目の前で死んだ奴に使ってやってくれ」

それだけを言い放ち、その場を去ろうと踵を返せば、俺のコートをクラインが掴んだ。

「キリト……キリトよォ……お前ェは、生きろよ……最後まで生きてくれ……」

何度も生きろ、と告げるクラインの手をコートから引き離す。俺に

は、どうして彼がこんなにも俺の生を望んでいるのかわからなかった。

気付けば、四十九層の宿屋の部屋に俺はいた。

時刻は、午前三時を回っていた。

「キリト」

そこで、やっと一度も俺に対して声をかけなかったアルスが俺に声を掛けた。

イベントボスを倒してから、俺が蘇生アイテムを手にし、その真実に叫び嘆いた時も、クラインにそれを投げ渡し、その場を後にした時も、彼は、何も言わずただ俺の後を追ってきた。その表情は、微かに俯いていて、一度も伺えなかったが。

声に応えるようにアルスの方を向く。俺と変わらない程に、光を失ったような瞳が俺を見据える。無意識だろうか、その右手がそっと俺に伸ばされ、俺の服を掴もうとしている。

「悪い」

その手を、軽く身を引くことで俺は遮った。

少しだけ目を見開き、そしてやっと自分がしようとしていたことに気付いたのだろう彼は、自分の右手を見て、顔を顰める。

――これで終わりだ、と思った。

サチの代わりのように見てしまった彼を、ここまで生かせることが出来た。それだけを免罪符に生きようとする浅ましい自分と、そして、そんな俺に付き合わせてしまった彼との関係を、終わらせるべきだと思った。

そして、その言葉の意味を理解したのだろう、アルスは置いて行かないでと言わんばかりに、こちらに視線を向ける。俺は、そっと目を伏せて首を横に振った。

「おやすみ」

今日は、お互いに別の部屋だった。

ウインドウを開き、ずっと組んでいたパーティーを解散させて、別れの言葉にしては何とも軽いだろう台詞を告げて俺は部屋に戻る。

彼が、アルスがどんな表情をしていたかは、わからなかった。

静かな、夜だった。クリスマスとは思えないぐらい、静かな。

机に伏すように目を伏せて、どれぐらいの時間が経っただろうか。眠れたかどうかもわからない。段々と、日が昇って行き、辺りが朝を迎えようとしているのがわかる。

これから、どうしようか。

そんな、当てもないことを考える。一人フロアボスに向かうのもありかもしれないと思えば、何だがあまりの滑稽さに笑いが零れそうだった。

サチも、ケイタも、テツオも、ササマルも、ダッカーも。

……アルスも。

みんないなくなった。俺のせいで。

ピピ、ピピピッ。

その時、聞き慣れないアラームが俺の耳に届く。

アラームを知らせるアイコンが、目の前に現れ、そっとそれをタップすると、文字が浮かぶ。

≪Ｇｉｆｔ　Ｂｏｘ　Ｓａｃｈｉ≫

「サチ……？」

出てきたのは、メッセージ録音クリスタルだった。

明滅するクリスタルをおそるおそるタップすれば、そこからは、懐かしいサチの声が聞こえた。

メリークリスマス、キリト。

君がこれを聞いてる時、私はもう死んでると思います。

何故なら、これが最期の我儘として遺してもらった物だからです。詳しい話は内緒ね。

えっと……、最初に、何でこんなメッセージを遺すことにしたのか、説明するね。

私、わかってたの。私はあんまり長い間生き延びられないって。も

ちろん、キリトやアルスを含めた黒猫団の力が足りないとか、そんなことを考えてたわけじゃないよ。キリトもアルスもすごく強いし、他の皆もどんどん強くなってたもん。

でも、私は長い間生き延びられないと確信していました。なんて言えばいいかな……。この間、アルスに「怖くないの？」って訊いたの。そしたら「怖いよ」って言われて、その時思ったの。この世界で生きてくには、どんなに仲間が強くても、本人に生きようっていう意志や、覚悟が無ければ駄目なんだって。

私ね、ほんとのこと言うと、ずっと怖かった。街から出たくなかったし、モンスターだって見たくなかった。黒猫団のみんなと一緒にいたかったけど、狩りにでるのは嫌だった。

生きようって意志があったらね、きっとこれを私、みんなに言えてたと思うの。でも、言えなかった。言えないまま、怖いって、戦いたくないって気持ちを抱えてた。

そんな気持ちで戦ってたら、やっぱりいつかは死んじゃうよね。それは、誰のせいでもない、私自身の問題なんです。キリトは、あの夜からずっと、毎晩毎晩、私に大丈夫って言ってくれたよね。絶対死なないって。だから、私が死んでしまって、きっと凄く自分を責めるでしょう、自分を許せないって思うでしょう。だから、これを遺すことにしたの。キリトのせいじゃないよって、悪いのは、キリトに甘えて、きちんと向き合わなかった私なんだって、伝えたかったから。

これが届くのを、クリスマスにしたのはすぐに送っても、君は素直に受け入れられないだろうって思ったから。あとは……沢山私に与えてくれた君に、私から最期に何か、与えられたらと思ったから。

えっと……あのね、私、ほんとはキリトがどれだけ強いか知ってたんです。キリトのベッドで目を覚ました時、君が開いてるウインドウ、後ろから覗いちゃったの。アルスのは知らないけど、でも、きっと君と同じぐらい強いんだろうなってことは、キリトの本当のレベルを知った時に察することは出来たよ。

二人が、本当のレベルを隠して私たちと一緒に戦ってくれるわけは、一生懸命考えたけどよくわかりませんでした。でも、いつか自分

から話してくれると思って、ほかの皆には黙ってることにしました。
――えっと、結局何が言いたいかと言うと、私が死んでも、キリト達は頑張って生きてね、ってことです。生きて、この世界の最後を見届けて。
この世界が生まれた意味、私みたいな弱虫がここに来ちゃった意味、そして、私たちが出会った意味を見つけてください。それだけが、私の……私達の、願いです。
えっと、大分時間余っちゃったな。
出来る限りいっぱいメッセージを遺せたらって思って、我儘言いすぎちゃったかな……。
じゃあ、えっと、折角のクリスマスなので、みんなで歌を歌います。私ちょっと、歌得意なんだよ。
曲は≪赤鼻のトナカイ≫にしようかな。
理由はね、君がこないだの夜に「どんな人でも、きっと誰かの役に立ってる」って言ってくれて、私みたいな子でもこの場所にいる意味はあるって思えて、凄い嬉しかったから。
私がトナカイで、君がサンタみたいで……ううん、本当はね、キリトのことお父さんみたいだなって、ずっと思ってた。
それじゃあ、歌います。
……みんな話したくてうずうずしてる。ふふ、だめだよ、これは私のお願いした我儘なんだから。でも、歌ぐらいなら、いいよね？
――私にとって、皆にとって。君は、暗い道の向こうでいつも私たちを照らしてくれた、星みたいなものだったよ。
じゃあね、キリト。君と……君たちと、逢えて、一緒にいられて、本当によかった。
「「「「ありがとう、さよなら」」」」
”キリト”
最後に、低く、それでいて、優しい声が聞こえた気がした。

ぽた、と頬をから流れるそれをそのままに、俺はそっと部屋の扉を開く。

――そこには、同じように涙を零しながら、足元に再生を終えた録音クリスタルと、座り込んでいるアルスの姿があった。

１２．第五十層　アルゲード　―　１

――澄んだ、空気の匂い。

微かに響く機械の音は、始終つけているエアコンの音だろう。鈍い音が耳に響くのと同時に、意識は段々と覚醒してくる。

ゆっくりと目を開けば、ひたすらにそこは薄暗く、視線だけ左右に動かしても部屋の中を伺うのは難しそうだ。

身体をゆっくりと起こす。みし、みしと筋肉が軋むような痛みを与えてくる。微かに顔を顰める程度でそれを耐えながら起こしきれば、頭にぴたりとハマっているヘルメットのような物を外すために顎にあるハーネスをカチリと外す。ふわりと、外したことで広がる髪の毛の長さがそろそろ肩につきそうだと気付く。前髪も大分伸びて視界に多大な邪魔を与えていた。喉が渇き、張り付いたような痛みがある。声を出そうにもヒュ、と掠れたような音の後には痛みで上手く出せそうにもない。

密度の高いジェル素材が使用されたベッドの傍らにある小さな冷蔵庫へと手を伸ばす。右開きのその扉を開き、一番手前にあるミネラルウォーターを手に取る。目的の物を手に入れれば、もう用はないというようにやや乱暴めに扉を閉めようとするも、あまり力は伝達されずゆっくりと何とか閉まりきった。少し手間取りながらも、ペットボトルの蓋を開けることに成功すれば、その中の水をゆっくりと喉に流し込む。冷たい物が喉を刺激し、飲み込むように動けばチリチリとした痛みを与えてくる。

痛み、というものが存在する。

「……髪、いい加減切るか」

クリスマスが終わり、周りはもう年越しブームで年末の休みのせいか、外を歩く人は一段と多い。

深く被った黒のキャップに寒さを凌ぐためとぐるりと巻いた暗め

のカーキ色のマフラー、グレーのチェスターコートを羽織り、黒の皮手袋をした手はコートのポケットに突っ込む。大きな流れを生み出している人の流れを縫うように目的の場所へと歩んでいく。交差点の先の信号が赤く光っているのが視界に入り、歩みを止めた。

ざわざわと特有の喧騒が耳に入る。遠くから聞こえるクラクションの音、反対側の横断歩道が青であることを知らせる音、人の、声。

『あの茅場晶彦が開発したゲームによって、約一万人がゲームの中に囚われの身となってしまった事件から、一年以上が経過し、二度目の年末を迎えます』

大きなモニターから聞こえる声。何かの特番だろうか。引っ張られるように視線をそちらに向ければ、何人かの大人が、半円になるようなテーブルに沿って椅子に腰を掛け、話し合うように言葉を交わし合っている。

『彼――茅場　晶彦もまだ見つかってないとの情報です』

『しかし、一年も経って現状が何も変わらないとは……警察の方も何をやっているんでしょうね』

気付いたら信号は青に変わっていた。少し出遅れつつも歩き出す。特に結論が出ない言葉のやり取りを左耳から右耳に流すように聞きながら、俺は歩く、歩いていく。

そしてやがて、目当ての店の前に辿りつけば、カランカランと音を立てながら、その扉を押すようにして開いた。

「はい、いらっしゃいませー」

「……あの、十一時から予約していた者ですが」

「あっ、はいお待ちしておりました、こちらにどうぞー」

年末にも関わらず営業していた美容室の一席に腰を掛ければ、深く被っていたキャップとマフラー、コートを脱ぎ手を差し出してくる店員に預ける。

「綺麗な色ですね、自前ですか？」

「……ええ、まぁ」

指先が髪を梳くように滑っていく。少しずつ身体の強張りが抜けていき、三十分後には煩わしいと思っていた長さの髪たちの面影はな

く、さっぱりとした印象を与えていた。
軽く頭を振るようにして、長さを確かめこれでいいかと確認を取ってきた美容師に頷いて返事をする。
「……ここの店長は今日はお休みですか？」
「え？」
「あ、いや……かなり以前に一度ここに来た事あって」
「あ、そうなんですか？店長はちょっとお休み中なんですよ」
「……そうなんですね」
「帰って来れればいいんですけどねぇ……っと、いけないいけない」
笑って誤魔化そうとするのに、つられるように何も気付いて無いと言わんばかりの笑みを返す。徐に立ち上がり、会計をお願いすればやや慌てたようにレジの方に向かう背中を見届ける。
典型的な礼の言葉を背に店の扉を開けばまた、思わず肩を竦めそうになるほどの冷たい風が顔を打ち、軽く目を瞑った。
癖のようにポケットに突っ込んだままの端末を取り出すも、その画面が真っ暗なことに気付いてそのままポケットに戻す。電源は、まだ入れられないんだった。誰に見られたわけでもないのに、ちょっと気恥ずかしさを隠すように頬を指先で掻いた。
そのまま、次の目的地へ向かうようにまた人の波に紛れていく。

指を、滑らせる。
同時に展開する画面は三つほど。順に試行され、エラーが起きる。その部分を抜き取り、修正を施す。繰り返す、何回も、何回も。ある程度修正が終われば、次の展開を指示するように用意していた新しいプログラムを起動するタグを作り出し、繋ぎ合わせる。そして、一つにする。間違いなど起こさないように、何度も繰り返す、何度も。
気付けば、タイムアップを知らせるアラームの音が鳴っていた。電波を妨害させる機械を使うことでどうにか起動出来た端末が鳴り響いている。画面に写る時間は、外を出てからそろそろ八時間を経とうとしていた。
片手で端末を手に取り、慣れた様子でタップしアラームを止めてそ

のまま電源を落とす。目の前のデータ達も全てバックアップを取り、データを大容量のＵＳＢに落とし込んで電源を切った。辺りを見渡し、忘れ物がないことを確認した後、その場を後にする。

――年越しだし、蕎麦でも買って帰ろうかな。

道中のスーパーに寄ってある程度買い物を済ませる。レジを通して渡された袋に買った物たちを適当に放り込んでいれば、隣にいた女性二人の会話が軽く耳に入って来る。

「一年以上前に行方不明になった男の子、まだ見つかってないんですって」

「まだ中学生なんでしょう？可哀想に……」

「でも、一人暮らしさせていたんでしょう？捜索も打ち切られたって話みたいよ」

「まぁ、一年も経っていればねぇ……」

ぴく、と一瞬手が止まりそうになるのを無理矢理動かして、何事も無かったようにその二人の後ろを通り過ぎ、出口へ向かう。惣菜で買った天ぷらを蕎麦の上に乗っけて食べようと思いながら帰路につく。

季節のせいか日が沈むのは早く、辺りは大分暗い。寒さもさらに厳しく感じて、小さな声で寒い寒いと繰り返しながら急ぎ足で歩んでいく。

ふと、振り返るようにその喧騒を視界に入れた。

――そこは、相も変わらず灰色の世界だった。

「……へぇ……攻略にも年末休みなんてあるんだ」

「まぁ、去年は年末に第五層突破したんだけどな。今年は、次の攻略が第五十層で難関だろうから、その前に年末休みってことで一度身体を休めようってなったんだ」

愛剣である≪ウンディーネ＋１２≫を、手にある布で磨いていく。ベッドに腰を掛けながらホロ・ウインドウを開き、どうやらアイテム

整理を行っている親友は、もう片方の手でこの第五十層の店で売っていたというよくわからない饅頭みたいなものを食べていた。
行儀が悪いぞ、と最初は言っていたが、生返事しか返さない彼に最早言葉も浮かばない。まぁどうせ食べカスが出るわけでもないのだからいいか、と気にしなくなったのは記憶の中でも大分古い出来事だ。
二〇二三年十二月二十八日。第五十層　アルゲード。
つい一昨日第四十九層が突破され、この第五十層が解放されたそこは、あまりに賑やかで多くの攻略組ではないプレイヤーも訪れていた。
この層の攻略には、酷く手間がかかるだろうと言うことは容易に想像できる。なんたって五層ごとに難易度が上がり、第二十五層は一種のターニングポイントと言えるほど桁違いな難易度の攻略となったことから、この第五十層の攻略もそうである可能性が高いのだ。一度経験してるからこそ、よりいっそう攻略組も慎重になっているようだ。
磨き終えた愛剣を鞘に納めては、キリトの買ってきたよくわからない饅頭をアイテムストレージから取り出し口にする。どちらかというと肉まんに近いような味がする。悪くないな、と思いながら咀嚼しつつ、彼の言葉に対して疑問を挙げる。
「で、攻略再開はいつからってなってんの？」
「一応一月四日から……」
「まじで年末年始の休みって感じだなぁ……」
つまり約一週間弱の休みというわけだ。攻略組も珍しくホワイト企業のようなことをしてくれるもんだと感心する。まぁ、かといって脱出不可能なこのデスゲームにおいて、帰省なんて言葉は無縁なため、この休みが意味があるのかどうかは些か疑問が残るところだが。
二つ目の饅頭を手に取って食べているキリトを横目に、ぼんやりと考える。
それは数日前の、それこそクリスマスのイベントボスを倒し終えた次の日の出来事だ。

目の前で嘆き、叫び、絶望していたキリトを黙って見ていた。その度に痛む胸に段々呼吸が苦しくなったのを覚えている。このままだと儚く消えてしまいそうな気がして、思わず手を伸ばしかけたものの、その手は彼から拒絶された。同時にその手が彼への心配だけではなく、自分自身の甘えからも来ていたことに気付いて酷く自己嫌悪したものだ。

原作から考えると、きっとその夜キリトの元へメッセージが贈られる。それで、彼は復帰する。わかっていたが、それでも俺の不安は消えず、朝訪れた時には本当に一人でフロアボスに挑むとか、そういう無茶をしようといなくなっているのではないか。そんな疑いから自分の取った部屋に戻れず、ひたすらにキリトのいる部屋の前に座り彼が出てくるのを待っていた。

まさか、そんな自分にもメッセージが贈られてくるとは思っていなかったが。

『……アルス』

『……キリト』

『その……ごめん。色々、心配かけて』

『……俺の方こそ、悪かった』

『……サチが、この世界の意味を見つけて欲しいって、さ。……だから、俺は生きようと思う』

『……』

『……それで、アルス。君にも一緒に来てほしい』

『……は』

『この半年、色々迷惑かけたとは思うけど……改めて、ちゃんとお前と向き合いたいんだ』

『キリト……』

『なんか、変な事言ってる気はするんだけど、その、ちゃんと、友達にならないか、俺達』

今思い出してみても、どう考えても、コミュ障レベルで言うと俺の方が格段に上だなと、思う。凄い情けなくて、恥ずかしいと思った。

でも、こちらこそよろしく、と手を差し出した時に浮かべてくれた

笑顔を思い出せば、そんなのことも気にならなくなってしまった。キリトの笑顔って、相当レアな気がするし、何よりこのソードアート・オンラインの時のキリトは十四歳の容姿でとても中性的だ。そんな彼の笑顔ってこう、一言でいうと、可愛い。守りたい、この笑顔、とか思ってしまった。勿論、俺にその気は無い。断じて無い。

それから、クラインのところに行って、二人して謝ったら号泣された。蘇生アイテムは、クラインは返すと言っていたが、そのままクラインに持っててもらうことになった。きっと、彼ならそれを大切な仲間のために使ってくれると俺もキリトも思ったからだ。

そんなことがあってから、まだ三日しか経っていない。しかもキリトに至っては、次の日にはもうフロアボス攻略に参戦していた。

そんなキリトは一日一日確実に、以前の彼を取り戻し、穏やかにかつ、彼らしく戻ってきていると思う。

横目に見ていたことにやっと気付いたのか、「なんだよ……や、やらないぞ？」と手にある饅頭を隠そうとする素振りを見せるので要らないと即答する。

――俺は、どうなんだろうか。

誰にも訊けないそんな疑問が浮かぶ。キリトはきちんと前に進んでいる。俺も進もうとは思っている。でも、進めているのかがわからない。こういう気持ちの成長というのは、可視化出来ないからこそ不安になるものだ。

手にある饅頭の最後の一口を食べ終えて、癖のように口端を親指で拭いつつ、そんな不安から脱却するために、目に見えた成長をするために昨日から言おうと思っていた申し出を彼に告げようと口を開く。

「なぁ、キリト、お願いがあるんだけど」

「ん？」

「年末年始休みならさ、――俺とパーティー組んで、一緒に狩りに出ないか？」

イベントボスでも、連携も出来なくなっていた俺のその申し出に目を見開き、口をぽかんと開けて手にあった饅頭を落したキリトが、そ

ここにはいた。

13．第五十層　アルゲード　―　2

この世界は、仮想であっても、幻想では無い。
なんて、言葉を並べてみても、結局のところその違いというのは酷く曖昧なものだろう。
どちらにしても「もしこうであったら」という想像の意味であり、どちらにしても「実現」しているわけでは無い。
でも、ならば仮想世界と言われるこの世界は何なのか。
それがきっと、あの物語の問いなのかもしれないと強く感じたのは、やはりこの世界に来て、実際に体験してからだ。
仮想世界で過ごした生活は仮想の物でしかないのか。
では、この胸に抱いた感情は、共に過ごし築いた関係は、作り出されたまがい物だというのか。
答えは、やはり「否」であろう。だって、この感情も、俺が手に入れた関係も全ては俺のものであり、誰にだってそれを侵すことは出来ない。
そう、俺が抱えている問題も、真実も全て俺のものだ。
きっと、ここは一つの現実だというのは真理なのだ。
何の根拠もない結論なのかもしれない。それこそ、仮想が作り出した幻想なのかもしれない。でも、俺はここで築いたものを忘れたくはないし、嘘だとは思いたくない。
それは、この目の前にいる彼も同じなのだろう――。
「――ス、アルスッッ！」
「ふぁいっ!?」
「スイッチって何度も言ってるだろ！」
「あ、わ、悪い！」
……なーんて、考えてたのは一種の現実逃避だ。
二〇二三年十二月三十一日、今日は現実世界で言うところの大晦日だ。日付を越えれば年が明けてまた一月から始まる。

そんな年の瀬、俺とキリトはというと、ダンジョンに潜っていた。
原因は完全に俺にある。つい先日俺の方から彼にパーティーを組み、狩りへ行くことを申し込んだところ、受諾された。
俺は約半年前に起きたあの件から、完全に人とパーティーを組んでも連携が取れなくなってしまっていた。誰かを庇おうとしても身が竦み、スイッチと声を上げようにも上手く言葉が出なくなってしまった。それでも、そもそもはソロで活動していたわけで、攻略にも参加する気が起きなくなってしまっていた俺は、その問題を深刻と思わず過ごしてきた。
しかし、クリスマスに贈られてきたサチからのメッセージから始まり、友人であり親友と呼んでもいいだろう彼、キリトの言葉もあって俺はこの現状を打開し、この層は無理でも次の、いや次の次ぐらいの層攻略には参加したいと思うようになった。このキリトとの狩りは、そのためのリハビリのような意味が含まれている。
そして、そんなリハビリの意味を持った狩りが始まって三日目。現在の状況は、全く進歩がなかった。
自分でも驚いている。
これがもう、本当に身体が動かない。一応保険に保険を重ねるように最前線より十も下辺る過疎気味のダンジョンでキリトと二人で潜り狩っているのだが、俺が攻撃する時は攻撃は出来るものの、先手後手どちらでもスイッチのタイミングになるとそのタイミングが掴めず、立ち尽くしてしまう。
結局Ｍｏｂをキリトがとどめを刺して終わることが多々。あまりに酷い時はスイッチしろと声を上げてくれているキリトの言葉を聞きながらも、上手く交代できずにそのままソロ戦闘を続行していしまったこともあった。その時は流石に三十分ほど説教を食らった。
俺も好きでこんなことになっているわけでない。それを理解してくれているキリトだからこそ、こうやって根気強く付き合ってくれているとはわかっているが、昨日の後半あたりから、あまりにも申し訳なくて、何度かやはり辞めようと提案した。しかし、キリトはそれには了承はしなかった。

『付き合うさ。アルスが俺にずっと付き合ってくれてたみたいに』
それは大きな誤解だと思うし、実際に言い張った。でもキリトはその言葉には首を横に振るだけで、次のＭｏｂへとターゲットを定めて一言俺に行くぞと告げて走り出す。俺はそんな彼の優しさがひたすらにむずむずしたが、それの礼はこの問題の解消という形で返そうと思い後に続いた。
……けれど、未だにその礼は形となることはなく、返せていない。
「……大丈夫か？」
「……そろそろ、心折れそう……」
「まぁ、半年もそうなってたなら仕方ないさ。時間をかけて向き合っていこうぜ」
「……キリトは、レベリングは大丈夫なのか？」
「ん？ひたすらに上げてたの知ってるだろ。それに年末休みなんだから、お前に付き合わなかったら寝るだけさ」
「お前、寝正月民族か」
「プラス、ゲームな？」
「駄人間の象徴だな」
「おいおい、それは言いすぎだろ……」
粗方Ｍｏｂを倒し、一時の静寂が訪れる。一息を突きながらも、あまりの不甲斐なさに凹む俺と宥めてくれる親友。
その最中、俺はある一つの可能性が脳内に過っていた。それは決して有り得るわけがなく、それこそ、今までは問題無かったのだから、これは気持ち的な問題でしかないはずだ。だから、口にするのも憚られた単語。
――フルダイブ不適合（ノン・コンフォーミング）。
略して「ＦＮＣ」と呼ばれるもの。俺のここまで改善されない原因として、自分にはその要素があったのではないかという考えが脳裏にちらついて離れなくなっていた。
脳からナーヴギアへと発信される理性的な命令と、本能的な命令。それが相反するものであり、心の奥底で思う感情によって、身が竦むような感覚を与えている可能性。どこか納得できてしまいそうな可

能性であり、俺としては最悪な結論だ。
　勿論、キリトには話していない。キリトはまさか俺がその可能性を危惧しているなど思っていないのか、マイペースに腹が減ったなぁと自分の腹を擦っているのがちらりと様子を窺えば、視界に入る。五感に影響を与えるものではなく、脳の命令からくる不具合という可能性を思い浮かべてしまったのは、それこそ俺という人間が転生者で、そのような要素を持っていたキャラクターがいたということを知っているからだ。だからこそ、なおさらキリトには言えなかった。キリトはその情報を現時点で得ている筈だが、俺が得ているのはおかしいからだ。
　それに、これは俺が勝手に想像した可能性であって、確信染みたものではない。寧ろ、そうでなくて欲しいと思っているぐらいだ。故に考えたって仕方がない。
　気持ちを切り替えるように一度昼休憩でもしようかと声を掛ければ、すかさずに返事を返す彼と共に、このダンジョンにある安全地帯の方へと歩んでいく。道中Ｍｏｂのポップも無く、他愛ない話をいつものように繰り返していれば、ふと思ったようにキリトが首をかしげて見せた。
「そういやさ、アルスは細剣使いだよな」
「ん？そうだけど……」
「しかも盾無し。でも、お前ってＡＧＩ型では無いよな」
　思わず、足が止まった。
　フルダイブ不適合とか、そういう不安も一気に吹っ飛ぶぐらいの衝撃が自分を襲う。感じる冷気はこれは冷や汗に近い何かだろう。途端に言葉を返さなくなった俺を訝し気に見ながら、つられるように立ち止まったキリトは、そんな俺に気付くことなく言葉を続ける。
「確かに、装備してるのは軽金属だし軽さを重視してる限り確かにＡＧＩも上げてるんだろうけど……、でもどちらかというとＳＴＲ重視のＳＴＲ―ＡＧＩ型だろ？細剣使うのに珍しいよな」
「……あ、え、えと……」
「実は細剣の他にも武器使ってたり？なんてな」

「……まさかー」
ははは、とお互いに笑い合う。本気で冗談のつもりらしいキリトは早く安全地帯について持ってきていた昼飯にありつきたいらしく、再び歩き出す。その背中を見ながら、思わず小さくため息に近いものが零れ出る。

結局、それからも特に希望を見出せるほどの成果も出せず、年内復活は無理かと見切りをつけて、ダンジョンから脱出した。時刻はそろそろ日が暮れそうな時間。昨日一昨日は、もう少し潜っていたが、今日は折角の大晦日なのだから、野郎二人という虚しい光景にはなるが、ゆっくり年越しでもしようと俺が提案したのだ。
今現在寝床に利用している宿がある第五十層へと戻る前、ダンジョンから出て街へと戻る途中に見えた夕焼けがとても眩しく綺麗で、目を細める。時期は完全な冬なのに、層によって気温はあまりにも違い、ここは寧ろ暖かさが勝っていた。そよぐ風が微かに涼しい。靡く前髪を片手で抑えつつ、思いを馳せる。
それは、先の先の未来のことだ。
このゲームがクリアされるのは、ある意味始まりに過ぎないということ。
誰も知らない未来を俺は、知っていること。
なのに、そんな俺は今、こんなところで立ち止まってしまっていること。
前髪を抑えていた手を離し、その掌を見つめる。ぐ、と拳を握れば湧き上がる悔しさから、力が入り微かにその拳が震える。
不意に、ぽん、と背中を叩かれる。反射的に振り返れば少しだけ片眉を下げつつ口元は笑みを浮かべたキリトがそこにいて。
「早く帰ろうぜ」
「こんな年末の、しかもこんな時間までダンジョンに潜ってたの？」
「えっと……ハイ……」

「あっきれた。折角の休みなんだから、もっと有効に使いなさいよ、それでいざ攻略の時になって疲れたとか言っても知りませんから」
「いや、有効に使ってるさ。……えっと、それは、気を付けマス」
「ふぅん？」
　第五十層の転移門の前に転移してから、実はもう十分ほど経つが、俺達は未だにそこから移動出来ていない。……いや、俺は物陰にそっと隠れてる。移動できていないのは、厳密に言うとキリトだけだ。お得意の≪隠蔽≫を使い、俺という存在感を出来る限り消しながら、二人の様子を窺う。
　半ばたじたじとなりつつも、向けられる言葉に応答しているキリトに対峙しているのは、それこそ俺もよく知っている彼女――アスナだ。始まりは第五十層に転移してきた瞬間に遡る。
　どうやら彼女はキリトを捜していたらしい。第五十層の宿を寝床にしている情報をどうにか手に入れた――多分高かっただろうしリスクもやばかっただろうが、触れてはいけない――アスナは、今日昼からずっとこの層に訪れキリトを捜していた。最初は多分穏やかな気持ちであったのだろう。色んなリスクと引き換えにしてまで会いたかった彼が、あまりにも見つからず、挙句の果てには転移門から転移してやってきたのを目撃するまでは。呆け、そして悔しさと恥ずかしさ。全てが混ざり、顔を真っ赤にした彼女が怒鳴り込むような形でキリトに迫っていくのを横で見ながら、俺はその光景が容易に想像できた。
　当のキリトは、アスナが怒っていることに気付かず、最初アスナを見た瞬間、目を微かに見開いた後、ほんの僅かに口角を上がらせた。でもそれは、近くにいた俺以外はわからなかっただろうぐらい一瞬だった。何故なら、近付いてきたアスナの様子が決して穏やかなものじゃないと悟ったキリトは、すぐさま困惑した表情に顔色を変えたからだ。
　しかし今現在、何故俺がこうやって、そんな二人を物陰から眺めるような状態になれたかというと、俺とアスナには面識がない。そのため、彼女も俺の存在には気付いてなかったようで、キリトにだけ声を

かけたのだ。俺は、これ幸いとそれを利用して二人の元からこっそりと抜け出した、というわけである。
「……しっかし、美人だなぁ……と、思わんかね？」
「……おっとォ？」
　じっとアスナの横顔を眺める。眼福過ぎるなぁと思う。実際目の前にするとその美しさはずば抜けているということがわかる。栗色のすらりとした髪の毛から、ぱっちりとした榛色の瞳。思わずため息が漏れそうになるとはこのことだろう。こんな美人だもん、キリトも惚れるわなぁ。と、思いながら、俺はその物陰で隣で同じように二人の様子を窺っていた彼女に、それはもう自然をバリバリ装いながら声をかけた。
「これは驚いたナ。オレっちのことに気付いてたのカ」
　びっくりした表情の彼女――アルゴがこちらを見上げてくるのを至近距離から見つめ返した。多分、向こうは俺の存在に気付きながら、俺よりも遥かに高い熟練度の≪隠蔽≫を使って、かなり近い位置を陣取りながら二人を見ていたのだろう。まさか俺にばれるとは思ってもおらず。
　あまりの近さからじり、と後退しようとするアルゴが視界の端でわかる。そもそもこの距離まで近付いてきたのは彼女なのに、何逃げようとしてるんだろう。そんな感情から離れた分だけ近づくように軽く踏み込めば、彼女はびくりと肩を震わせた。
「何震えてるんだ？」
「な、流石に近いだロ！」
「自分から寄ってきたのに？わがままだなぁ……」
「わ、わがまま……って……っと」
　言い返そうと口を開いたアルゴの瞳がみるみる内に見開いていく。何かおかしいことでも言っただろうか、とその顔を見ながら首を傾げる。しかし、次に聞こえてきたのは、別に俺の発言についてでもなんでもないもので。
「……君が言葉をちゃんと返してくれるとハ」
「あー……」

気まずい感情が一気に溢れて身を引くようにして距離を置いた。
そうだった。俺とアルゴのこのソードアート・オンラインの正式サービスでの初対面というのは、あの月夜の黒猫団の件があってからのことだった。故に、俺は人と関わることを忌避し、その上、彼女がどのような生業をしているかを知っていたために、かなり徹底的に避けていたのだ。
段々と申し訳なかったという気持ちでいっぱいになる。視線を微かに彷徨わせては、それに気づいたのかアルゴがぐぐい、と顔を近づけてくる。今度は俺が逃げる側となったのが面白いと言わんばかりに。
「ま、まぁ。悪かったよ、色々あって……」
「まぁいいけどモ。おかげで君についての情報はさっぱりだヨ。いい値で買うから提供してほしいもんダ」
「俺についての情報ねぇ……」
片手で近付いてきた彼女の顔を押さえつけながら謝罪を述べれば、あっさりとした返事が返ってくる。
そしてこの罪悪感を逆に利用するように、俺の情報を得ようとするその強欲さまでアピールされて、ただ凄いなと感心してしまいそうになる。
しかし、それはある意味都合がいい。
「ずっとアルゴにはお礼が言いたかったしな、いいよ」
「……ん？お礼？」
きょとんとした表情が視界に写る。驚きだの呆然だの今日の彼女は随分と表情豊かで見ているこっちとしてはとても楽しいが、表情筋は疲れないだろうか。いや、この世界ではそういうのは関係ないのだろうけども。
隠れるのに使っていた壁に背を預けるように、身体を軽くそっちにもたれさせながら、彼女を見下ろし目を細める。なにもわかってないという顔は、彼女のことを考えると相当レアな気がする。自分がそんな優位な立場にいるのは些か気分がいい。ちらりとキリトの方を見れば、まだアスナと言い合っているのが見える。まだ、こちらに来る

ことはないだろう。
「”俺は正式サービスに参加するつもりはない。しても、データは変える。だから、これでお別れだな”」
「……！」
「って言っても、名前ぐらいは挙がってしまうんじゃないかって思ってたんだ。お前が情報を操作してくれたんだろ？」
「う、嘘だロ……じゃあ、オマエは……」
口元に人差し指を立てて、薄く笑む。ないしょ、の合図であり、あの日彼女に最後に見せた仕草だ。
微かに指を震わせて、その人差し指を俺の方に向ける。人を指差しちゃだめだろ、なんて軽口は流石に今はきいちゃいけないということが俺でもわかる。
「……”Ｌｉｇｈｔ”」
懐かしい名前が耳に入る。薄く笑んだまま「おう」と返事をした。

１４．第五十層　アルゲード　―　３

”Ｌｉｇｈｔ”
ライト、と安直に読むその名前は俺のβテストの時に使っていたアバターの名前だ。

「えー、ああ、うん」
「……」
目の前に正座で座る黒衣の剣士を、椅子の上から見下ろす。ちょっと、脚とかも組んでみたりして凄みを出しているところがポイントだ。
にっこりと、完全に貼り付けたとわかるような笑みを携える。
「キリトくん、俺に言いたいことは？」
「……えっと、明けまして、おめでとう……？」
「うん、まぁ、そうだね。明けましておめでとう。
それで？年が明けるまで親友を放置した言い訳をどうぞ？」

現在二〇二四年一月一日。
今の時刻は年が明けてから二時間ほど経過したぐらい。無事にこのデスゲームに囚われてから二回目の新年を迎えたばかりだ。
昨日は目の前の彼、キリトと夕方まで一緒にダンジョンに潜っていた。そして、その後二人で少しお高めのＮＰＣレストランでご飯でも食べて、ゆっくりと年が明けるまでのんびり過ごすかという話をしていた。そう、していたのだ。
しかし、それが果たされることはことはなかった。
その理由は、彼が年明けまで余所に行ったきり帰ってこなかったからだ。曰く、
――かの閃光が、無駄にしてしまった約五時間を返せ、と。

理不尽極まり無いだろう申し出に、最初は首を横に振ったらしい。しかし、美味しいＮＰＣレストランでご飯を奢るという追加条件を聞き、その気持ちが揺らいだそうだ。勿論、その時は俺も誘おうとメッセージを送ってくれてたので、その件は知っていた。ご飯だけ、しかも返せと言う割には奢ると言っている彼女の真意をそれとなく察した俺は、その誘いを断り、二人で行って来いと返事をした。食事が終われば戻ってくるだろうし、もし帰ってこないにしても連絡が来るだろうと思ったからだ。しかし、問題はその後だった。

どうやら、年越し寸前に期間限定らしいクエストが現れたらしく、キリトと閃光、もとアスナはそのクエストに挑戦してしまったらしい。しかも、これに関しては連絡が無かった。

流石に夜の二十三時を越えたあたりで、一切連絡が無いために俺も心配が募った。どこにいるだろうかと確認しようにも何故か追跡不能状態。おいおい、まさか愛の逃避行をしたとか言わねえよな？と年が明けて連絡が来るまでの約一時間、何も手が付かない状態で宿屋の一室で俺はひたすらうろうろしていた。

俺でもわかる。絶対にキリトがクエストを発見してうずうずして後先考えずに受けてしまったのだろう。そして、アスナもまた、そんな彼一人クエストに参加させて何かあったら心配だから、とかそんな理由で二人で受けたのだろう。とっても、想像できる。できるが、だ。

「許せるかは、また別だよなぁ」

「んぐ……」

美味しい食事にありついた上に、レアなクエストを受け、挙句の果てにはそれら全てをこのソードアート・オンラインというゲームで一番と言っても良いレベルの美貌の少女と共にこなしたというのだ。前者はまだ許容するとしても、結局六時間近く彼女を独占していたのだ。しかも、俺は放置で。

別に彼女面したいわけではないし、寧ろそんなつもりもなければ、何度も言うがその気は一切無い。でも、現時点で俺の友好関係はキリトが上位なわけだし、何より一緒にのんびり年を越して、明日からまた頑張ろうぜ、なんて約束をしていたのだ。拗ねても仕方あるまい。

前世の記憶のせいで精神年齢はそこそこ上がったが、結局は十五歳という多感な年齢なのだ。
いつの間にかすみませんでした、と言葉と態度で示すように、目の前で正座から土下座へとシフトチェンジしていた彼の頭部を見つめながら大きなため息を吐いた。
――こいつも、同じ十五歳で多感な時期だもんなぁ。
好奇心には勝てないだろうし、本能だってあるだろう。
何だかんだ帰って来てから一時間近く正座させたわけだし、そろそろ良いか。ここは、俺が一歩大人な対応をすることで立場をわからせてやるというのも一つの手だ。
「……ったく仕方ないなあ。ただ、流石に連絡無しは勘弁しておくれよ。心配する」
軽く笑いを吐き出すような仕草をしつつ、苦笑を浮かべてやれば、もう一度謝罪をしつつ安堵したような彼の表情が窺えた。

「進みはあまり良くないんだって？」
時は進み、現在二〇二四年一月七日。
年末年始の休みという名目は終了し、攻略は再開された。が、やはり第五十層ということで、Ｍｏｂのレベルも跳ねるように上がっており、中々に苦戦をしているという噂がよく耳に入ってくる。
やっとフィールドボスを撃破したらしく、今日の攻略を終えて帰ってきたキリトに進捗を窺う。明日から迷宮区の攻略に入るらしいが、この様子だとこの層の突破は最低でも、後五日はかかるだろうと予想されている。それが進みとしては良くない、というのは言葉では聞いていたが、実際はどうなのだろう。
「ああ。やっぱ敵が強くてな……士気も下がってるって話だ」
「士気って……それ、大丈夫なのか？」
「ううん……あんまり、良くはないだろうな」
ターニングポイントとは言われているが、それでもこの第五十層を突破できれば、残りはあと半分なのだ。それを考えれば頑張ろう、と

いう気持ちになれないものか。そんなまるで他人事だからこそ思い浮かぶ考えが頭に過る。でも、それは口にするのは憚られた。　何故なら、俺はその場に立つ資格がまだないからだ。

そう、俺はこの年末年始で、結局連携が出来ない状態を克服することは出来なかった。

そこそこに改善の兆しは見える時もあったが、実戦での役には立てそうにない。取り敢えず、次の次辺りの層の攻略に参戦することを現段階の目標とし、あまり焦らずにやっていこう、という結論に至った。そのため、キリトが攻略組に参加している時は、ソロで一人ダンジョンに潜り、時間が合う時は一緒にパーティーを組んで連携の特訓を繰り返していた。

不甲斐ないとは思う。

立ち直り、最早大分以前の調子を取り戻しつつあるキリトを見れば見るほど、焦らないで行こうと言葉にしながらも焦ってしまう自分がいるのを自覚する。しかし、それを表に出せば、きっと彼は俺のことを気に掛けるだろう。それは絶対に嫌だった。

マイペースを装いながら、のんびりとした雰囲気を保つのを心掛けつつ、少しでも彼らの役に立てないものかと考えてみる。フロアボス攻略には参加は出来ない状態だが、小さなことから協力していけないかと年始から再開した攻略活動を見ながら思ったのだ。しかし、中々良案が浮かばず、結局ずるずると自分のレベル上げぐらいしか出来ていなかった。

……ううん、迷宮区、かぁ。

ここから迷宮区に入り、マッピングを行い、ボスの部屋までを踏破していくわけだ。勿論、道中の敵は強いだろう。それでも、現状七十を超えた俺とキリトのレベルなら、やろうと思えばソロでマッピング作業は出来るわけで……。

「あ」

思いついたように手を叩く。突然声を上げた俺にキリトは訝し気に首を傾げながら俺の名前を呼んだ。

「どうした、アルス」

「俺も、明日から最前線の迷宮区に潜るよ」
「お、おう。……おう!?」
「ほら、マッピングぐらいなら俺でも出来るかなって」
　名案だ。ボスまでのマップを踏破して、そのデータを提供すれば絶対に攻略の進行も良くなるはず。そうと決まれば準備をしようとアイテムストレージを表示させる。それなりに回復アイテムなどは溜まっているから使いやすいようにセットし直し、武器や装備の耐久値も確認していく。そんな俺の視界の端で、驚愕のまま口をわなわなと震わせたキリトがやっと我に返ったように今度はその顔を左右にぶんぶんと振ってみせた。
「い、いやいやいや！やめた方がいいって！」
「でもキリトもソロでいつも迷宮区に入ってマッピングしてるんだろ？スイッチとかは出来ないけど、道中のＭｏｂぐらいならお互いソロでも狩れないほどじゃないだろうし」
「そうじゃなくて！最前線に出て、お前の存在が知れたら、逆にボス戦に参加しない、なんて通用しなくなるかもしれないだろ！」
「は？」
「は？じゃなくて」
　必死に反対するキリトのその理由が、自分が思っている理由と全然違って呆ける。
　ボス戦に不参加が通用しなくなる？どういうことだろうか。言われている意味がよくわからず片眉を上げて今度は俺の方が首を傾げる。
「だから……最前線の迷宮区に潜ったってわかったらお前が前線で通用するってことが攻略組にバレるだろ？そうなったら、多分ボス戦に参加しろ、ってなると思うんだ。……特に、この第五十層は……」
「あー……ははぁん……なるほど……」
　随分難儀な問題だ。言われてやっと気づいたが、その可能性は大いにあると思った。
　キリトと二人で迷宮区に潜り、どんどん奥へ奥へと進んでいくことは出来るだろう。しかし、出来て、そのデータをキリトが代表して提

供したとして、どこでその時に俺がキリトとパーティーを組み、そして一緒に潜ってたという情報が洩れるかはわからないのだ。
そして、それが最前線にバレてしまえば、それこそ最前線の迷宮区でも通用するレベルを持っているプレイヤーだということがわかるだろう。んでもって、それなのにボス戦はパスで、なんてことが許されるかどうかなんて、言われなくても答えはＮＯ。許されるわけがないだろう。特にこの層は、ターニングポイントと呼ばれる層なのだから。強いプレイヤーが少しでも多く参加してほしいと誰もが思っていることだ。
仮に俺が連携が出来ないんです、と言ったとして、それが通じるかも怪しい。別に攻略組の人たちのことを疑っている、とかではなく、一般論として怪しいのだ。だって、それを証明するためにわざわざ皆とパーティーを組んでボス前にどこかに狩りになんて行けるわけもないのだから。ただ単に逃げたいから言ってるだけだ、と思われるのが定石だ。
非常に厄介なことだと理解すれば、がしがしと前髪を掻き上げる。眉間に若干皺が寄ってしまうのも仕方ないだろう。折角名案が浮かんだと思ったのに、結局自分の現状のせいでそれは難しいと判断されてしまったのだから。別に息の合った戦いとかは求めないから、必要最低限の連携……スイッチとＰＯＴローテぐらいは出来るようになって欲しい。自分の事ながら、他人の事のように願う。
諦めたようにため息を吐けば、少し眉を下げ笑うキリトが俺の肩をぽんぽんと叩いてくれる。
「取り敢えず、アルスは今は自分の事だけ考えてていいと思うぜ。治ったらどんどん前線に出てもらうんだからな」
「ああ。わかってる……あーでも、なんかほんと不甲斐ないなぁ……」
「そんなこと無いって。あいつらが初めてのパーティーだったんだろ？」
「……まあ」
「トラウマになるのも無理ないさ。じっくり治していこう。それまでは俺がお前の分まで攻略頑張るからさ」

「キリト……」
「ん？」
「お前……良い奴だな」
「そ、そうか？」
少しだけ照れたような彼が頬を指先で掻くのを見ながら、このゲームに参加したプレイヤーのためにも、そして彼のためにも、早く彼の隣で戦えるようになろうと強く思った。

「ごめん、アルス。……前あんなこと言った矢先で本当に申し訳ないんだが、明日の第五十層ボスの討伐に……参加して欲しい」

二〇二四年一月十三日の夜。俺はあの時の言葉や思いを早々に撤回したいと思った。

15．第五十層　迷宮区　―　1

連携が未だに出来ない俺に、この層――第五十層――のボス戦に参加して欲しいと言った黒衣の剣士は、非常に申し訳なさそうな表情を浮かべたまま、その理由を続けた。

『前に攻略組の士気が下がってるという話をしただろ。明日のボス戦を前に、ボス戦辞退を申し出たプレイヤーが何人かいて、参戦人数が不十分なんだ。

それで、そもそもボス戦自体一度見送って、レベル上げとかして人数を確保するって話も上がったんだけど……参加するプレイヤーが辞退したプレイヤーに対して怒っちゃって。……ボス戦の見送りは断固反対、明日絶対に決行するべきだって主張しちゃってさ。色々会議した結果、明日は予定通り決行するってなったんだけど、戦力的に不安で。

……なんとなく、嫌な予感がしてさ。確かにアルスはまだ連携とかが出来ないけど、強さは間違いない。問題点の部分は俺がカバーするから……お願いできないか？』

そもそもあまり口数が多い奴では無かったとは思う。そんな彼が途中言葉を挟む暇など与えず述べた言葉には、思わず顔を顰めてしまった。あまりに、酷い内容だったからだ。

攻略組と呼ばれる最前線で戦うプレイヤーは幾つかのギルドに属している者が多い。多い、というよりも属さずにソロとして活動しているのはキリトぐらいと言っても良いぐらいだ。だからこそ、この攻略組の辞退者と参加者は、別ギルド同士であろうということは容易に想像できた。元々ギルド間で出来てしまっている溝に加えて、そのようなことが起きてしまったことによって、さらに溝は深く抉られてしまった。だからこそ、あんなギルドの奴らがいなくても、俺たちだけで、という思いが募り、人数不足よりもプライドがこの討伐戦を半ば強引に続行に持ち込んだのだろう。

キリトにはそれを止めるだけの力は無い。見送った方がいい、と言ってもビーターのくせにと弾かれてしまう。きっと、普段ならまだ耳は傾けられたのかもしれないが、もう余所なんて当てにできないと思ってしまっているだろう連中には、ただただ火に油を注ぐだけだ。

「……えっと、ほら、あの血盟騎士団？の副団長さんは？」

「え、あ、アスナか？アスナは見送った方が良いって言ったんだけど……団長であるヒースクリフがそのまま決行していいだろうって」

「え、その会議に団長さんもいたのか？」

もしこの状態を改善させるなら、第三者のギルドがまとめるのが一番だろう。そして、俺の予想ではそれは血盟騎士団が一番適任だと思えた。だからこそ、普段会議に参加し、指揮を執っているという副団長であるアスナの名前を出したのだが、告げられた名前は予想もしてない人物の名前だった。

――ヒースクリフ。

原作を知っている俺は、彼が何者かを知っている。しかし、それを言うのは憚られた。現時点でそれを認めさせる根拠が無いし、何故知っているのかと聞かれたら、答えられないからだ。

だから今はその正体の情報を頭の隅においやって、彼がそのまま決行を促した理由を考える。しかし、特にメリットも感じない。決行しても勝てるという確信があるから？いや、ただのフロアじゃない。ここは第五十層だ。そんな中途半端な準備で簡単に通用するわけがない。

疑問がどんどん募っていくが、無理矢理その思考を途絶えさせて目の前の問題に着目することにした。要は、明日のボス戦の決行は決定事項で、俺にそれの参加をお願いしたいという話だ。理由は先ほどキリトが言った通り。そして、今彼は俺の答えを待っている。

「……俺で良ければ、参加するよ」

「……アルス」

「でも、……自信はないかな」

「俺がカバーする。だから、……勝とうぜ」

多分、不安が顔に出ていたのだろう。参加すると答えたというの

に、キリトは安堵より先にこちらを心配するような表情を浮かべた。だから、素直に自信が無いことを告げつつ、キリトの言葉に頷いて差し出された拳に自分の拳を合わせるようにコツン、と当てる。

ここまで来てしまったら、あとはやるだけだ。

「おー！キリトに……アルス！久しぶりだなぁ、元気してたか？」

「ああ、クラインか。元気だよ」

翌日。定刻時間から約十分ほど早く集合場所として指定されたボスの部屋の前に訪れれば、そこにいたバンダナの男――クラインが俺とキリトに気付き、手を上げ声をかけてくる。近くにいた風林火山のメンバーは特に気にした様子も無く、ギルドメンバー同士で会話を続けており、彼の傍らにはそのギルドメンバーとはまた違った褐色の肌が特徴的な大柄な男が立っていた。

「クライン。知り合いか？」

「おう。アルスっつーんだ。キリトのダチだよ」

「おお……お前があのアルスか」

「えっと……はい。俺がアルスですけど」

あの、ってなんですかね。という疑問を口にする前にこちらを向いた大男は親指で軽く己を指し、俺が知らないわけないだろう名前を名乗る。

「俺はエギルだ。キリトから話は聞いてるぜ。まぁ、あまり気張り過ぎずにな、頑張ろうぜ」

「……エギル、な。よろしく」

次いで差し出された手をそっと握り返しては、三人が会話を始める姿を一瞥する。

前世の記憶を思い出してから、初めて出逢ったサーシャに始まり、サチ、キリト、クライン、アルゴ、アスナ――アスナは見かけただけだが――とみんな全てに当てはまるのだが、前世の俺はこの原作『ソードアート・オンライン』が好きで、原作が好きということは勿論登場人物も好きというわけで、会う度に言葉に出来ない感動を覚えて

いたりする。なので、彼、エギルに対してもやはり凄い感動を感じてしまうわけで……。
「……ん？どうかしたか？」
「……」
「アルス？おーい」
「……んぇ、あ、いや」
一瞥したつもりだったが気付いたらガン見していた俺の視線を、黒い指あき手袋をはめた手が遮る。やっと我に返った俺をエギルを始めとしたクライン、キリトまでもが不思議そうに見ていて、思わず顔に熱が篭りそうになるのを必死に抑えながら首を横に振った。
言えるわけがない。キリト、クライン、エギルという三人の組み合わせが目の前で実現されたという感動にフリーズしてたなんて。キリトと行動を共にするようになって、やはり見知った人物を視界に入れることが増えはしたが、それでもこの三人が集まり会話している、という現状は俺にとっても酷く感動的なものであった。胸にこみ上げてくる興奮は、誰にも共感しては貰えないだろうが、ファン特有のものなのだろう。今回ばかりは、自分と同じような立場の人間が他にもいてくれれば、と思わざる得なかった。
初めは不思議そうにしていた三人だったが、気にしないでくれと繰り返し答えることでなんとか納得してもらい、改めて会話し始める三人の会話を右耳から左耳に流しつつ、時間が流れていくのを待つ。ちらりと周囲を見た渡してみると、見たことある気がする人もいれば、全然わからない人もいる。しかしこれら全員が攻略組のプレイヤーなのだろうということは容易にわかる程度には、皆それなりのレベルを持っていることがわかった。
――俺、本当に必要だったかなぁ……。
確かに、レイドバトルにしては人数はやや足りない気がするが、それでもこれだけの精鋭がいるのであれば問題ないような気がしてくる。ただでさえ俺は連携が出来ない状態なのだから、出来ることなんてヘイト稼ぎか迷惑にならないよう心掛けつつ攻撃してＨＰを削るぐらいしかないだろう。あとは誰かを庇ったりとか？いやでも、俺は

盾無し細剣使いなので、タンクにはなれない。あれを使うわけにもいかないだろうし……。段々自分の肩身の狭さを実感してきて思わず身を竦めそうになるも、その前に聞こえてきたキリトの声によってその動作は不実行で終わった。
「アルス、いいか？」
「ん？今度はなんだよ」
「もう一人紹介したい奴がいてさ……」
「初めまして」
「おう。……お、おおう？」
キリトの背後から出てきたのは、白に赤のラインの入った騎士服を着こなし、栗色の髪の毛を靡かせた、つい先日物陰から観察した彼女――アスナだった。
「血盟騎士団副団長を務めます、アスナです。今日はこのフロアボス討伐戦に参加してくれてありがとう」
「えっと、アルスです。連携とかはあまり期待しないでもらえると有り難い、です」
コミュ障か俺は。と言いたくなるぐらい言葉がつっかかりそうになるのを必死に耐えながら、こちらも名乗る。
思えば、俺は彼女のことを知っているが、彼女は俺のことを知らないわけで。だからこそこの凄い他人行儀な態度に違和感を感じそうになるが、当然なのだ。つられるように敬語で返した俺の言葉遣いに何故かクラインが楽しそうに吹き出す姿がアスナの向こう側から見えるも、現状、それを止めることは出来ない。あの野郎、覚えていろよ、と内心で毒づきつつ目の前の彼女の方を改めて見遣る。
「貴方の事情はキリトくんから聞いているわ。一応私と団長、血盟騎士団の幹部の人にも伝えてはあるけれど……無理はしないこと、これは守ってもらうわ」
「ああ。俺もまだ命は惜しいから……そこは気を付けさせてもらうよ」
「そう……。ならいいです。……それと」
「ん？」

「……貴方、大晦日にその……キリトくんの隣にいたわよね。まさか彼の連れだったとは思わず、あの時は気付かず挨拶もしなくて……ごめんなさい」
少しバツが悪そうに眉を下げて謝る彼女の姿を見て、ただ俺は呆然とした。
謝られると思っていなかった、とかではない。あの時、彼女は俺の存在にある意味気付き、しかも覚えていたということに驚いた。
アスナがキリトに話しかけたと気付いた瞬間、自分の存在に気付いて無いのを確認してから、自然を装いそそくさにその場を去ったため、きっと彼女にとって俺というのは通行人Ａぐらいのプレイヤーにしか見えなかったはずだ。しかし、そんな俺のことを彼女は覚えていたのだ。その上、意図して他人のフリをした俺に彼女は謝罪をしている。
俺は思わず、ふは、と吐き出すように笑ってしまった。
「え、」
「別にいいよ。俺も結構面白いもの見れたし」
「……はっ、な!?」
「ん?」
「面白いものって……!」
「別に俺、あの時先に帰ったわけじゃないよ」
どういう意味か、徐々に理解した彼女の頬が軽く赤く色づいていくのを見るのが面白いと感じる。多分、彼女はキリトにだけ話しかけた自分を見て、俺が気を遣って先に帰ったと思ったのだろう。しかし実際は面白がって物陰から観察していたわけで。まさか、と目を見開く彼女に二人のやり取りを遠くから見て楽しんでいたことを遠回しに伝えれば、その動揺は一気に表に出る。言葉が上手く出ないように口をはくはくさせているのを見つつ、白々しい笑みを返してみる。
動揺し過ぎの彼女と、にっこりと笑ったまま何も言わない俺。その状態が数十秒続いた後、やっと俺とアスナのやり取りが微かにおかしいと気付いたのか、キリトがこちらの方を見て首を傾げて会話に割り込んできた。

「アスナ？アルス？どうかしたか？」
「ああ、キリト。いや実は――」
「何でもありません。全く！」
「えっ、あっハイ」
「とにかく！今日はよろしくお願いします。失礼します！」
ギロリと何故かキリトを睨んだ後足早にいなくなるアスナの背中を眺めつつ、どうしてあんなに怒っているかわからないキリトは戸惑いを表に出したまま、そっと俺の方を見た。しかし、俺はそれに対して首を傾げるという仕草で返す。きっと何とも言えない消化不良のもやもやを抱える羽目となっただろう彼には申し訳ないが、俺はこの一連は彼に言うつもりは無かった。
本当は二人のことを揶揄するつもりはなかった。だからキリトにはあの時物陰から見ていたことは一切言っていないし、あの時にアルゴに会ったことも言っていない。だから二人は俺どころか、アルゴにまであの逢瀬がばれていることを知らないのだ。
知らないままでいいと思ったし、今日だって、彼女にこのことを示唆するつもりは無かった。笑いを吹き出した瞬間見せた、彼女の表情を見るまでは。
「……まさかなぁ」
ぽつりと呟いた独り言は、幸いにも誰の耳にも届かなかったらしい。

「それでは、第五十層フロアボスの討伐作戦を開始します」
定刻。ボスのいる部屋の扉の前で血盟騎士団副団長であるアスナの凛々しい声が響く。
ここに集まっているプレイヤーの数は俺を合わせて丁度三十人。このソードアート・オンラインでは一パーティー六人の八パーティーによる四十八人でのレイド戦が可能だ。それを見ると、確かに人数が少ないような印象を受ける。
特に、その中でも気になるのは苛立ちが微かに雰囲気に混ざっている約五名のプレイヤー。どこのギルドかまでは今更確認する気はな

いが、きっと彼らがキリトが言っていた今日ボス戦を決行することを主張した人たちなのだろう。
　レベル的にも最低ラインである攻略層プラス十のレベルを何とか超えているといったところだろう。苛立ちに任せて戦闘時に突っ走らないといいが……。まぁ、それを管理し、指示するのは上の役目だ。俺はアスナの告げる作戦を耳に入れながら、最後の確認のようにアイテムストレージを開き、その中を確認していく。
　ある意味初めてのフロアボス戦だ。どれぐらい強いのかも検討もつかない。備えあれば憂いなしだろうと貯めこんでいた回復アイテムの数たちを数えながら、下へ下へとストレージをスクロールする。
　ふと、ストレージの一番下にあるアイコンが目に入った。
　――お前を、使うことはないだろうけども。
　普段なら、そう考えて見ないまま終わらせてしまうだろう。しかし、何があるかはわからないし、すぐ手に届くところにあった方が自分としても安心かもしれない、と思い立つ。
　そっとそれをセットして、素早くホロ・ウインドウを閉じた。
「行くぞ、アルス。頼んだぜ」
「そっちこそ」
　ギギ、と重い音を立てながら扉が開かれて行く。
「……キリト」
「ん？」
「六連殴打には、気を付けろよ」
「……え？」
　――戦闘開始。

１６．第五十層　迷宮区　―　２

その相手を一言で表すと言うならば――『脅威』だった。
全身はまるでただの金属では表せない、合金の鈍い光を秘めている。その姿を例えるならば仏像。しかも、ただの仏像ではなく、多腕……六本の腕を携えた、大きな像であった。
見上げねば頭部を捉えることの出来ない大きさの持ち主は、その顔に仏像特有であるアルカイックな笑みを浮かべており、それがさらにこちらに恐れを煽る。圧倒的な強さが、その存在感だけでわかる。
身が竦みそうになるのを堪えながら視線だけで周囲を見渡せば、他のプレイヤーも皆同様に、その瞳に微かな恐怖を宿していた。このソードアート・オンラインの正式サービス版では初めてのフロアボス戦である筈の俺でもわかる。この敵は、今までとはまた桁違いの強さを持っていると。

「Ｃ隊はブロック！Ａ隊はＣ隊に続いてスイッチ！」

戦闘開始から三十分。戦況は芳しいとは言えないものの、何とか敵にダメージを与え、少しずつだがそのＨＰゲージを削ることに成功していた。血盟騎士団副団長であるアスナの声が戦場に響き、洗練された連携による各隊の攻撃が代わる代わる繰り出される。時間はかかるものの、こちらの攻撃がまだ通用する敵だという認識が俺達の戦意を何とか繋ぎ止めている状態であった。
俺はその隊たちとはまた別のサイドから攻撃をしては下がるという、独自でヒット＆アウェイを行い、極わずかにだがボスのＨＰを削っていた。キリトは他のプレイヤーと即席のグループになり、交互

に攻撃を行いきちんと回復を行っているようで、ＨＰゲージはまだ半分以上を示す緑が表示されている。
　自分のＨＰゲージを確認すると気付けば六割を切ろうとしていた。流石にやばいかと思い誰かに声をかけるわけでもなく下がろうとバックステップを踏む。連携としては最悪な行為だとわかっているが、誰かに声を掛けようものなら身が竦んでしまうためにそれは出来なかった。しかし、それに気付いたキリトが一テンポ遅れるようにしてパーティーに声をかけて俺が元いた位置に滑り込むようにしてサポートに入ってくれる。
　胸の奥でチリ、とした痛みが走るが、気にも留めずに武器を納め右手でアイテムストレージを操作し、回復ポーションを取り出しその中身を煽る。徐々に回復していくＨＰゲージを確認しながら、後一、二分もすればそのゲージが満たされるだろうと思い、その合間に戦況を確認しようと辺りを見渡す。

　アスナの指示もあり、ある程度が纏まった攻撃を行っている。しかし、合金に覆われた奴の身体はぞっとするほどに堅く、剣も三回に二回は弾かれてしまう状態だ。どうにかＳＴＲ重視になる重撃の類は通用するようで、エギルやその他の両手用斧や重めだろう両手用直剣の攻撃で削っているが、これではジリ貧だ。目に見えて疲労が雰囲気に混ざっている。アスナもそれがわかっているのだろう、焦りが顔に出そうになるのを必死に堪えて、冷静に努めて声を上げていた。
「攻撃来ます！ブロック＆回避！五打目の後に隙が出来るのですかさずＢ隊スイッチ！」
　ボスが攻撃のモーションを取る。巨体であり合金という強固な身体を微かに捻るようにして構え、一、二三、四五と言うテンポで繰り出される六本の腕による五連撃。その後には少しだけこちらで言うスキル硬直のように僅かな空白の時間が出来る。それをこの短時間で覚えたアスナの指示が響いた。
　しかし、かの敵のＨＰゲージは五段あった内の三割が失われ、残り二本となっており、攻撃モーションに新たな動きが加えられていた。

五打撃目が繰り出された後、指示通り滑り込むようにしてＢ隊が突っ込んでいく。先程までは五打撃目に繰り出した腕を戻した後に動きを一時停止させる筈のボスは、六本の腕で唯一この五打撃で使わなかった腕を振り上げた。

――まずい！

瞬時に判断した俺は声を上げようとする。しかし、その声は自分の意思とは別に響かない。こんな時まで役に立てないのか俺は、と驚愕に顔を顰めるもどうやら自分と同じようにおかしいと気付いたキリトの声が少し遅れるように叫んだ。

「攻撃モーションが変わっている！みんな後ろに飛べぇぇぇ!!」

どうやら、キリト同様にアスナも変化に気付いていたようでＢ隊に下がるよう指示をキリトよりもやや早く告げていた。連携も対応も早い彼らはその声に反射的に後ろに跳ぶ。それに対しすかさずボスの追加された六撃目が、約百八十度以上もの範囲を横に薙ぐようにして繰り出された。

きっと、まともに受けていたら俺でも五割、他のプレイヤーだったら七割近くのＨＰが持っていかれただろう強撃にひやりとしたものが背中を伝う。そして、その推測を誰もがしたのだろう、全員がボスから距離を取った状態で、直ぐに攻撃に転じることが出来なかった。

そして、悲劇は起こるべくして起きたのだ。

「スイッチ！」

それから更に二十分ほど経過し、慎重に慎重を重ねるように、先ほど以上に安全を意識したフォーメーションを取りながらも何とか敵のＨＰゲージは残り一段となろうとしていた。

何とかまだ死者はいない。このままいけば何とか撃破出来る――。きっと、この場にいた大半がその時は思っていた。その筈だった。

俺は正面から対峙している他のプレイヤーとは違い、側面から出来る限りタイミングを狙い攻撃することで、ボスのターゲティングを錯

乱させるという作戦を行っていた。細剣の攻撃は敵のＨＰを削ったとしてもあまりに微々たるもので、それならばヘイト稼ぎを狙った方がいいだろうと思ってのことだった。

そのために、スイッチ、と叫んだ声が響いたことに気付いていても、気にも留めていなかった。それこそ、それは彼ら同士の連携技であり、現状ソロ状態の俺に出来ることはないのだから。

だから、その後の叫びによって、現状の最悪さを気付かされたのだ。

「おい!!スイッチって言ってるだろッ!!」

弾かれるように、多くの視線がそちらに向いた。そこにはスイッチによって後退し回復しようとしている、ＨＰゲージが赤に入ろうとしているプレイヤーと、背後で硬直してしまっているプレイヤーがいた。焦るように声を上げるも、背後のプレイヤーは顔を真っ青にさせて、何かぶつぶつと言っている。正直、誰かが代わりに攻撃を弾いて交代しないと危険な状態だ。それでも、背後の彼は動かない。その光景はまさに異常で、咄嗟に助けに入ろうとアスナ、キリトが駆け出そうとする。

しかし、それはもう遅かった。

流石にこれ以上はやばいと思ったプレイヤーが、何とか一撃目の拳を弾く。そしてなりふり構わず回復するために後ろに逃げようと踵を返そうとした。が、その瞬間横から抉るようにボスの拳がそのプレイヤーを弾き飛ばしたのだ。

容赦のない追撃。スイッチして交代出来ていれば、少なくともその攻撃は防げただろう一撃。それは、かのプレイヤーの残っていた僅かなＨＰを全て削りきってしまった。

あまりにも強い一撃だったそれは、プレイヤーの右半分を大きく抉り、最期言葉を残させることもさせず、その身体を四散させた。

恐ろしいまでの沈黙が走る。

誰もが予想もしていなかった悲劇が起きた。このままいけば、と考えていたプレイヤーの希望さえも砕くほどの衝撃が与えられる。

「ッ……無理だ……ＨＰが残り一段になってまた攻撃モーションが変わっちまったら、今度こそ俺達ここで死んじまう……」

やっと聞こえてきた顔を青褪めたプレイヤーの声は、最早絶望に染まりきっていた。
ガタガタと震え、何歩か後ろに下がっていく。
そのプレイヤーは、よく見れば、今日決行すべきだと主張しただろう彼らの中の一人だった。
「嫌だ……死にたくねえ……ッ、俺は、死にたくねえッ……」
そんなの、誰でもそうだ。
今だって皆、身が竦みそうになるのを耐えて戦っている。だから、だから。
「転移！アルゲード！」
お前だけが、逃げるだなんて。
一人のプレイヤーを死なせてしまったその場所に、もう誰もいなかった。

「やばいな……」
ボスから距離を取った場所でキリトが呟く。近くにはクラインとエギル、そしてアスナさえもが集まるようにしてお互い敵と対峙しながら言葉を交わす。
「まだ戦意があるのは……」
「他の風林火山のメンバーも流石に厳しいな……」
「血盟騎士団のメンバーもほぼ駄目ね。今タンクであるC隊が攻撃を防いでいるけど、彼らもこれ以上は……」
あれから、戦況は一気に逆転した。
一気に恐怖に煽られてしまったプレイヤーが次々と転移結晶を使いいなくなってしまったのだ。それでもまだ二十を超えるが、その大半はほぼ戦意を喪失しかかっており、いても戦力として換算するには難しい状態だった。

残り一段となったＨＰもあれから全く削れていない。失っていくのは戦力ばかりな状態でこのまま戦闘を続行するのも難しい。
何とか攻撃をブロックしている血盟騎士団のタンク隊だが、きっと一度下げてしまえばもう前に出すことは難しいだろう。それほどに、皆の顔色は恐怖に塗れている。
「せめてタンクが機能していれば……」
「なら、それは私が引き受けよう」
「ッ!?」
「な、団長!?」
きっと残り一段なのだから、このメンバーでスイッチを繰り返し攻撃を重ねれば削りきれるだろう。そう、考えたのだろうキリトの呟きに反応したのは、誰でもない。血盟騎士団団長であるヒースクリフだった。
その彼は、驚愕するキリト達にそれ以上の言葉は告げずにボスへと向かう。入れ替わるようにタンク隊は下がり、気付けばボスの攻撃をヒースクリフ一人で対処している状態が出来上がった。
涼しい顔をしたまま、まるで先が読めるのではと思ってしまう程に鮮やかにボスの攻撃を左手に持つ大きな盾で防ぐ。時折弾くように右の剣も振るう。じりじりと彼のＨＰも減っては行く。チャンスは今しかないと瞬時に判断したキリトは、クラインとエギル、アスナに視線を滑らせて頷いてみせた。
「今は彼を信じて行くしかない」
「……そうね。ここで退くわけにはいかないわ」
「おっしゃ、俺達の実力見せてやろうぜ！」
「足を引っ張るなよクライン」
「アルス」
四人がボスへと向かおうとする時。不意にキリトが俺の方に振り返った。
「お前はここで待っていてくれ」
それは、正直予想していた言葉ではあった。
この状態は最早如何に連携を取って、攻撃を打ち込んでいくかが重

要だ。だからこそ、俺のようなスイッチもろくに出来ない野郎は足手まといなのだ。しかし、キリトの表情は決して俺を役立たずだから弾こうとしている、とかじゃない。

それは、自分を責めるような顔だ。まるで、俺をこのボス戦に呼んでしまったことを悔いるような。

「……キリト」

「必ず倒してくる」

きっと、彼は俺がこのボス戦で恐怖を抱いたのだと思っている。

初めてのフロアボス戦で、こんなことがあって。俺が半年以上も前の時、何故最前線に来ないのかという問いに「ボスへの恐怖があるから」と吐いた嘘を彼はずっと信じていたからこそ、さらに恐怖を刻み付けてしまったという罪悪を彼は感じている。

そして、そんな彼を気にするなと、俺も一緒に行くよと言える自分が今いないことに絶望する。

四人は俺に背を向けてボスへと向かう。声を荒げて、スイッチと叫び突っ込んでいく。

惨めだった。

こんな時に足が竦んで動けない自分があまりに惨めだった。

さっきまでは平気だった。一人ではあったが、戦うことは出来た。なのに、今じゃそれも難しい。

他の奴らと一緒だ。俺の中の戦意がどこにあるかわからない。

悔しい。悔しい。

何故戦えないのかがわからなかった。だって、本当は戦えるはずなんだ。

ずっと戦ってた。一人じゃない時だってあった。

悔しい。腹立たしい。

気付いたら、ぽたぽたと目から何かが溢れてた。

涙だ。泣いている。でも、泣いているのは俺じゃない。

「――あ」

ぼやけた視界で彼らを見遣る。薄い水の膜が俺と彼らを隔ててる。

それがまるで自分と彼らに一線を引くようで、まるでその世界は自分のいるところとはまた別のようで。
それで、やっと気が付いた。

泣いているのは、俺じゃない。
泣いているのは、俺だ。
俺(今世)じゃない、俺(前世)が、泣いている。
俺を自覚してから、今日、たった今まで。一度も俺は、俺と溶け合ってなどいなかった。
戦えなくなっていたのは、俺じゃない。
前世の俺だ。

１７．俺（今世）と俺（前世）

この世界を、一言で表すとするならば「灰色」だった。
色はあるけれど、全て褪せているような、俺自身が今ここで生きているのかもわからなくなるような、そんな味気ない世界。
あぶれ者のような気持ちはずっと抜けず、どこか冷めていた。それが、今の俺。
決められたレールをただ歩けばいいと言われて、それでいいやと思ってた。
でも、どこか自分に似た少女と出会った時、俺は自然と言葉を漏らした。
「どこかに逃げないか」
どこでも良かった。と、いうよりもはどこに行くつもりも無かった。
ただ、どこか色褪せていることのない、灰色ではない、鮮やかな世界が欲しかった。
俺だけの現実が欲しかった。俺だけの真実が欲しかった。
勉強も、何もかもつまらなかった。別に苦労することも無かった。成績は狙ったように平均的なところをキープさせることが出来ていたし、俺自身、やる気が無かった。
だから、俺は俺自身の抱えているよくわからない知識をどこにも出さないで抱え続けた。
そんな俺の世界を変えるきっかけになれそうなもの、それが仮想世界だった。
この世界が俺にとっての現実でないのなら、そこであれば、と俺は期待した。
でも結局、世界は変わらなかった。だから俺は、失望したのだ。
かのゲーム、ソードアート・オンラインのβテストを終えた時、俺の心の中には失望しかなかった。

だから、そこで知り合ったフレンドにはもう俺は正式サービスはやらないと公言したし、もしやるとしてもデータは変えるだろうから、関わるつもりも無かった。
でも、そんな世界でも俺はそのゲームの本当の始まりの日が訪れることを待ちわびていた。そして、結局俺はナーヴギアを被ったのだ。
その日、ゲームマスターである茅場　晶彦からデスゲームのことを告げられ、己の全てを思い出すまでは、まだ希望を持っていた、のかもしれない。

対して、前世の俺は、酷く難しい奴だった。
人と関わることを苦手とし、勉強と二次元を愛していた根暗な気質を持っていた。
死因なんて呆気ないもので、それこそ、語るのも恥ずかしいと思えるほどどうしようもない奴だった。
でも、人を苦手としていただけで人が嫌いなわけではなかったのだ。

「俺はもう、死にたくない」
前世の俺が願う。
「どうでもいい」
今世の俺は、捨てる。
生きたいと、救いたいと願う意思と、全てどうでもいいと思う感情が俺の抱く感情をあべこべにさせる。
本当は生きていたいとも思わないし、救いたいとも思っていないはずなのに、手を伸ばしそうになる、心に痛みを感じさせる。
俺はいったい何なのか。
俺たちは、いったい誰なのか。

目の前にいる、中年手前の男性は酷く悲しそうな顔を浮かべていた。

「……はじめまして、かな」
「……そうだろうね。まさか、意思が二分されているとは思っていなかったよ」
「それを言うなら、俺もだよ」
「でも、よく考えたらその筈なんだ。だって、俺は貴方の考えが理解できないのだから」
死んだって良かった。俺も、皆も。でもどうしても先に進めなかった。それはきっと、目の前にいる彼の本能が叫ぶ拒絶反応だったのだ。
未来がわかるからだけじゃない。クリアされるとわかっているからこそ、死にたくないからこそ、その場から動くことが出来なかったのだ。
でもそれが、彼にとってさらに辛いと思わせていた。人嫌いではない根はお人好しであっただろう彼は、見捨ててしまった命に対して心を痛め続けていた。
だから、進むことを選んだのだろう。そして、喪ってしまった。
「ＦＮＣ……戦えないバグとなっていたのは、貴方だね？」
軽く伏せられた瞳をそのままに、彼は小さく首肯した。
「死にたくない」
ぽつりと目の前の彼が弱々しく呟く。
「こんな褪せた世界で生きて何になると言う」
「それでも、もう二度とあんな思いはしたくない」
「わからないよ。死ねば今度はもっと素敵な世界に転生できるかもしれない」
「それでも、死にたくない。眠れないんだ」
手で顔を覆い、崩れそうになるのを必死に膝を震わせるだけで耐えながら、彼は嘆く。
「あの日死んでから、ずっとずっとずっと……俺は眠れない。どこか意識が漂ったまま、暗いどこかにいるだけ。あれからどれだけの時間が経ったのか、それさえもわからないぐらいにずっと。だから、意識が目覚めた時、どんだけ俺は嬉しく、そして目の前の光景に絶望した

か！」
わからなかった。
俺には、彼の言葉がわからなかった。
抜け落ちたピースの隙間から零れ落ちていくように、その言葉の思いが俺の中でとどまらずに消えていく。
「貴方は俺だ」
「……そうだ、俺は、君だ」
「なら、わかるだろう。……俺にその思いはわからない」
ぴくり、と肩を震わせた後、虚ろな瞳が俺を射抜く。
「理解しようとも、思えない」
半年以上彼の気持ちと触れてきた。恐怖、切願、傲慢、絶望……沢山の感情が動いた。きっと、俺だけなら動くことのなかっただろう感情たちばかりだ。
それでも、俺はそれがいいことだと思えなかった。寧ろ、邪魔だとさえ思った。
俺が掛ける思いは限定された者達にだけだ。それでいい、それでいいのだ。
「俺はずっと、俺だけの現実が欲しかった。俺が生きていると実感できる世界が欲しかった。勉強だってなんだって、”それが当然”ではなく、ただ、褒めて欲しかった。俺という存在を認めて欲しかっただけだった
でも、それは叶わないってすぐにわかった。だから俺は頑張ることを止めた。彼らの望む俺の最低ラインを維持し続けることで、俺は自由を手に入れようとしていた」
「……それが、あの君の選択だね？」
今度は俺が頷く番だった。
「――仮想世界。作り上げられた夢の世界でなら、きっと居場所がある。……そう、思ったんだな」
「……でも、無かった」
あそこは一つのリアルではあった。しかし、俺の求めていたものではなかった。

期待されることを忌避していた俺が、期待した世界は俺の願いを叶えてくれることは無かった。その時浮かんだ感情は、ただただ虚しかった。望みを失い、湧いていた感情の行き先を失った。
「だから、もうどうでもいいんだ」
持て余した感情をのままに、戦いに出る。先に進んで、いつかこの身体が朽ちるのを待つ。もう、それでいいのだ。
「嘘だね」
何故だか、その言葉は俺の奥深くに刺さった。

「君は、捨てきれない。君が彼らに掛けた思いは偽物なんかじゃない」
「いいや、違う。それは俺の物じゃない。貴方が作り出した仮初の感情だ」
「いいや、それこそ違う。俺たちは、同じなのだから」
いつの間にか、虚ろに見えたその瞳は真っ直ぐに俺を射抜いていた。
「俺が君の思いを、選択を知り、否定できないのと同じように。君もまた、俺の思いと願いを知り、否定できないでいる」
「……否定できないと、同じは違う」
「……そう言われてしまうと、そうなのかもしれない」
俺と彼。元は一つだったのかさえもわからないほどに、俺達は違った。同じだとわかるのに、まるで別物のような互いが浮き彫りになる。
生を望み、人を救いたいと願う彼と、無を望み、全てを捨ててしまいたい俺。
あまりに違う。あまりに違いすぎる。なのに。
「でも、彼女に掛けた君の思いが、答えだろう」
最初は、小さな思いだった。
でも、全てをやめようとした俺を繋ぎ止めた、思いだった。
「でも、彼女に俺は必要ないんだ」
俺の手で救いたかった。初めてそう思えた存在だった。
だから、知りたくなかった。前世という存在を理解した時に知って

しまった、彼女に自分が必要ないという事実が何よりもショックだった。
どうしようもないぐらい、裏切られた気持ちになった。本当に俺の居場所なんて存在しないと思えてしまう程に。
それこそ、投げ出してしまおうかと思った。たった一つの懸念さえも捨てて逃げ出してしまおうかと思った。でも出来なかった。出来なかったのだ。たとえ裏切られたとしても、俺が必要ないのだとしても、それでも。
「「それでも、俺は守りたかった」」
声が重なる。ハッとするように顔を上げれば、少しだけ眉を下げて笑う彼の顔が視界に写る。
「ほら、同じだろう」

対峙する彼の存在が、段々と俺の中に入り込んでくる。
一歩、一歩と歩み寄り、気付けばお互いの額を合わせていた。
「……この感情は、俺のものだというのか」
「ああ。……きっと、きっかけが俺だった。ただ、それだけの話さ」
気付けば、彼も彼の中で整理がついたのか、穏やかな笑みを浮かべている。
「代われ、なんて思ってない。ただ、受け入れて欲しい。俺が願ったこと、俺の思ったこと、その通りになぞれとは言わない。でも、別物として切り捨てず、それもまた、お前自身のものなのだと、受け入れて欲しい」
希うように、額を摺り寄せる。
「――……ああ、わかったよ。貴方の願いと思いを受け入れる。
だから、貴方も受け入れて欲しい。俺の取った選択を――犯罪者になる、覚悟を。
いくら願おうとも、それは変わらない。……変われない。だって俺はこの選択に後悔をしていないから。俺は、この道を歩んでいきたいと、未だに思い続けているから」
前世の俺は、あまりに綺麗だった。

だから、俺は怖かった。今俺が選んだ道は彼とはあまりに違いすぎて、否定されそうで、向き合うのが怖かった。ああ、認める。認めるとも。
俺が一番に、前世を受け入れていなかったのだと。
「……ああ。俺も、受け入れよう。君の決意と、覚悟を。
いつか君の思い描く未来で君が独りとなるとしても、俺はずっと君と共に在り続けよう」
少しだけ嬉しそうに、目の前で彼が笑った。

――溶けていく。感情が同調するように乖離が解け、交わっていく。
「怖いかい？」
「いいや、何だろう。ずっと隙間が空いている気がしていた胸の何かが満たされていく感覚」
「俺も、やっと眠れる気がするよ」
「……ねえ、気になっていたんだけれど。貴方はいったい何歳で死んだの？」
「……三十七、だったかなぁ」
「享年三十八歳……なんだ、全然おっさんじゃないか」
「そうだ。おっさんが何度も泣いてたんだ。最悪だな」
「その人生の半分も満たない人間の身体で良かったね」
「そのせいで涙腺が緩かったのかもしれないな。……さて、そろそろかな」
「……」
「……不安か？」
「不安……そうだね。……あの日、キリトに改めて友達になろうって言われた時、俺はなりたいと思ったんだ。……なれると、思った。……でも、それはもしかすると、本当は俺の感情じゃなくて、貴方の感情に引き摺られて出たものなのかもしれない。だから、目覚めた時、キリトを見るのが少し怖いんだ」

――お互いの境界線がわからなくなっていく。
「あの時抱いていた感情は、気にかけていた感情は全て貴方の物で、俺には何もなかったかもしれない。そうだったら、俺はキリトを俺自身の気持ちで友達として見られるのかなって」
「……ふ、ふははっ」
「……何で笑ってるんだよ」
「いや、なぁに、大丈夫さ。君がそう彼に対して思っている時点で、君の中できちんと彼の事を思い遣っているんだよ。ちゃんと、君の意思で彼と友達になりたいと願った筈さ」
――言葉が、耳じゃなく、胸に響いていく。
「いつかは彼とも違えることがあるだろう。君はその道を選んだのだから。でも、俺はそれでいいと思うよ。最悪で、最低な裏切りかもしれない。……それでも、俺は君と共に進んでやる。だから、いつかその時までは、君は君のしたいことをしていいんだ」
「……したい、こと、か」
「きっと、目覚めた時、わかるさ」
「それが、貴方の愛したストーリーを壊すことになっても？」
「そんな未来があるのなら、見てみたいと思わせておくれよ」
「……じゃあ、俺と一緒に見届けよう。三十八年なんて年数の何倍も、一緒に」
「ああ。俺は君だから」
「ああ。俺は貴方だから」
――さぁ、目を開けて。　”　Ａｌｕｚ　”

１８．第五十層　迷宮区　―　３

世界に、色がある。
目を開けた時、まず最初に思い浮かんだのはそれだった。
ハッとするほど鮮やかで、思わず反射的に目を細めた。
――眩しい。
目が眩むような感覚。それは今までに味わったことのない、不思議な感覚だ。
手探りでそれを自分のものにしようと恐る恐る瞼を開いていく。

「スイッチ！」
やっと目が目の前の光景に馴染んできた瞬間、聞こえてきた声に反射的に視線がそちらを向く。
あれからそこまで時間は経過していなかったようで、かの巨大な敵である第五十層のフロアボスは未だ顕現しており、そのＨＰゲージは残り一段の約半分を残していた。
それに対し、キリト達のＨＰは大分削れた痕があり、何とかＰＯＴローテを成立させているようだが皆六割から七割ぐらいまでしか回復は出来ていないようだった。
見るからに苦戦しているのが、わかる。スイッチで交代し突っ込んでいったクラインの攻撃が虚しく弾かれ、微々たる量しかダメージを与えられていない光景が目に入る。
いつの間にか、地面に膝をついていた身体を立ち上がらせた。
――行こう。
それが俺の、元は二人で、でも今は完全に一人である”俺自身”の選択だった。
腰にある細剣の柄を握る。これでは大した攻撃は与えられないかもしれないが、それでも俺の頭の中には立ち向かうという選択肢しか浮かばなかった。

もう、怖いと言う感情に支配され、身体が動かなくなることは無かった。
攻撃を弾かれたクラインは、カウンターのように繰り出される拳から逃れるように右へとステップを踏み回避する。そしてその隙を狙うようにキリトが突撃した。地面へと響く拳の脇をすり抜けて、その片手剣を肘関節部分を狙うように振り下ろした。
じり、と僅かにだが敵のＨＰゲージが抉れる。ソードスキルも発動していない攻撃ではその程度しか与えられないだろう。キリトが次の敵からの攻撃に備える。反対の拳から繰り出される攻撃を軽くいなすようにして受け止めつつ、声を響かせる。
「スイッチ！」
その声にアスナが反応しようと足を踏み出そうとした。その瞬間、それよりも速くそこへ駆け出していた俺が、その役目を担う。担う、というよりもは奪ったが、正しいが。
キリトやアスナ、クライン達がみんなして目を見開くのが、何となく雰囲気で伝わる。が、俺は躊躇い無く敵の懐に身体を滑り込ませ、急所部分になるだろう合金の関節部分を狙う。繰り出したのは片手用細剣技『フラッシング・ペネトレイター』。技通りの貫通までは狙えなかったが、約半分ほど残っていた敵のＨＰゲージの一割弱ほどをどうにか削り、軽いノックバックを与えることに成功する。
軽い硬直時間をくらいながら、じっと俺はフロアボスを見つめる。敵が動くのが先か、俺が動けるようになるのが先か――。という、駆け引きを行っていればかなり大きな声が近くでしたのと同時に、両脇の下に腕が回り引っ張られる感覚を覚えた。「おわっ!?」と思わず声を出しつつ、どんどんボスの姿が遠くなるのに気付き、そしてそこでやっと俺がクラインとキリトに両側を掴まれ引きずられるような形で後退させられたことを理解した。
「あ、あの、もうちょっと優しく引っ張ってくれても……」
「何言ってんだ！あんな無茶してよォ！」
「全くだ。敵がノックバックしてくれたから良かったものの、あんな誰もスイッチに入れないぐらいまで懐に突っ込んで……」

「……いや、……まぁ、すみません……」
両脇を掴まれていることで何となく足先が地についてない気がして、気まずさを覚えながら掴む二人に声を掛ければ逆に小言を貰う。緊張感あるボス戦である筈なのに、何だか気が抜けそうになるのを堪えつつ、心の籠っていない謝罪を口にしておく。やっとある程度の距離が稼げたのか二人に離してもらえば、アスナとエギルがこちらに寄って来るのが見えた。
「アルスさん！大丈夫？」
「ったく、無茶するんじゃないぜ。流石にひやっとしたぞ」
二人に対しても謝罪を述べては、改めて心配そうにこちらを見ているキリトと向き合う。
彼が言いたいことは何となくわかっていた。だからこそ、多くは語らずしっかりと頷くことで応える。
「俺も、戦うよ」

正直、ソードスキルなんてものを迂闊に使ってしまえば逆に命取りになり得るような戦いだ。
重撃としてカウント出来るのはエギルと辛うじてキリトのみ。クラインの得物ではやや威力に欠けてしまう。スイッチも上手く使いながら、どうにかヘイトを分散させることで隙を作り、攻撃するという形を繰り返す。
俺は、最初の戦略の時と同じようにスイッチには基本的には加担せず、攻撃を繰り返すことで狙いを分散させていた。それは、戦えるようになったが、それまで連携を取れなかった俺が攻撃リズムを崩す可能性を考慮した俺自身の提案であった。
「なに笑ってんですか」
そうは言っても、このボスの前で、先ほどよりも少ない人数で戦っている状態で一人で行動は危険ではある。故に、俺は絶対的な盾とも言えるユニークスキル『神聖剣』を扱うヒースクリフと組むような形で攻防を続けていた。それは、キリトが俺の提案に渋った末にヒース

クリフの方から妥協案として提案されたことだった。
流石に回復した方が良いだろう、と判断した俺は特に声もかけずにささっとヒースクリフの後ろに隠れようと後退する。マナー的には最悪ではあるが、彼に対してそのような声かけをするのが何となく癪でもうその行為を何回も行っていた。
敵の強撃を食らいながらも涼しい顔をしたままの彼を後ろから見ていれば、その口元が弧を描いているのに気付き、思わずそう声をかける。
「いや、君がこうしてボス攻略に参加する姿を見ているとつい、ね」
「……すみませんね。五十層近くサボっちゃって」
「構わないさ。その分、面白いものも見れた」
「……まぁ、これからは参加しますよ。やっと折り返しですし」
ＨＰゲージがフルまで回復するのを視界端で確認しては、彼の横を滑り出るように足を踏み出す。
「貴方が決めた勇者を、来たる時まで生かさないとでしょ？」
口元が七文字の言葉を付け足すのを最後まで聞き遂げた彼は、ふ、と軽く息を吐くようにして笑った。
「君の活躍に期待しているよ。アルスくん」

それからどれぐらいの時間が経ったのか。
じりじりと削るには削れていく敵のＨＰゲージも残すところ一割ほどとなっていた。
ＨＰゲージは何とか皆七割ほどをキープしているが、それよりも精神的な疲労が表に出ている。息も心なしが乱れ、攻撃に微かにキレが失われつつある。これ以上の長期戦はきついだろうというのは皆が気付いていた。
スイッチの掛け声と共に、キリトが前に出る。少し離れたところで俺も敵と対峙し、微々たる意味しかなさないだろう攻撃を繰り出す。他のメンバーは回復のために少しだけ下がっていた。

誰もが、気を張り詰めつつも、限界が近かった。
「っあ！」
声と地面に何かが響く音がしたのはその時だった。
「キリトくん！」とアスナの声が聞こえそちらを見れば、敵の攻撃を防ぎきれずに武器が弾かれてしまったキリトの姿が目に入る。すぐさまステップを踏んで後退しようとするも、間に合わず敵の追撃を食らってしまう。一気にゲージが削れ、ゲージの色が黄色に染まったのがわかった。
しかも、更に追撃をするようにキリトの方へもう一つの腕からなされる拳が振りかぶられる。誰もがやばいと駆け出す。しかし、このままでは間に合わないことも誰もがわかっていた。
反射的に駆け出していた俺も、心の中に微かな絶望が生まれる。守ると決めたのに、生かすと言ったばかりなのに、こんなところで失ってしまうのか。まだ、彼の本当の物語は始まりきっていないと言うのに――！
――いや、違う。まだだ。まだ、方法はある。
さっきみたいに『フラッシング・ペネトレイター』を使うか？いや、硬直時間が生まれさらなる追撃が来た時に対応出来ない。隙を作るなら、もっと確実な、それこそパリィを狙わないといけない。
なら、方法は。
頭で成功率やら最適な行動やらを考えるよりも先に、俺の右腕は手に持っていた細剣を躊躇い無くそこへ投げ付けた。
『アルスって細剣使いなのにＡＧＩ型じゃなくてＳＴＲ重視だよな』
勢いよく投げ付けられた細剣がキリトへ振り下ろされようとした腕にぶつかる。持ち前のＳＴＲが効いた投擲は、それなりの衝撃を与えられたようで攻撃のタイミングに微かに遅れを作る。俺は、そんなのを確認するよりも早く、走りながらも投げたことで空いた右手を動かし、慣れたようにメニューのとあるアイコンをタップする。
完了まで残り五秒。
――五。

ＡＧＩ型であるアスナが誰よりも先にキリトの元へと駆け付けて、その身体をキリトの前へと滑り込ませる。
――四。
細い剣を盾にするようにして攻撃に立ち向かう彼女の名前を彼が叫ぶ。
――三。
背中に重みを感じさせるような馴染み深い感触を覚える。
――二。
合金の腕が二人の元へ振り下ろされる。
――一。
間に合え。

ガキィィインッ!!と大きな音と共に、視界一面に星が散る。
金属と金属が擦り合い、その摩擦で生まれた火花のようなエフェクトが舞う中、タイミングをどうにか間に合わせることが出来たのか、敵はパリィを食らったことによるノックバックを発生させていた。
「アル……ス？」
背後から、聞き慣れた少年の声がする。
ちらりと、視線だけを後ろにやる。彼の視線は俺を含めた俺の手に持っているものを映している。
俺は、言葉を返さずに手にある本来の自分のメインウェポン――大鎌を構え直した。
決めるならば、ここしかないだろう。
「六撃目」
「は……」
「頼んだよ」
彼の問いたい内容を遮るように、それだけ伝えて俺はボスの元へ駆け出す。
敵は、あの大技である六連撃を仕掛けようとするモーションに入っている。上体を軽く捻るような構えから五連撃の後にもう一撃を広範囲で繰り出すあの大技を。

あの攻撃の最大の特徴は六連撃ではあるが、五連撃の後にタイミングよくもう一つの大技を繋げている構成となっている。そして、その五連撃はパリィのタイミングが非常に難しいのに対して、その六連撃目は広範囲の強力な攻撃な代わりにモーションに微かな隙が目立つのだ。

ちらりとＨＰゲージを確認すれば、残りは七割程だった。武器防御を持っているが、耐えきれるかは運次第と言ったところか。しかし、恐れは無かった。

キリトに、この意図が伝わっていることだけを祈りながら繰り出された一撃をいなすように軌道をずらすように防ぐ。じり、とそれでも与えられる衝撃によってＨＰが削れる。二撃目、三撃目、四撃目と同じように防ぐ。ＨＰは残り三割ほど。バーは黄色に染まり、微かに赤みを差してきた。

遠くからキリトではないだろう俺の名前を呼ぶ声が聞こえた気がする。しかし、俺はやめない。鎌の刃の側面に沿わせるようにして五撃目を受け流す。バーが赤く染まる。

そして、待ちに待っていた六撃目のモーションをボスが取る。タイミングを間違えて攻撃をもろに食らえば俺は間違いなく死ぬ。でも、俺の口元は笑っていた。

薙ぐような攻撃を繰り出す直前、微かに生まれたその瞬間を狙うように俺はソードスキルを発動させた。

攻撃が敵の攻撃とぶつかり合い、相手側が弾かれる。

最後のチャンスだろうその瞬間、俺は今まで生きてきた中で、一番の声を叫ぶ。

「キリトッッ!!」

彼は、全てを理解してくれていたように、攻撃を弾いた俺の横を駆け抜けていく。

「スイッチ!!」

お互いの声が、大きくこの部屋に響き渡った。

一面がまるで星屑のようなポリゴン片でいっぱいになり、空中に大きく「Ｃｏｎｇｒａｔｕｌａｔｉｏｎ！」と表示される。
それは、勝利の証だ。
中々実感を掴めなかったのか、暫くそこは静寂に包まれ、そしてクラインの声を始まりにその歓声は部屋を埋め尽くした。
戦意喪失してたくせに、なに我が物のように喜んでんだ。って言いそうになったが、水を差すだけだし何より、彼らだって戦いたい気持ちはあったからこの部屋に残っていたのだ。責めるべきは彼らではないだろう。
視界端で自分のＨＰを見れば、何とか数ドッドだけ残っていた。
最後の攻撃を弾いた際に受けたダメージがこれ以上だったらアウトだったなあ、と思いながら、喜びラストアタックを決めたキリトを囲うアスナ、クライン、エギル達を少し離れたところで見届ける。
重たいために持ち歩かない武器をストレージにしまっては、投げてしまっていた細剣を回収しようと一歩踏み出したところで。
「アルス!?」
俺の意識は無くなった。

プレイヤーを運ぶのは≪担架≫が必要だ。
だからこんなところで倒れてしまったらやばいだろうなぁ、と思っていたような気がする。
気がする、というのは、その思考が倒れた瞬間俺が思ったことなのか、それとも倒れた後に見た覚えのない夢の中で思ったことなのか、俺にはわからないからだ。
でも、これだけははっきりしている。目覚めた今、俺がいるところはあのフロアボスの部屋ではないということだ。
「……えー……っと……」
「あっ、起きた?」
視線だけを彷徨わせるも、全然現状を掴めなかった俺は、声を漏らした。

すると、その声に反応した声が聞こえこちらに近づいてくる。肯定の言葉を返しながら上半身を起こせば、その声の主があの血盟騎士団副団長であるアスナだということに気付き、身体が硬直した。
「……えっと……？」
さっきと同じ言葉が口から滑り出てくる。何で彼女がここにいるのか、というより何で自分の面倒を彼女が見ていたのか。ＨＰはいつの間にかフルまで回復している。その上ここは圏内だろう。
よくよく見ればここが自分の取っていた宿屋の部屋であることに気付く。そして、己のパーティーにキリトの他にアスナ、クライン、エギルが追加されていることにも気付いた。大体予想はつくが、多分宿屋の部屋の出入りを可能にするためにパーティーを組んだのだろう。
……と、いうことは、だ。
「お！起きたか！」
「いきなり倒れたから心配したぜ」
「アルス！大丈夫なのか？」
「……大丈夫だけど、現状理解が出来なくて大丈夫じゃない」
ある意味予想通り、男三人が部屋に入ってきたところで俺はこの状態になった経緯が想像できず、素直に混乱を訴えた。

話を聞けば。
どうやら俺が倒れたあと、治癒結晶で回復はしたものの、全然目を覚まさないことから相談した結果、転移結晶で圏内へ戻り、そこから≪担架≫でここまで運び寝かされていたらしい。
転移門のアクティベートは血盟騎士団団長であるヒースクリフの元行ってもらい、キリト達は皆何故か俺を優先してくれたらしく、目が覚めるまでこうして待ってくれていたようだ。因みに俺の細剣は回収してくれていた。
ある程度現状を理解できたおかげで冷静さを取り戻してきた俺を確認したキリトは、心配げな表情をそのままに俺に問いかけてくる。
「何で倒れたかとか心当たりあるか？」
「んー……多分、普通に疲れたからだと思う。流石にあの状況は精神

的に疲労がやばかったから……」
　実際、何で倒れたかという決定的な理由は無い。けれど、多分これはただの疲労だろうと自分の中で確信していた。ソロ状態で戦っていた後、彼らは知らないけれど俺は俺自身との葛藤の末、あの戦いに参戦したのだ。その上、この正式サービスから使っているところをこの武器を作ってくれた奴以外には見せたことない、俺の本当の相棒である武器を使っての戦いにそれなりに、いやかなり緊張したのだ。しかもあんな生きるか死ぬかの瀬戸際で。
　キリトも俺の言葉に納得したように特に言及はせず、ただ無理はするなと言葉を付け足すだけで終わる。しかし、その瞳は何かを問いかけようとするも、出来ないでいる迷いを滲ませていた。
　何か、言ってやった方が良いだろうか、という感情になる。キリト、と声をかけようと口を開こうとするも、それを遮るようにクラインの声が響く。
「てかよ！アルス、お前あの武器なんだ!?大鎌って、そもそもこのソードアート・オンラインにあんな武器あるのかよ!?」
「……えっと、あれは一応両手斧の分類に入るんだよ。両手斧だと斬撃特化なんだけど、鎌は一応打撃も対応もしてるんだ。……ただ、重いし癖が強いから、あんまり使ってる人は見ないかもしれない」
「へぇー……因みによ？お前普段は細剣使ってっけど、その両手斧のスキルはどれぐらいなんだ？」
「クライン、そりゃマナー違反の分類だろ」
「気にしなくていいよ。……ただ、そうだな……実のところ、細剣よりも熟練度は高かったりする」
「おわっ、マジかよ……つか、なら何で細剣使ってたんだ？」
「……新しい武器を使ってみたかったってのと……そっちの方が何かと都合が良かったからかな」
「都合？」
「いや、なんでもないよ」
　クラインの質問に、時々その質問内容を咎めるエギルを制しながら答えていく。

キリトは俺の言葉を聞けば聞くほど眉間に皺を寄せているし、アスナは俺が目覚めたことをどうやら団長様に報告しているのかホロ・ウインドウを開き画面を操作していた。
そして、ある程度の時間が経ち、日も暮れ始めたのを見てアスナ、クライン、エギルの三人がお暇すると立ち上がる。
「何だか心配かけちゃったみたいで、悪かったね」
「いやいや、アルスがいなかったら突破出来たかも危ういぐらいだ」
「そうだな。お礼を言うのはこっちの方だ」
「今日は取り敢えずゆっくり休んで、落ち着いたらまた攻略に協力してくれたら有り難いわ。今日はありがとう」
お互いに礼を言い合い、別れを告げる。
話を聞けば、エギルはこの第五十層に店を構えるから攻略戦に参加する回数も減るかもしれないとのことだったし、クラインももうちょっとギルド全員のレベリングすると言っていたし、次の層への攻略開始にはもう少し時間があるだろう。
その間に心も身体を休めて、次の攻略にも参加できるようにしよう。
……その前に。
部屋の中で一人、未だに迷いを浮かばせている黒の少年と向き合う。
「キリト」
「……アルス。一つ、聞いてもいいかい？」
「……ああ。俺も、キリトに話したいことがあるから」
「……アルス、君は」
少しだけ眉を下げて、でも、懐かしさを隠せないと言ったような表情を浮かべた彼は問いかける。
「”Ｌｉｇｈｔ”、なのか？」

19．第五十層　アルゲード　―　4

Ｌｉｇｈｔ。
――ライト。
確かに俺は、光を意味するこの名前を名乗っていた時期がある。

「第十一層で……彼らと会った時に、キリト、お前がいたことに少なからずびっくりしてたんだ」
懐かしむように語らえば、複雑な表情を誤魔化せず視線が微かに揺れる彼の姿が視界に入る。
「お前がレベル二十じゃないって直ぐにわかったのも、それが理由」
二人きりになった部屋は、やけに静かだなと感じた。先ほどまで、今の倍の人数がここにいて、そして、その前は色んな声色が飛び交う戦場にいた。あまりの差に、思わずあの戦いたちは夢だったんじゃないかと錯覚しそうになる。
でも、そんなわけがないと全てが自分に語り掛けてくる。戦場に赴く前よりも鮮明に彩りを感じる視界。胸の奥底にこびりつくかのように抱いていた恐怖は、もう殆ど無い。
あれは現実にあったことだ。間違いないと、断言出来る。
自分はもう、戦える。　自分はもう、向き合える。
そんな確信がある。だからこそ、彼――キリトの問いに素直に頷くことが出来た。
「……ライト、俺……」
「おい、ちょっとキリト、待ってくれ」
「え」
「確かに俺は〝Ｌｉｇｈｔ〟だった。　でも今は〝Ａｌｕｚ〟だ」
「……あ、……」
「同じ人間ではあるけれど、違うんだ。　……だからちゃんとアルスって呼んでほしい」
「……っ、悪い。　なんというか、懐かしくて……つい……」

「……まぁ、それもそうだろうなぁ」
この、〝Ｌｉｇｈｔ〟というアカウントは、それこそこのソードアート・オンラインのベータテストの時に使っていたデータのことだ。
俺はとある諸事情からそのアカウントを使わずに製品版では新しいアカウントでこのゲームに参加した。そのために、元ベータテスターの人達も、俺が元ベータテスターの一人であることに気付かなかったのだろう。
それは、目の前にいるキリトも同じ。先日言葉を交わした、アルゴもだ。
だがしかし、赤の他人のベータテスターとキリト、そしてアルゴは少し事情が変わってくるのも事実だった。
……と、いうのも。
「ベータテストとはいえ、元パーティメンバーだった、なんてびっくりするよな」
そう。キリトと俺は、このソードアート・オンラインのベータテスターとしてゲームに参加してた時、パーティとして一緒に組んでいたのだ。
初めからずっと一緒だった、というわけではない。けれど、下層のフィールドで頻繁に会っていたために、俺の方から話を掛けた。向こうは最初は少し戸惑った様子ではあったが、話していく内に気付いたら意気投合し、パーティを組むような仲になっていた。
思い返せば酷く懐かしい思い出達。一年以上前だけれど、暖かな記憶として自分の中で残っている。
それは、俺が自分の前世の記憶を思い出したとしても色褪せることのない思い出でもあった。勿論、それを踏まえていたとしても、前世の記憶を取り戻してから実際にキリトに会った時は、自分の大好きだった小説の登場人物、という感動が勝ってしまったのも事実だが。
ベッドから身体を起こした状態のまま、身体の方向だけをきちんとキリトに向き直す。
自分から問いかけておきながら、なんと声を掛けたらいいのかと戸

惑っているキリトを視界に捉えてから、ゆっくりとその頭を真っ直ぐに下ろす。
「あ、アルス!?」
「ごめん、黙ってて。　……ベータテストの最後の時、酷いこと言ったことも、本当にごめん」
慌てて俺の名前を呼んだその声は、俺の謝罪の言葉にひくりと息を吸うように一度固まった。それはまるで、触れて良いものかと悩んでいたことを、的確に告げられたことによる動揺のようにも感じ取れる。
思い出す記憶達は、暖かなものばかり。……けれど、その記憶の終わりは、なんとも切ないものでもあった。
彼は実年齢より上に見られがちな言動をする。今思えば、当時の自分も、彼のことをもっと高年齢であると思って言葉をぶつけていたようにも思える。実際は、自分と何ら変わらない――寧ろ、前世の記憶を保持した自分にとって今では遥かに幼いとも言える――少年だったというのに。
でも、それは言い訳にしか過ぎない。だからこそ、自分が出来るのは謝罪だけ。いつか打ち明けなければという気持ちはあったけれど、今の今まで引き延ばしてきたのは、その覚悟が無かったからだ。けれど、今は違う。
「……アルス、顔を上げて」
「……でも」
「……確かに、あの時のアルスの言葉は、……正直、きつかった。けど、今思うと、アルスの言うことを聞いておけばよかったな、って思うから」
「……っ、それは」
「だから、良いんだ。　俺の方こそ、ごめん。気付かなくて……気まずかったと、思う」
そろりと顔を上げて、黒髪の彼の表情を窺えば、少しだけ下げた眉で薄く笑む姿が視界に映り込む。胸の奥が、ぐわりと熱く痛むようなそんな感覚を覚えた。きっとそれは錯覚だろうけれど、痛む胸が苦し

くて、上手く言葉を紡ぐことが出来なかった。

共にベータテストをプレイしていたある日、俺とキリト、そしてアルゴの三人で会話をした時があった。

内容は、製品版となるソードアート・オンラインについて。

ベータテストでのレベルやスキルなどは引き継ぐことは出来なくても、そもそものアカウントはそのまま流用出来るという話に関して。勿論リリースと同時に起動するだろうと当然のように言い合う二人に対して、俺は否定的な言葉を吐いたのだ。

驚きと動揺を見せた二人に対して、自分は躊躇いなく言葉を続ける。

製品版をプレイする気はないこと。したとしてもアカウントは変えること。二人も、もしするならリリースから一日でも良いから間をあけた方が良いんじゃないかということ。

意味が分からないと告げるキリトに対して、当時の俺は酷く冷めた目を向けたような気がする。自分だって、アカウントを変えたところでベータテスターと言われる分類に入ると言うのに。まるで、蔑むかのような視線。

『俺、嫌いなんだよね。　先取り知識を見せつけてプレイとかする奴』

多分もう二度と会わないだろうけど。それじゃあ、さよなら。

目を見開いて、言葉を失った彼の方など目もくれず、一方的な別れを告げて俺はそのままログアウトをした。そして、リリースの日まで、再びソードアート・オンラインを繋ぐことは無かった。

どう考えても、酷い言葉だったと思う。その時は未来など知らなかったが、小説を知っている今の自分にとって、あの言葉はキリトを酷く傷つけただろうことは容易に想像できる。フレンドに対して、やや抵抗感を見せた一端を担っているのは間違いなくこれも関係があるだろう。

正直、今の自分が過去に戻れたとしても二人に製品版をプレイすることは勧めないとは思う。だって、こんなデスゲームになるって知っていたら、俺は止める。大切な友人だと思っているから。けれど、絶

対にあんな言い方はしない。あれは、止めるなんて行為とは呼べない、ただの暴言に近いものだからだ。
だからこそ、俺は自分が〝Ｌｉｇｈｔ〟だと打ち明けた時に謝罪と同時に、二人からの罵倒でも何でも、受け入れようと思っていた。
心優しい少年であることは知っていたが、それでも、許せないものは許せないだろう。許してもらえなくてもいいとさえも考えていた。許してくれなくてもいいから、この一方的な自己満足とも言える謝罪だけは言わせて欲しいと。
けれど、実際返ってきたのは、許しどころの話では無かった。
アルゴもそうだった。あの時、自分がＬｉｇｈｔであることを告げた後、俺は彼女と二人で場所を移動した。
そして、当時のことを詫びた。あんな酷いことを言ったのに、情報を操作してくれていたことへの感謝も込めて告げた言葉に、彼女もまた苦笑に近い笑みを浮かべて首を左右に振ったのだ。
『結局、お前の言うとおりだったからナ』
その時に抱いたのは、安堵でも感謝でも無く。――どうしようもないほどの、怒りだった。
それは目の前の彼に対してじゃない。あの時の彼女に対してでもじゃない。自分に対しての、言葉になんて出来ないぐらいの、憤り。
「……事実がどうとかじゃない。　あの時、俺は、確かにお前を……二人を傷つけたんだ」
軋みそうになるほど心音が大きく鳴り響いている。この仮想ばかりのソードアート・オンラインで現実の世界と同期されているものは呼吸と心音だけだという。じゃあこのうるさいぐらい鳴り響いている鼓動は、現実世界でもそうなのだろうか。それを確かめる術を、今の俺は持ち合わせてはいないけれど。
震える呼吸を無理矢理整えて、言葉を吐き出した。アルゴにも告げた言葉でもある。アルゴは、気にするなと告げても俺が納得しないのも理解出来ると俺の謝罪を受け入れた上で、三つほどこちらに要望を投げかけたが、キリトはきっとそんなこともしないだろう。

だから、俺は頭を下げるしかなかった。こんなことしか出来ない自分が酷く不甲斐ないが、だけど、この過去を明かした上で、これからも彼と共にこの世界を走り抜けて行きたいと思うのであれば、そこに妥協など許されない。
「本当に、すまなかった」
「……」
暫しの沈黙が、この部屋を埋め尽くす。顔を下げたままの自分は、キリトが今どんな顔をしているか、何を言おうとしているかなど察することも出来ない。
気まずい空気が、全身に突き刺さる。罵倒でも、何でも受け入れる覚悟はあったけれど、だからと言って怖くないわけじゃない。
キリトに、嫌われるのが怖い。　俺にとって、大切な友人だから。
けれど過去の過ちが消えるわけじゃない。何だってそうだ。俺が一ヶ月以上このゲームで動けなかったのだって、月夜の黒猫団のことだって、変えることが出来ない。だから、それを受け入れて進んでいく。それしかない。それしかないんだ。
ぐるぐると思考が行ったり来たりと繰り返す中、空間を包んでいた静寂を打ち壊すかのように大きなため息が頭上から吐き出された。
「アルス」
その声は、少しだけ堅い。まるで咎めるような声色だ。
頭を下げたまま、返事を返す。
そんな俺の様が気に入らなかったのか、次は両肩を強く掴むかのように、手が置かれた。
「くどい」
「……は」
「俺は気にしてないって言ってる。　確かに傷付いた。けど、製品版をプレイして、このデスゲームに参加して、わかった。　知識は武器になる。それはそこらの剣よりも強靭なものだ。　このゲームに魅入られていた俺は、製品版でベータテストの時の続きを早くやりたい、このゲームに浸りたいという思いばかりで……他なんて気にしちゃいなかった。それが、今の俺が背負う〝ビーター〟という罰みた

いな形なんだと思う」
「な、に」
「アルスは、あの時嫌いだと言いつつも、俺達に止めろとは言わなかった。　……ただ、純粋に何も知らぬ初めてのプレイヤーに楽しんで欲しかったんじゃないか、って、このゲームを始めて暫く経ってから、思ったんだ」
　違う。そんな言葉を吐きたかったけれど、出てこなかった。
　そんな綺麗なもんじゃない。本当は、もっとドロドロした、汚い理由だ。けれど、その真実は言えない。
　あの時俺は、どうしても彼等と縁を切らなくてはならなかった。ただ、それだけだった。
「もう、この話を引きずるのはやめにしようぜ。　過去の仲違いも、喧嘩も、何だって引き摺り続けても辛いだけだ」
「……おう」
「……と、いうか正直俺もすっかり忘れてたんだよな。　なんというか、それから色々とあったし……」
　両肩に乗っていた手の内の片方が無くなり、僅かばかり掛かっていた重さが軽くなる。その反動でちらりと視線を上げれば、キリトが先程まで真面目な声色を発していたとは思えないぐらい、何とも気まずげに頬を掻いていた。
「寧ろ、アルスがライトだって気付いて、そこで思い出したっていうか……」
「……キリト？」
「あ、いや、悪気は無いんだけど……」
　じとりと視線が胡乱気なものになるのも無理はない。強く言える立場にないが、だからと言って忘れていた、というのは些か薄情にも感じた。こっちはずっと気にしていたのに。特に前世の記憶を思い出してから、やたらとその時の発言を後悔したと言うのに。
　しかし、そのことについて触れることをしなかったのも事実。キリトがアカウントもデータも全く違う自分に気付くわけがないのだから。こちらから何かアクションしない限りはこのまま完全な初対面

のまま進み続けただろう。
言えなかった理由は沢山あるが――結局は、俺に覚悟が足りない腰抜け野郎だったってことだ。
咎めるようにじっと視線を向けた俺の視線に、キリトが見つめ返してくる。ものの数秒、どちらともなく吹き出し笑いを零しては、先程までの凍てつくような空気はほんのりと暖かなものへと変わっていた。
――あの時、ベータテストの時、知り合えたのがキリトで良かった。
そう、呟くように吐き出せば、それは俺もだよ、と笑みながら答えてくれた目の前の友人の存在が嬉しくて、ふは、と息を吐くような笑いが柔らかに溢れた。

「……取り敢えず、次からは俺も戦線に参加出来る、と思う」
「ん。よろしく頼むぜ。　……っと、そうだ」
「ん？　なんだよキリト」
「アルスがそんなにライトの時の事を気にしてるってなら……いや、それは関係ないな、ちょっと手伝って欲しいことがあって」
「なんだよ。俺が手伝えることがあるなら勿論手を貸すけど」
「えっと、その、な？　これ見てもらえるか？」
キリトの右手の人差し指と中指がすっと揃えられ、そのまま身体の前で平行に指先が宙をなぞる。鈴が鳴るようなＳＥが響き、出て来たホロ・ウィンドウを指先でタップして操作する彼の示すものを待つかのように、首を傾げる。
「ほら、これ」
「ん……？　……んん？　これ……は」
「いつの間にか、スキルスロットに入ってたんだ。　……〝二刀流〟」
キリトが見せてくれたスキルスロットに存在している、見慣れたような記憶を持ちながらも、珍しいものを見たような感覚を覚えさせるスキル――二刀流。
タイミングとしては第五十層を踏破したタイミングのようにも感じるが、キリト曰く暫くスキルスロットを確認してなかったせいで確

証がないとのことで。
「エクストラスキルなのか、何なのかまではわからないけれど、まだ、口外はしない方がいいかなって……」
「そう……だな。もしかすると、血盟騎士団団長であるヒースクリフみたいにユニークスキルの可能性もあるわけだし」
「だよなぁ……。でも、折角手に入れたスキルなんだからさ、俺としては使ってみたいし、極めてみたいなー……なんて」
「……なるほどね？」
キリトが言わんとしている申し出を先回りで推測する。要は、この二刀流スキルの熟練度上げのために、練習に付き合って欲しいのだろう。
「俺も人と共にする戦闘に慣れていきたいし、願っても無い話だな」
嬉しそうに微かに目を見開いたあと、笑う彼の顔はこのゲームに参加した時の姿のせいで幼さが残る少年の笑みで。
胸に残る、決して明かせることは無い小さな靄を隠して、俺も同じように笑みを浮かべた。